

水上(2)遺跡

— 津軽ダム建設事業に伴う遺跡発掘調査報告 —

2012年3月

青森県教育委員会

水上(2)遺跡

— 津軽ダム建設事業に伴う遺跡発掘調査報告 —

2012年3月

青森県教育委員会



遺跡遠景（北東から）



調査区近景（南から）



SI-1005 完堀（東から）



SI-1005 出土土器

序

青森県埋蔵文化財調査センターでは、平成15年度から津軽ダム建設事業予定地内に所在する遺跡の発掘調査を実施しています。平成22年度は、砂子瀬遺跡、芦沢(1)遺跡、水上(2)遺跡、大川添(1)・(2)・(3)遺跡の発掘調査を行いました。

調査の結果、水上(2)遺跡では、縄文時代前期末葉から中期末葉の竪穴住居跡・土坑・土器埋設遺構・盛土遺構・捨て場などが発見され、大規模な集落跡であったことがわかりました。

本報告書は、平成22年度に行われた水上(2)遺跡発掘調査事業の調査成果をまとめたものです。

この成果が今後、埋蔵文化財の保護と研究等に広く活用され、地域の歴史を理解する一助となることを期待します。

最後に、日頃から埋蔵文化財の保護と活用に対してご理解をいただいている国土交通省東北地方整備局津軽ダム工事事務所に厚くお礼申し上げますとともに、発掘調査の実施と報告書の作成にあたり、ご指導、ご協力いただきました関係各位に対し、深く感謝申し上げます。

平成24年3月

青森県埋蔵文化財調査センター

所長 松田守正

例 言

- 1 本書は、国土交通省 東北地方整備局 津軽ダム工事事務所による津軽ダム建設事業に伴い、青森県埋蔵文化財調査センターが平成 22 年度に発掘調査を実施した西目屋村水上(2)遺跡の発掘調査報告書である。発掘調査対象面積は 20,000㎡、発掘調査面積は 3,500㎡である。
- 2 水上(2)遺跡の所在地は青森県中津軽郡西目屋村大字砂子瀬字水上、平成 21 年 3 月に刊行された青森県遺跡地図による遺跡番号は 343025 である。
- 3 水上(2)遺跡の発掘調査は、平成 18 年度に第 1 次調査を、平成 20 年度に第 2 次調査を、平成 21 年度に第 3 次調査を実施しており、本書は平成 22 年度に実施した第 4 次調査の発掘調査報告書である。
- 4 発掘調査及び整理・報告書作成の経費は、発掘調査を委託した国土交通省 東北地方整備局 津軽ダム工事事務所が負担した。
- 5 発掘調査から整理・報告書作成までの期間は、以下の通りである。

発掘調査期間	平成 22 年 8 月 3 日～10 月 28 日
整理・報告書作成期間	平成 23 年 4 月 1 日～平成 24 年 3 月 28 日
- 6 本書は、青森県埋蔵文化財調査センターが編集し、青森県教育委員会が作成した。執筆は、第 1 章、第 2 章、第 3 章、第 4 章第 1 節、第 5 章を佐々木雅裕文化財保護主査が担当し、第 4 章第 2 節を菅原優太文化財保護主事と荒谷伸郎文化財保護主事が担当した。依頼原稿については、文頭に執筆者名を記した。
- 7 本書に掲載した土器実測図は、佐々木雅裕文化財保護主査が担当し、石器実測図は、菅原優太文化財保護主事と荒谷伸郎文化財保護主事が担当した。
- 8 発掘調査から整理・報告書作成にあたり、以下の業務については委託により実施した。

石器の石材鑑定	青森県立郷土館主任学芸主査 島口 天
遺物の写真撮影	シルバーフォト、フォトショップいなみ
- 9 発掘調査成果の一部は、現地見学会、発掘調査報告会等において公表しているが、これらと本書の内容が異なる場合は、正式報告として刊行する本書がこれらに優先する。
- 10 発掘調査及び整理・報告書作成における出土品、実測図、写真等は、現在、青森県埋蔵文化財調査センターが保管している。
- 11 発掘調査及び整理・報告書作成に際して、下記の方々と機関からご協力・ご指導を得た。(敬称略、順不同)

西目屋村教育委員会、小林達雄、富樫泰時、三宅徹也、角張淳一、山本典幸、中村大、加藤里美、上條信彦、阿部昭典、加藤元康
--
- 12 本書に掲載した地形図(遺跡位置図等)は、国土地理院発行の 25,000 分の 1 地形図「川原平」及び西目屋村役場発行の 25,000 分の 1 地形図「西目屋村管内図」を複写・加工して使用した。
- 13 計測原点の座標値は、世界測地系に基づく平面直角座標第 X 系による。
- 14 挿図中の方位は、すべて世界測地系の座標北を示している。

15 全体図等の縮尺は、遺跡位置図を50,000分の1、調査区域図を5,000分の1、遺構配置図を500分の1とし、挿図ごとにスケールを示した。

16 遺構については、原則として検出順にその種類を示す略号と通し番号を付したが、平成18年度・平成20年度・平成21年度の発掘調査で使用した番号との重複を回避する目的で、種類別に1001から通し番号を付した。なお、遺構に使用した略号は、以下の通りである。

SI - 竪穴住居跡、SK - 土坑、SN - 焼土遺構、SR - 土器埋設遺構、SP - Pit(柱穴等)

17 発掘調査において略号と通し番号を付して精査を行った結果、欠番として登録した番号は、以下の通りである。

SK-1006、SP-1001、SP-1002、SP-1009

18 遺構実測図の土層断面図等には、水準点を基にした海拔標高を付した。

19 遺構実測図の縮尺は、60分の1を基本とし、版面に応じて適宜変更した。挿図にはすべてスケールを示した。

20 遺構実測図に使用した網掛けの指示は、以下の通りである。

 焼土  貼床  硬化面

21 遺跡の基本土層にはローマ数字、遺構内堆積土層には算用数字を使用した。

22 基本土層・遺構内堆積土層の色調表記には、『新版標準土色帖 2006年度版』（小山正忠、竹原秀雄）を使用した。

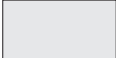
23 遺物について、その種類を示す略号を付した。遺物に使用した略号は、以下の通りである。

P - 土器、S - 石器・石製品・自然礫

24 遺物実測図には、挿図毎に通しの図番号を付した。同一個体と考えられる土器等には、図番号に小文字アルファベットを組み合わせて表記した。

25 遺物実測図の縮尺は、原則として縄文土器は3分の1、礫石器は3分の1・6分の1、石製品・剥片石器は2分の1に統一し、挿図毎にスケール等を示した。

26 遺物実測図に使用した網掛けの指示は、以下の通りである。

 磨痕範囲（石器）

27 巻末に遺物観察表・計測表を付した。計測表の（ ）内の数値は現存値である。

28 縄文原体の基本的な分類は『日本先史土器の縄紋』（山内清男 1979）に準拠した。

29 引用・参考文献は巻末に一括したが、依頼原稿については文末に付した。

30 遺物写真には、遺物実測図と共通の図番号を付した。

31 遺物写真の縮尺は統一していない。

目 次

序

例言

目次・挿図目次・図版目次

第1章 調査の概要	1
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査の方法	1
1. 発掘作業の方法	1
2. 整理・報告書作成作業の方法	3
第3節 調査と整理の経過	4
1. 発掘作業の経過	4
2. 整理・報告書作成作業の経過	5
第2章 遺跡の環境	7
第1節 遺跡の位置と周辺の遺跡	7
第2節 水上(2)遺跡の地形・地質	8
第3節 遺跡の基本土層	11
第3章 検出遺構	13
第1節 検出遺構の概要	13
第2節 検出遺構と出土遺物	13
1. 竪穴住居跡	13
2. 土坑	22
3. 土器埋設遺構	24
4. 焼土遺構	25
5. Pit	25
第4章 出土遺物	26
第1節 出土土器	26
第2節 出土石器	29
第5章 まとめ	49
引用・参考文献	50
遺構観察表	51
遺物観察表	52

写真図版

報告書抄録・奥付

挿図目次

第1章 調査の概要	
図1 遺跡周辺の地形と発掘調査区域	6
第2章 遺跡の環境	
図2 遺跡の位置と周辺の遺跡	7
図3 水上(2)遺跡の調査区	9
図4 遺跡の基本土層	11
図5 遺構配置と調査区の座標系	12
第3章 検出遺構 / 第4章 出土遺物	
図6 SI-1001・1002・1003	31
図7 SI-1004・1005	32
図8 SI-1006・1007・1008	33
図9 SI-1009・1010・1011・1012、SR-1002	34
図10 SK-1001～1009、SN-1001～1003	35
図11 Pit 分布状況	36
図12 SI-1001・1002・1003(1) 出土土器	37
図13 SI-1003(2)・1004・1005(1) 出土土器	38
図14 SI-1005 出土土器(2)	39
図15 SI-1005 出土土器(3)	40
図16 SI-1005(4)・1006・1007 出土土器	41
図17 SI-1008・1009・1010・1011、SR-1002、SK-1007(1) 出土土器	42
図18 SK-1007(2)、遺構外出土土器(1)	43
図19 遺構外出土土器(2)	44
図20 SI-1001・1005・1006・1008 出土石器	45
図21 SI-1010、遺構外出土石器(1)	46
図22 遺構外出土石器(2)	47
図23 遺構外出土石器(3)	48

図版目次

巻頭図版 1	遺跡遠景・調査区近景
巻頭図版 2	SI-1005 完掘・出土土器
図版 1	遺跡近景・調査区南側全景
図版 2	基本土層
図版 3	SI-1001・1002・1003・1005 配置状況、SI-1006・1007・1009・1010・1012 配置状況
図版 4	SI-1001～1002(1)
図版 5	SI-1002(2)～1005(1)
図版 6	SI-1005(2)～1007
図版 7	SI-1008～1009
図版 8	SI-1011～1012、SK-1001～1005
図版 9	SK-1007～1009、SN-1001～1003、SR-1002
図版 10	SI-1001～1004 出土土器
図版 11	SI-1005(1) 出土土器
図版 12	SI-1005(2)～1011 出土土器
図版 13	SK-1007、SR-1002 出土土器、遺構外出土土器、底部の網代痕例
図版 14	外傾接合を示す例、文様の下描きが観察される例
図版 15	SI-1001・1005・1006・1008・1010、SK-1007 出土石器、遺構外出土石器(1)
図版 16	遺構外出土石器(2)

第1章 調査の概要

第1節 調査に至る経緯

岩木川総合開発事業の一環として建設される津軽ダムは、昭和35年に完成した目屋ダムの度重なる計画規模を超えた出水による洪水や渇水の被害などを防ぐ目的で計画され、昭和58年から建設省東北地方建設局青森工事事務所による予備調査や実施計画調査が行われ、平成5年11月に「ダム基本計画」が公示された。

平成14年には、国土交通省東北地方整備局津軽ダム工事事務所（以下「津軽ダム工事事務所」という。）から青森県教育庁文化財保護課（以下「県文化財保護課」という。）へ、津軽ダム建設予定地内に所在する埋蔵文化財包蔵地の取扱いに関する協議の依頼があり、これを受けて同年7月に、津軽ダム工事事務所、県文化財保護課、西目屋村教育委員会の3者により、現地踏査と津軽ダム建設工事の工程・内容、津軽ダム建設予定地内の埋蔵文化財調査の進め方等についての協議が行われた。その後、県文化財保護課による分布調査が実施され、津軽ダム建設予定地常時満水区域内の埋蔵文化財調査対象範囲を12地区、総面積約768,000㎡と確定した。

発掘調査は、青森県埋蔵文化財調査センター（以下「県埋蔵文化財調査センター」という。）が担当して実施することになり、平成15年度には大川添地区と川原平地区に所在する遺跡の範囲・性格・内容等の確認調査、平成16～18年度には水上(1)遺跡の発掘調査、平成18年度には砂子瀬地区および美山湖右岸地区の確認調査、平成19年度には砂子瀬遺跡・水上(3)遺跡・水上(4)遺跡、平成20年度には砂子瀬遺跡・水上(2)遺跡・大川添(2)遺跡、平成21年度には砂子瀬遺跡・芦沢(1)遺跡・水上(2)遺跡・水上(4)遺跡・大川添(1)遺跡・大川添(2)遺跡の発掘調査を実施した。

平成22年度の発掘調査は、4月に津軽ダム工事事務所および県文化財保護課、県埋蔵文化財調査センターによって当該年度の発掘調査予定について協議が行われ、津軽ダム関連工事の進捗状況に伴い、砂子瀬遺跡・芦沢(1)遺跡・水上(2)遺跡・大川添(1)遺跡・大川添(2)遺跡・大川添(3)遺跡の発掘調査実施を確認した。なお、周知の埋蔵文化財包蔵地に対する土木工事のための発掘に関する通知は、各遺跡の発掘調査が実施される年度に国土交通省津軽ダム工事事務所長から提出され、青森県教育委員会教育長から事前の記録保存のための発掘調査を実施するよう指示がなされている。また、工事に伴う事前の準備や発掘調査時の安全管理および設計変更に伴う調査区域の変更などについても、その都度関係諸機関と協議を行いながら調査を進めた。

第2節 調査の方法

1. 発掘作業の方法

平成18年度の第1次調査から平成21年度の第3次調査を通じて、竪穴住居跡、土坑、盛土遺構、捨て場（斜面盛土）、石棺墓等で構成される縄文時代中期の大規模な集落跡であることが把握されるに至った。

〔測量基準点・水準点の設置・グリッドの設定〕

平成22年度の調査では、平成20年度の調査で測量業者に委託して設置した基準杭を基点に、調査区内に4m×4mのグリッドを設定した。各グリッドは、南から北にローマ数字とアルファベット（A

～Y)、西から東に算用数字を付けて、その南西隅の組み合わせで呼称した。

実測基準点となったグリッドの国土座標(旧日本測地系)は、ⅠA-0グリッドが $X = 57900.000 \cdot Y = -52400.000$ 、ⅡA-25グリッドが $X = 58000.000 \cdot Y = -52300.000$ 、ⅢA-50グリッドが $X = 58100.000 \cdot Y = -52200.000$ 等となる。測量原点には、測量業者のGPS測量機による3級基準点No.1-1(世界測地系で $X = 59,447.727 \cdot Y = -49,822.025 \cdot Z = 182.168$)、4級基準点No.1-2($X = 59,328.712 \cdot Y = -49,782.409 \cdot Z = 190.539$)、これを基準に設置したメッシュ杭M2($X = 59,520.000 \cdot Y = -49,840.000 \cdot Z = 180.928$)、M3($X = 59,520.000 \cdot Y = -49,820.000 \cdot Z = 180.424$)、M4($X = 59,520.000 \cdot Y = -49,780.000 \cdot Z = 181.054$)を使用した。レベル原点も3級基準点No.1-1、メッシュ杭M2、M3、M4を基準とし、必要に応じ実測基準点から原点移動して設置した。

〔基本土層〕

遺跡の基本土層については、表土から順にローマ数字を付して呼称した。また、大別層で細別が可能な場合は枝番を採用した。なお、基本土層の土層番号は、平成18年度・平成20年度・平成21年度調査時の層序とは異なる。

〔表土等の調査〕

遺跡範囲内の表土等の調査は、これまでの調査により遺物が希薄な状況が確認されており、また、調査区が広く客土で覆われていることから、重機を併用して掘削の省力化を図った。出土した遺物は適宜グリッドと層位を基準に取り上げた。

〔遺構の調査〕

検出した遺構には、原則として確認順に種類別の番号を付けて精査した。土層観察用の畦は、遺構の形態や大きさ等に応じて、基本的には四分割又は二分割で設定したが、遺構の重複や付属施設の有無等により必要な場合はサブトレンチとともに追加設定した。遺構内の堆積土層には算用数字を付けて、ローマ数字を付けた基本土層と区別した。遺構の平面図は、主に「遺構実測支援システム」(株式会社CUBIC)を用いてトータルステーションによる測量で作成した。遺構の堆積土層断面図、遺構に伴う付属施設等の平面図、出土遺物の形状実測図などは、簡易遣り方測量等で縮尺10分の1・20分の1の実測図を作成した。出土遺物は、遺構単位で層位を基準に取り上げることを基本とし、必要に応じてトータルステーションや簡易遣り方測量により、縮尺10分の1・20分の1のドットマップ・形状実測図等を作成したほか、出土状況を観察した上で堆積土一括で取り上げた遺物がある。

〔写真撮影〕

写真撮影は、原則として35mmモノクローム、35mmカラーリバーサル各フィルムおよび1790万画素のデジタルカメラを併用し、遺構の検出状況、遺物の出土状況、発掘作業状況等について記録した。また、高所作業車により遺跡および調査区域全体の写真撮影を行った。

2. 整理・報告書作成作業の方法

第4次調査では、縄文時代中期中葉から後葉の竪穴住居跡12棟、土坑8基、焼土遺構3基、土器埋設遺構1基、Pit8基が検出され、土器・石器等の遺物が段ボール箱で14箱出土した。竪穴住居跡を主要とする遺構の構築時期と構造の変異、機能的性格等の検討に重点をおいて整理・報告書作成作業を進めた。

〔図面類の整理〕

遺構の平面図は、主にトータルステーションによる測量で作成したので、整理作業ではこれを原則として縮尺20分の1で図化し、簡易遣り方測量で作成した堆積土層断面図や炉跡の実測図等との図面調整を行った。また、遺構台帳・遺構一覧表等を作成して、発掘作業時の所見等を整理した。

〔写真類の整理〕

35mmモノクロームフィルムは、撮影順にネガアルバムに収納し、35mmカラーリバーサルフィルムは発掘作業状況、包含層遺物の出土状態、遺構の検出・精査状況等に整理してスライドファイルに収納した。また、デジタルカメラのデータは、35mmカラーリバーサルフィルムと同様に整理してタイトルを付けた。

〔遺物の洗浄・注記と接合・復元〕

遺構出土遺物および包含層遺物を優先的に洗浄し、接合・復元作業を早期に進めるようにした。遺物の注記は、調査年度、遺跡名、出土区・遺構名、層位、取り上げ番号等を略記したが、剥片石器等、直接注記できないものについては、収納したポリ袋に注記した。接合・復元にあたっては、同一個体の出土地点・出土層等の整理を怠らないようにした。

〔報告書掲載遺物の選別〕

遺物全体の分類を適切に行った上で、遺構に伴い使用・遺棄・廃棄の過程を提示できる資料、遺構の構築・廃絶時期等を提示できる資料、遺存状態が良好で同類の中で代表的な資料、所属時代（時期）・型式・器種、遺跡の普遍性や変異等を提示できる資料等を主に選別した。

〔遺物の観察・図化〕

充分観察した上で、遺物の特徴を適切に分かり易く表現するように図化した。また、遺物台帳・観察表・計測表等を作成した。

〔遺構・遺物のトレース・版下作成〕

遺構・遺物実測図やその他挿図のトレースは、手作業と「トレースくん」(株式会社CUBIC)を用いたデジタルトレースを併用した。実測図版・写真図版等の版下作成についても、手作業とデジタル機器による作業を併用した。

〔遺構の検討・分類・整理〕

遺構単位に種類・構造的特徴・出土遺物・他の遺構との新旧関係に関する情報を整理し、構築時期や遺構間の同時性、機能的性格、変遷過程等について検討を加えた。

〔遺物の検討・分類・整理〕

遺物を時代・時期・種類毎に整理し、出土遺物全体の分類・器種構成・個体数等について検討した。

〔調査成果の検討〕

遺構・遺物の検討結果を踏まえて、集落の構造や変遷過程について検討・整理した。

第3節 調査と整理の経過

1. 発掘作業の経過

平成22年度の第4次調査は、目屋ダムの水位上昇に伴う調査上の制約から、8月3日から10月28日までの期間で実施することになった。平成18年度の第1次調査から平成21年度の第3次調査を通じて、竪穴住居跡、土坑、盛土遺構、捨て場（斜面盛土）、石棺墓等で構成される縄文時代中期の大規模な集落跡であることが把握されており、調査対象面積も20,000㎡と広大であることから、遺跡の南限と東限にあたる区域を調査実施区域に設定した。

発掘調査体制は、以下の通りである。

調査主体 青森県埋蔵文化財調査センター

所長	新岡 嗣浩	(現 青森県総合社会教育センター所長)
次長	畠山 昇	(平成23年3月退職)
総務GM	木村 繁博	
調査第二GM	中嶋 友文	(現 調査第一GM)
総括主幹	小田川 哲彦	
文化財保護主幹	齋藤 岳	(発掘調査担当者) (現 文化財保護課三内丸山遺跡保存活用推進室)
文化財保護主査	佐々木 雅裕	(発掘調査担当者)
調査補助員	梅田 裕哉	(平成22年8月退職)、出町 好 (平成23年3月退職)、白戸 このみ、中村 晃菜

専門的事項に関する指導・助言

調査指導員	村越 潔	国立大学法人弘前大学名誉教授・故人 (考古学)
調査員	葛西 勵	前青森短期大学教授 (考古学)
調査員	関根 達人	国立大学法人弘前大学人文学部教授 (考古学)
調査員	島口 天	青森県立郷土館学芸主査 (地質学)

発掘作業の経過については以下の通りである。

- 7月下旬～ 8月から発掘調査を開始するに先立ち、調査区を遺跡の南東側に設定し、重機による表土掘削を開始した。
- 7月29日 水上(2)遺跡の調査に先立ち、5月6日から調査していた芦沢(1)遺跡の調査器材を水上(2)遺跡に搬出した。
- 7月31日 芦沢(1)遺跡の調査終了に伴い、水上(2)遺跡へプレハブ・トイレ等を移設した。
- 8月3日 水上(2)遺跡の調査開始。遺跡がダム工事区域内に所在するため、中型バスによる作業員の輸送も開始。調査事務所・器材庫の整備および周辺環境整備を行った。
- 8月5日～ 遺構検出作業に着手した。竪穴住居跡等を検出し、検出作業と並行して精査を進める。同時に、調査区の南側と西側が遺物の分布が希薄な様相が把握された。
- 9月16日 高所作業車による遺跡および調査区域全体の写真撮影を行った。
- 9月17日～ 調査区を遺跡の東限に拡張して遺構検出作業を進めた結果、竪穴住居跡等の遺構が重複している様相が確認された。竪穴住居跡等の精査に並行して、さらに遺構検出作業を進める。

- 9月28日 調査指導員の村越潔氏、調査員の葛西勸氏・関根達人氏による現地指導を受ける。
- 10月21日 調査員の鳥口天氏による、地形・地質に関する現地指導を受ける。
- 10月28日 遺構と遺物包含層の調査を終了し、すべての調査器材等を撤収した。

2. 整理・報告書作成作業の経過

平成23年度の第4次調査の結果、縄文時代中期中葉から後葉の竪穴住居跡12棟、土坑8基、焼土遺構3基、土器埋設遺構1基、Pit8基が検出され、土器・石器等の遺物が段ボール箱で14箱出土した。また、第4次調査で検出した遺構と出土遺物に加え、平成20年度の第2次調査、平成21年度の第3次調査で検出した遺構と出土遺物を対象に、整理・報告書作成事業を実施し、整理・報告書作成作業は平成23年4月1日から平成24年3月28日の期間で行った。

整理・報告書作成の体制は、発掘調査体制に職員3名、調査補助員4名、整理作業員4名を新たに加えた。

文化財保護主査	佐々木 雅裕 (報告書作成担当者)
文化財保護主事	菅原 優太 (報告書作成担当者)
文化財保護主事	荒谷 伸郎 (報告書作成担当者)
調査第一GM	中嶋 友文 (報告書整理担当者)
調査補助員	鳴海 賛美、佐藤 大介 (平成23年9月退職)、和田 知里 (平成24年3月退職)、白戸 このみ、中村 晃菜、盛 将貴
整理作業員	内田 祐子、根川 友美、坂本 歌織、長内 績江

整理・報告書作成作業の経過と業務委託状況は以下の通りである。

- 4月上旬～ 遺物は洗浄・注記作業が終了した遺構と地区から、順次接合・復元作業を進めた。
- 5月上旬～ 遺物の接合・復元作業を中心に行い、併せて、土器・石器の報告書掲載遺物の選別作業と、遺物の検討・分類作業を進めた。
- 6月上旬～ 選別した報告書掲載遺物（土器）の実測・拓本等の図化作業、遺物台帳の作成を行った。
- 8月上旬～ 選別した報告書掲載遺物（石器）の実測図作成を開始した。
- 11月下旬～ 遺構実測図および遺構配置図、図化作業が完了した遺物のトレースを行った。なお、遺構実測図および遺構配置図についてはAdobe社製Creative Suiteを用いてデジタルで作成した。また、シルバーフォト・フォトショップいなみに委託して、報告書掲載遺物の写真撮影を行った。さらに、調査成果を総合的に検討して、報告書の原稿作成を開始した。
- 1月下旬～ 原稿・版下等の作成が完了し、報告書の割付・編集を行い、印刷業者を入札・選定して入稿した。
- 3月28日 3回の校正を経て、報告書を刊行した。最後に記録類・出土品を整理して収納した。

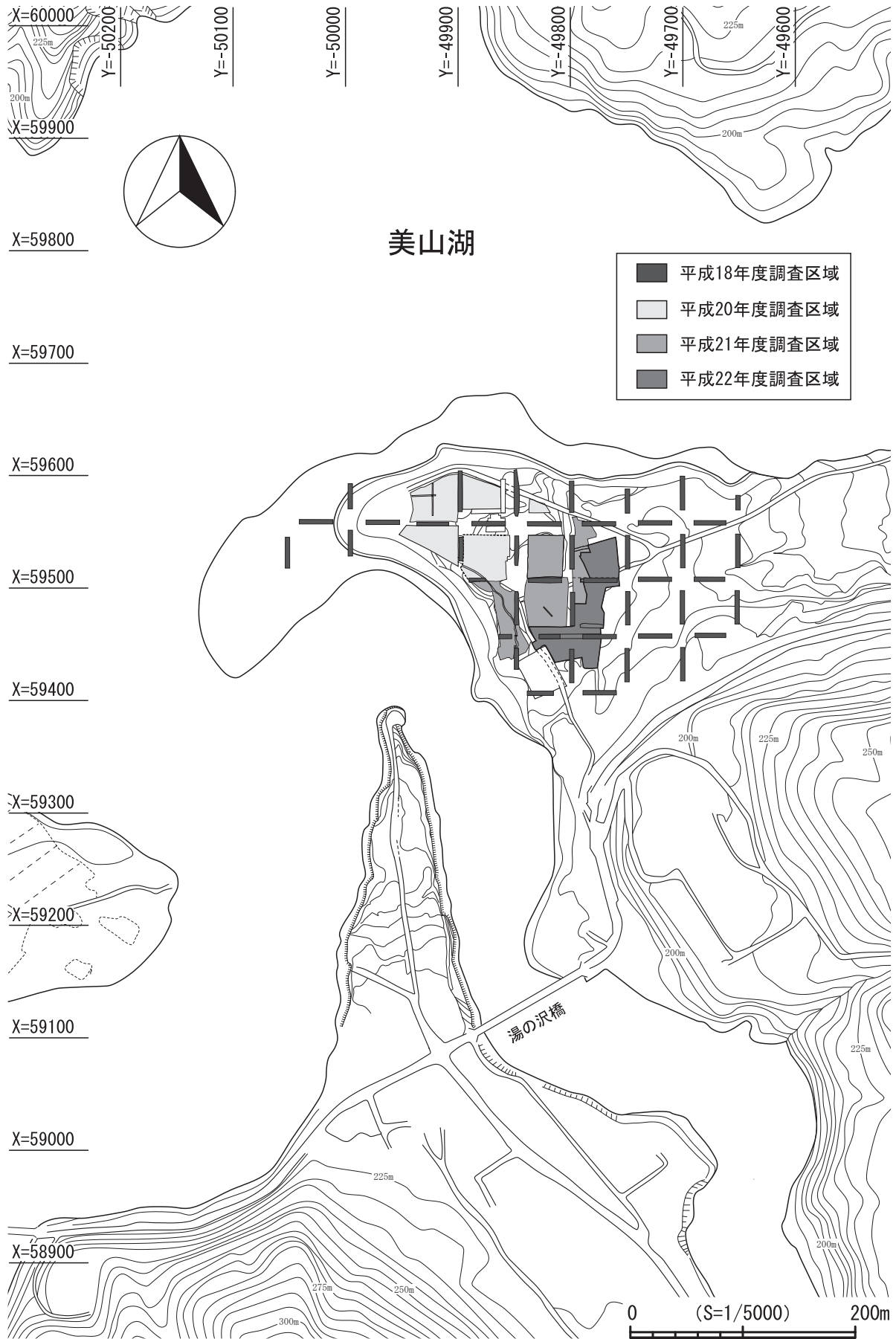


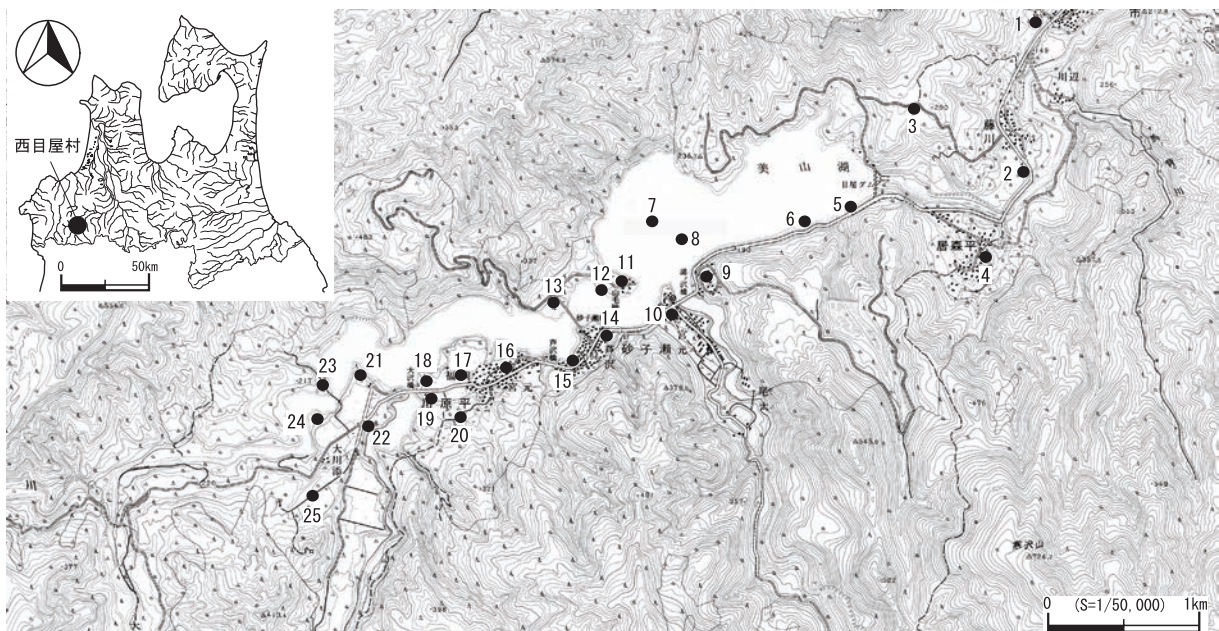
図1 遺跡周辺の地形と発掘調査区域

第2章 遺跡の環境

第1節 遺跡の位置と周辺の遺跡

水上(2)遺跡は、岩木川(美山湖)右岸の湯ノ沢川が合流する付近の河成段丘上に位置する、縄文時代前期末葉から中期末葉に至る大規模な集落跡である。遺跡は平成18年度の確認調査により、平成19年度に新規登録された。さらに、平成20年度と平成21年度に実施された発掘調査では、竪穴住居跡、土坑、盛土遺構、捨て場(斜面盛土)、石棺墓等を検出している。

水上(2)遺跡周辺では、岩木川(美山湖)左右両岸の支流が合流する河成段丘上に、縄文時代中期末葉から後期前葉の大川添(3)遺跡、縄文時代後期初頭から後葉の砂子瀬遺跡、縄文時代後期後葉から末葉の水上(1)遺跡、縄文時代後期後葉から晩期前葉の川原平(1)遺跡など、縄文時代の遺跡が近距離で隣接して分布する。今後の調査の進展に伴い、この地域の文化的な一般性と特殊性の実態が明らかになることが期待される。



番号	遺跡番号	遺跡名	所在地	時代	種別	番号	遺跡番号	遺跡名	所在地	時代	種別
1	343006	稲葉(2)遺跡	西目屋村大字村市字稲葉	平安	散布地	14	343020	芦沢(1)遺跡	西目屋村大字砂子瀬字芦沢	縄文	散布地
2	343024	瀬の上遺跡	西目屋村大字藤川字瀬の上	縄文(後・晩)	散布地	15	343021	芦沢(2)遺跡	西目屋村大字砂子瀬字芦沢	縄文	散布地
3	343007	芦薈遺跡	西目屋村大字藤川字瀬の上	縄文(後)	散布地	16	343023	川原平(5)遺跡	西目屋村大字川原平字宮元、平安	縄文	散布地
4	343015	寒沢遺跡	西目屋村大字居森平字寒沢	縄文	散布地	17	343022	川原平(4)遺跡	西目屋村大字川原平字福岡	縄文(中・後)	散布地
5	343026	水上(3)遺跡	西目屋村大字砂子瀬字水上	縄文(中)	散布地	18	343009	川原平(1)遺跡	西目屋村大字川原平字福岡	縄文(後・晩)	散布地
6	343029	水上(4)遺跡	西目屋村大字砂子瀬字水上	縄文(後・晩)	散布地	19	343010	川原平(2)遺跡	西目屋村大字川原平字福岡	縄文(後)	散布地
7	343014	砂子瀬村元遺跡	西目屋村大字砂子瀬字村元	縄文(中)	散布地	20	343016	川原平(3)遺跡	西目屋村大字川原平字福岡	縄文	散布地
8	343025	水上(2)遺跡	西目屋村大字砂子瀬字水上	縄文(中)	集落跡	21	343018	大川添(1)遺跡	西目屋村大字川原平字大川添	縄文	散布地
9	343017	水上(1)遺跡	西目屋村大字砂子瀬字水上	縄文(中・後)	集落跡	22	343019	大川添(2)遺跡	西目屋村大字川原平字大川添	縄文	散布地
10	343008	砂子瀬遺跡	西目屋村大字砂子瀬字宮元	縄文(中・後・晩)	集落跡	23	343030	大川添(3)遺跡	西目屋村大字川原平字大川添	縄文	集落跡
11	343032	鬼川辺(1)遺跡	西目屋村大字砂子瀬字鬼川辺	縄文	散布地	24	343031	大川添(4)遺跡	西目屋村大字川原平字大川添	縄文	散布地
12	343033	鬼川辺(2)遺跡	西目屋村大字砂子瀬字鬼川辺	縄文	散布地	25	343011	焼山遺跡	西目屋村大字川原平字大川添	縄文	散布地
13	343034	鬼川辺(3)遺跡	西目屋村大字砂子瀬字鬼川辺	縄文	散布地						

(青森県教育委員会 2009『青森県遺跡地図』より)

図2 遺跡の位置と周辺の遺跡

第2節 水上(2)遺跡の地形・地質

青森県立郷土館 島口 天

水上(2)遺跡は、湯ノ沢川が美山湖に合流する付近の河成段丘面上に位置する(図3)。

本遺跡内では、2010年度の調査区内で巨礫が密集して帯状に分布しているようすが観察され(写真1)、礫は大きいものでは長径50cm近いものがあるが、ほとんどは長径20cm以下の垂円礫で、その大きさは一定ではなく、礫間はシルトや砂によって充填されていた。このような特徴から、この巨礫を含む堆積物は土石流堆積物であると考えられる。また、この堆積物の南端の延長方向には湯ノ沢川がある(図3)ことから、これは湯ノ沢川で発生した土石流の堆積物である可能性が高い。帯状に延びた土石流堆積物の間にはシルト質の褐色土が堆積しているが、トレンチ内において褐色土の下位にも礫層がみられることから、土石流堆積物上の窪みまたは土石流堆積物間の溝状地形に褐色土が堆積したと考えられる。

トレンチ内で観察したCの礫層は、基盤岩の砂子瀬層に直接重なっている(写真2)。基盤岩は西方(湯ノ沢川の方)に向かって緩く傾斜し、トレンチ中央部において急角度で落ち込み(写真3)、Bの礫層と褐色土が重なっている。Bの礫層は、下部に大きめの礫が密集しているものの上方細粒化の傾向は認められず、シルトの薄層が挟まれるなど、判別は難しいが複数回に亘って流れてきた土石流が堆積していることが考えられる。このように基盤岩を覆う堆積物がきわめて薄いことや、堆積物が主に土石流によってもたらされたものであることから、この段丘面は主に湯ノ沢川の側刻によって生じた岩石段丘であることが考えられる。

本遺跡が位置する河成段丘面は、水野・堀田(2003)を元に作成した地形区分図(島口、2006)において水上(1)遺跡が位置していた低位面より標高が20m前後低く、同図では湖底となっている。水上(1)遺跡では低位段丘構成層とそれに重なる土石流堆積物が確認されている(島口、2006)が、少なくとも本遺跡の2010年度調査範囲は段丘構成層がない岩石段丘であることが考えられたため、美山湖周辺地域に分布する河成段丘面の区分についての再検討が必要と思われる。

【引用文献】

水野 裕・堀田報誠(2003)5万分の1地形分類図「川原平」。土地分類基本調査「川原平」、青森県農林水産部農村整備課。

島口 天(2006)第2節 遺跡周辺の地形・地質。川原平(1)・(4)大川添(2)水上遺跡、青森県埋蔵文化財調査報告書第409集、青森県教育委員会、p.7-9。

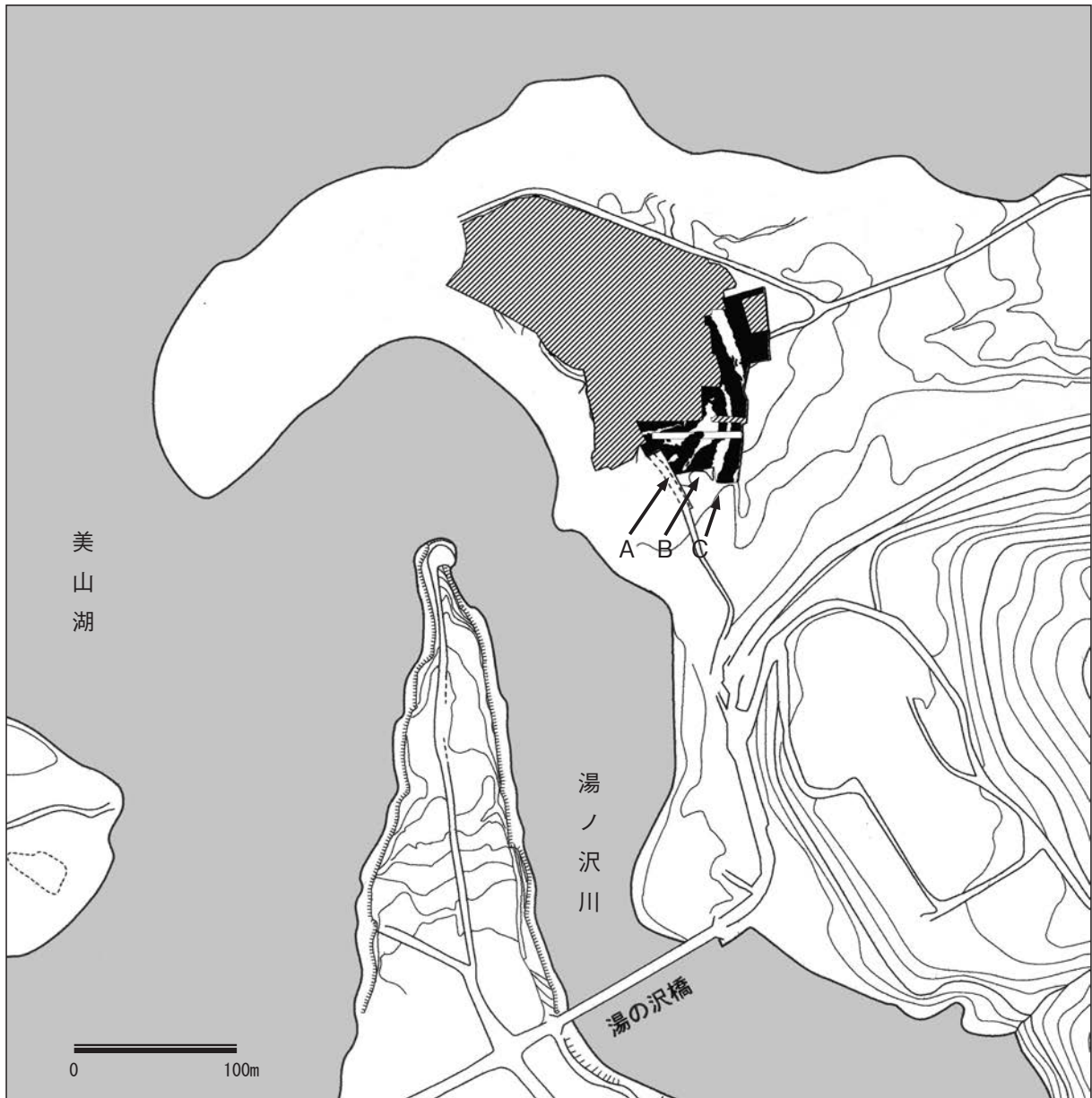


図3 水上(2)遺跡の調査区

2010年度の調査区でみられた帯状に延びる土石流堆積物（黒色）。土石流の延長方向は、A～Cのように湯ノ沢川の方から延びてきたように見える。

写真1 2010年度の調査区写真

図3と同じ南側からみた写真。Cの土石流堆積物は、大きく弧を描くように曲がって矢印（点線）方向（西方）へ延びる。四角で囲まれた所は、地層断面を調査するために掘られたトレンチ。

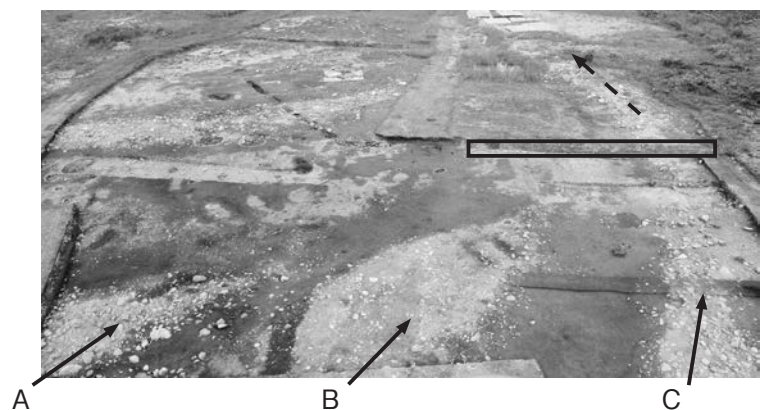
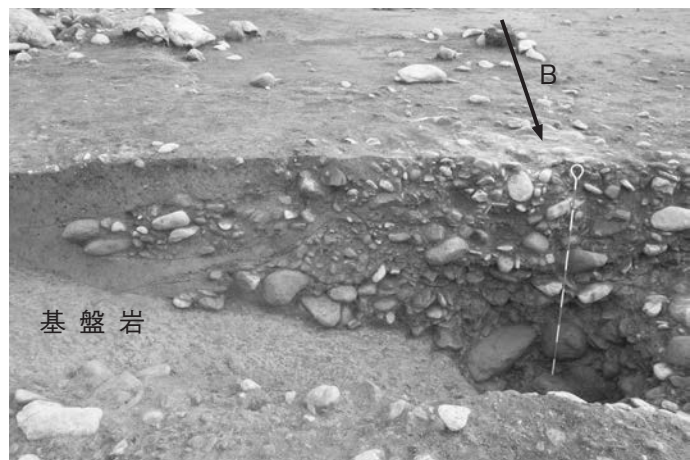


写真2 写真1のトレンチ断面を北側から見た写真。基盤岩（砂子瀬層）を直接Cの土石流堆積物が覆う。



写真3 基盤岩が西方（湯ノ沢川の方）に向かって緩く傾斜した後、急角度で落ち込んでいる地形をBの土石流堆積物が覆う。

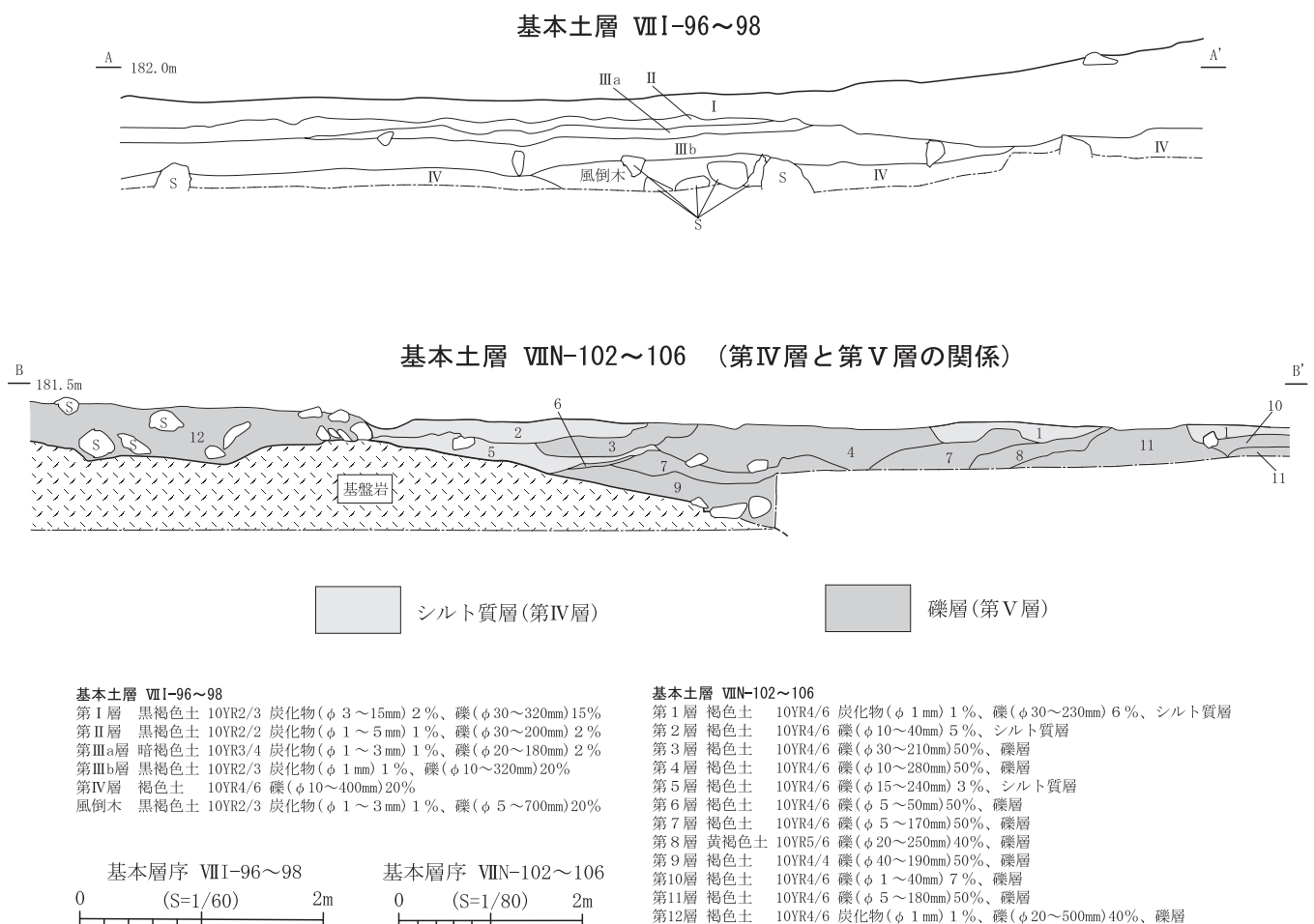


第3節 遺跡の基本土層

調査区内の土層は、平安時代から現代の堆積と把握される土層（第Ⅰ層）、縄文時代中期中葉以降から平安時代の堆積と把握される土層（第Ⅱ層）、縄文時代中期中葉以前の堆積と把握される土層（第Ⅲ層）、遺跡が立地する河成段丘面の形成に起因する土層（第Ⅳ層）、同様に、河成段丘面の形成に起因する土石流堆積物の土層（第Ⅴ層）に大別される（第2章 第2節参照）。

第Ⅱ層の上位に、白頭山火山灰（B-Tm）と識別されるテフラの堆積が確認される地点があり、第Ⅱ層の堆積時期について年代的な下限を提示する指標となる。

第Ⅲ層は、上部を褐色および黒褐色を基調とする土層（第Ⅲa層）に、下部を暗褐色および黒褐色を基調とする土層（第Ⅲb層）に細別される。しかし、細別層準の年代的 position 付けについての確定には至っておらず、今後の調査において包含遺物の出土状況と型式組成、遺構の構築・機能面を基準に明確にする必要がある。さらに、これまでの調査で、縄文時代前期末葉の円筒下層 d 式の出土が確認されており、出土層準の特定と基本土層の再検討が課題となる。



<p>基本土層 VII-96~98</p> <p>第Ⅰ層 黒褐色土 10YR2/3 炭化物(φ 3~15mm) 2%、礫(φ 30~320mm)15%</p> <p>第Ⅱ層 黒褐色土 10YR2/2 炭化物(φ 1~5mm) 1%、礫(φ 30~200mm) 2%</p> <p>第Ⅲa層 暗褐色土 10YR3/4 炭化物(φ 1~3mm) 1%、礫(φ 20~180mm) 2%</p> <p>第Ⅲb層 黒褐色土 10YR2/3 炭化物(φ 1mm) 1%、礫(φ 10~320mm) 20%</p> <p>第Ⅳ層 褐色土 10YR4/6 礫(φ 10~400mm)20%</p> <p>風倒木 黒褐色土 10YR2/3 炭化物(φ 1~3mm) 1%、礫(φ 5~700mm)20%</p>	<p>基本土層 VIII-102~106</p> <p>第Ⅰ層 褐色土 10YR4/6 炭化物(φ 1mm) 1%、礫(φ 30~230mm) 6%、シルト質層</p> <p>第Ⅱ層 褐色土 10YR4/6 礫(φ 10~40mm) 5%、シルト質層</p> <p>第Ⅲ層 褐色土 10YR4/6 礫(φ 30~210mm)50%、礫層</p> <p>第Ⅳ層 褐色土 10YR4/6 礫(φ 10~280mm)50%、礫層</p> <p>第Ⅴ層 褐色土 10YR4/6 礫(φ 15~240mm) 3%、シルト質層</p> <p>第Ⅵ層 褐色土 10YR4/6 礫(φ 5~50mm)50%、礫層</p> <p>第Ⅶ層 褐色土 10YR4/6 礫(φ 5~170mm)50%、礫層</p> <p>第Ⅷ層 黄褐色土 10YR5/6 礫(φ 20~250mm)40%、礫層</p> <p>第Ⅸ層 褐色土 10YR4/4 礫(φ 40~190mm)50%、礫層</p> <p>第Ⅹ層 褐色土 10YR4/6 礫(φ 1~40mm) 7%、礫層</p> <p>第Ⅺ層 褐色土 10YR4/6 礫(φ 5~180mm)50%、礫層</p> <p>第Ⅻ層 褐色土 10YR4/6 炭化物(φ 1mm) 1%、礫(φ 20~500mm)40%、礫層</p>
--	--

<p>基本層序 VII-96~98</p> <p>0 (S=1/60) 2m</p>	<p>基本層序 VIII-102~106</p> <p>0 (S=1/80) 2m</p>
--	---

図4 遺跡の基本土層

水上(2)遺跡



図5 遺構配置と調査区の座標系

第3章 検出遺構

第1節 検出遺構の概要

水上(2)遺跡は岩木川（美山湖）右岸に位置し、湯ノ沢川が合流する付近の河成段丘上に立地する。縄文時代中期前葉から末葉の竪穴住居跡と土坑を主要な構成要素に、北側縁辺にあたる段丘面の末端には縄文時代前期末葉から中期後葉に至る捨て場（斜面盛土）を、遺跡の中央には丘状を呈する盛土遺構を形成する。

調査の結果、検出した遺構は縄文時代中期中葉から後葉の竪穴住居跡（SI）12棟、土坑（SK）8基、土器埋設遺構（SR）1基、焼土遺構（SN）3基、Pit（SP）8基である。

竪穴住居跡は等質な分布状況とは異なり、偏在するあり方と調査区の南東側に空白域が存在するあり方が集落構造上の特徴として注意される。特に、盛土遺構東側にあたる傾斜面に重複関係を示して偏在する（SI-1006～1012）事象から、盛土遺構を核とした区域には竪穴住居跡が高い密度で展開する空間構成が窺え、傾斜面の等高線に平行して帯状に広がるシルト質層（第IV層）の分布に同調して、北側に高い密度で分布することが予測される。一方、調査区南西側に東西方向に展開する一群（SI-1001・1002・1003・1005）が認められるが、重複関係と互いの隣接距離を指標に対比した場合、盛土遺構東側の一群との間に量的な不均衡が看取される。

第2節 検出遺構と出土遺物

1. 竪穴住居跡

SI-1001（図6・12・20）

[位置・確認] VIP-94・95、VIIQ-95グリッドに位置し、第IV層上部から第V層上部において床面を確認した。

[形態・規模] 貼床を敷設する範囲から平面形態の把握が可能であり、径265cmの円形を呈する。

[壁・床面] 建替えに伴う二段階の変遷過程を示し、新期と古期の床面が上下の位置関係で重複する。新設された貼床の平面形態と規模が前段階の住居空間を踏襲する構造上の特徴から、建替えと解釈した。新期の床面は全域にわたり硬質化が顕著であり、古期の床面も同様に硬質化し、特に炉跡周辺が顕著なあり方を示す。古期の段階における構築に伴う掘削深度は第V層の礫層上部を掘方下端としており、壁高が浅い特徴がある。また、古期の床面は第V層の礫層上部を被覆する層厚で貼床を敷設し、床面の南側が緩やかな傾斜を示す。

[炉跡] 新期にあたる上位の床面では、中央から北側へ偏った位置に地床炉が設置され、第2号炉跡の北側に第1号炉跡を新設する変遷過程が窺われる。一方、古期の段階では、新期の第2号炉跡と同様の位置に長軸43cm、短軸29cmの長方形を呈する石囲炉が貼床を敷設する工程で設置される。この石囲炉は板状節理で剥離するデイサイト製の石皿（図20-3）で覆蓋された状態で検出され（図6、図版4）、廃絶行為の一端を示唆する状況と理解され、注意される。

[柱穴・付属施設] 古期の床下でPit 1を検出したが、古期と新期ともに規則的な配置を示す検出事例が不在であり、支柱穴の認定には至らない。

[堆積土] 第III層と第IV層を起源とする土壌で貼床を敷設するが、第IV層上部から第V層上部において床面を検出した調査過程上の理由から堆積土の状況や特徴を把握するに至っていない。

[出土遺物] 図6に示す通り、土器は新期段階の第2号炉跡を中心とする床下に一括廃棄された状態で偏在する分布状況を示し、合計317点、総重量3,156gが出土する。縄文時代中期中葉の円筒上層d式および円筒上層e式に特定される型式組成を示し、型式学的特徴と成形工程における技術的特徴を端的に提示する好例となる。図12-1・2・4・7は、口唇部端部を尖頭状に整形する型式学的な規則性が窺えるが、その一方において、口唇部端部外面に粘土帯を接合する手法により端部外面の肥厚を表出し、その下端部について器面調整を実施しない点が技術形態的に異質な特徴として看取され、注意される。青森市近野遺跡にこれと同質の事例が散見される（青森県教育委員会『近野遺跡Ⅸ』2006）。同時に、成形技術上の特徴として、上下の粘土帯の接合面が内面から外面に傾く外傾接合のあり方が顕著化する傾向が看取される（図12-1・3・4・10・12）。この特徴は中期末葉の大木10式の段階には技術上の特徴として定着しており、成形技術の連続性を端的に示す初現的事例として評価される。また、粘土帯を二帯で一工程に成形するあり方が窺え（図12-1・3・4・8・10）、この工程を単位に幅約4～5cmの間隔で剥離する例が多く窺える。一方、石器は合計3点の出土と希少であり、その内訳は石錐1点（図20-1）、磨石1点（図20-2）、石皿1点（図20-3）である。

[時期] 新期の貼床から一括廃棄の状態で土器が出土しており、円筒上層d式が主要な中に円筒上層e式が出土する点を考慮し、土器を基準とした相対編年上の時期は縄文時代中期中葉の円筒上層e式期以降に求められる。また、古期と新期の段階における時間的な間断は小さく、居住の連続性が高い可能性が高い。

SI-1002（図6・12）

[位置・確認] VIP・Q-96グリッドに位置し、第Ⅳ層最上部から第Ⅴ層最上部において床面を確認した。

[形態・規模] 床面の範囲から平面形態の把握が可能であり、径190cmの円形を呈する。

[壁・床面] 第Ⅳ層最上部から第Ⅴ層最上部において床面を確認した理由から壁は消失しており、復元に至らない。炉跡を通る南北の中心線が平面形を相似形に二分する主軸となり、この主軸を中心に線対称の位置関係で硬化面を形成する特徴が看取され、住居の主軸と空間区分の観念を反映する事象として注意される。なお、この主軸の方位はSI-1001古期における石囲炉の中心軸と直交する関係にあり、主軸方位のあり方に異なる二者の存在が予測される。一方、炉跡の周囲には第Ⅳ層を起源とする土壌で貼床が敷設され、硬質化が顕著である。加えて、床面の緩やかな起伏が注意され、炉跡を中心とする住居跡の中央が僅かに低い形状を呈する。さらに、西側には巨礫が露出した状態にあり、上屋構造と住居空間に課題が残る。

[炉跡] 住居跡の中央から北側へ偏った位置に土器埋設炉が設置される。赤色変化の度合いが小さい点において認定に課題が残るが、総体的に炉跡が設置される位置関係と同等な特徴と、埋設土器の周囲に貼床が敷設される構造上の特徴から炉跡と解釈した。なお、炉体土器に榎林式の深鉢形土器胴部（図12-15～17）を埋設する。

[柱穴・付属施設] 柱穴・付属施設と認定される痕跡は確認されていない。

[堆積土] 第Ⅳ層最上部から第Ⅴ層最上部において床面を検出した調査過程上の理由により、堆積土の特徴を把握するには至っていない。

[出土遺物] 図6に示す通り、遺物は炉跡北側の床面に偏在して分布する傾向を示し、土器は合計138

点、総重量2,061gが出土する。土器埋設炉の炉体土器とともに縄文時代中期後葉の榎林式に特定される型式組成を示し、図12-13・14の口唇部形態は前段階の要素を継承して外端部が肥厚し、型式学的要素の連続性を端的に示す。

[時期] 土器埋設炉の炉体土器を基準とした相対編年上の時期から榎林式期に求められる。また、炉跡周辺の床面においても榎林式の深鉢形土器が出土する点から、当該時期に廃絶された経緯が窺える。

SI-1003 (図6・12・13)

[位置・確認] VII N・O-92・93 グリッドに位置し、第Ⅲ層から第Ⅳ層において確認した。

[形態・規模] 平成18年度に実施した確認調査のトレンチにより東側を消失するが、平面形態は多角形状を呈し、五角形を基調とする形態と推測される。規模は南北軸で308cmを計測する。

[壁・床面] 壁は急斜度の立ち上がりを示し、第Ⅳ層から第Ⅴ層上部を床面とする。住居跡中央に楕円形状を呈する付属施設が敷設され、床面がテラス状を呈する点に構造上の特徴がある。床面は全域にわたり硬質化が顕著であり、南西側に第Ⅴ層の礫層上部を被覆する層厚で貼床を敷設する。

[炉跡] 住居跡中央に敷設される付属施設の底面で僅かに赤色変化する状況を確認した。しかし、赤色変化の度合いが小さい点において認定に課題が残る。

[柱穴・付属施設] 住居跡中央に楕円形状を呈する付属施設が敷設され、住居跡床面がテラス状の構造を呈する。底面は硬質化しており、床面と付属施設底面との高低差は27cmを計測する。また、付属施設の底面および南側でPit 1とPit 2を検出したが、規則的な配置関係を示す検出事例が不在であり、主柱穴の認定には至らない。

[堆積土] 第Ⅱ層と第Ⅲ層を起源とする土壌が凹レンズ状に堆積する状況を示し、人為的な堆積を示す特徴は認識されない。

[出土遺物] 付属施設内堆積土第4層を中心に破片化した状態の土器が一括廃棄された様相を示す。合計178点、総重量2,980gの土器が出土し、縄文時代中期中葉の円筒上層d式および円筒上層e式に特定される型式組成を示す。図12-18・20・22、図13-1・2の口唇部形態は、SI-1001の出土事例と同様に、口唇部端部外面に粘土帯を接合する手法により端部外面の肥厚を表出し、その下端部について器面調整を実施しない点が異質な特徴として顕著に窺え、技術形態に反映された地域的特性として解釈することも可能である。また、図12-21、図13-1・2の資料からは、上下の粘土帯を外傾接合する成形技法上の特徴が看取され、同時に、粘土帯を二帯で一工程に成形するあり方と、この工程を単位に幅約4～5cmの間隔で剥離するあり方が窺える。なお、図15-3は、SI-1005の堆積土中層から下層(第6層～第12層)に一括廃棄された資料と接合関係が認められた例であり、相互の廃棄行為における時間的關係が近接していた可能性も示唆される。さらに、文様構造に着目した場合、対称の構成と非対称の構成が窺われ、図13-1(図版10)は中心で四分割される単位文様が一単位を欠失するものの、同質の単位文様が反復する文様構造とは異なり、すべて異質な単位文様が並列する非対称の文様構造を表出する例(A+B+C+D?)である。一方、図13-2(図版10)は中心で四分割される縦帯隆帯の文様構成が、並列する二単位の隆帯文様で同質の文様を反復し、異質な文様構成が線対称に対峙する非対称の文様構造を表出する例(A+A+B+B)である。

[時期] 廃絶後の過程において、第4層を中心に主要な遺物が一括廃棄された様相を示す。円筒上層

d式が主要な割合を占める中に最花式が相伴する事象を考慮し、土器を基準とした相対編年上の時期は縄文時代中期後葉の最花式期以降に求められる。

SI-1004 (図7・13)

[位置・確認] VIIJ-96・97 グリッドに位置し、第V層最上部において床面を確認した。

[形態・規模] 貼床を敷設する範囲から平面形態の把握が可能であり、長軸275cm、短軸254cmの楕円形を呈する。

[壁・床面] 第V層最上部において床面を確認した理由から壁は消失し、復元には至らない。床面は第V層の礫層上部を被覆する層厚で貼床を敷設し、全域にわたり硬質化が顕著である。

[炉跡] 住居跡の中央から北側に偏った位置に土器埋設炉が設置される。赤色変化の度合いが小さい点において認定に課題が残るが、総合的に炉跡が設置される位置関係と同等な特徴と、平面形の長軸を主軸とする軌跡上に位置する構造上の特徴から炉跡と解釈した。なお、炉体土器に節の粗いLRを横位施文する榎林式の深鉢形土器胴部(図13-14)を埋設する。

[柱穴・付属施設] 柱穴・付属施設と認定される痕跡は確認されていない。

[堆積土] 第V層上部において床面を検出した調査過程上の理由により、堆積土の特徴を把握するには至っていない。

[出土遺物] 図7に示す通り、住居跡中央東側の床面から底部を欠く円筒上層d式および円筒上層e式(図13-13)の深鉢形土器が押し潰れた状態で出土する以外は希薄な分布状況を示し、円筒上層d式および円筒上層e式を主に合計144点、総重量1,702gの土器が出土する。図13-13は口唇部端部外面に粘土帯を接合する手法により端部外面の肥厚を表出し、その下端部について器面調整を実施しない点が技術形態的に異質であり、幅約4～5cmの間隔を一工程とする成形技法上の特徴も看取され、型式構造の説明を補完する好例となる。同時に、異なる回転方向により縦位に連続する一単位の横走縄文を表出し、文様の変形により正面性を顕示する。また、図13-10・11は縦位の区画隆帯が残置する円筒上層e式の資料で、形骸化する胸骨文とともに横位の楕円形文を描出する点に文様構造上の特徴がある。図12-10、図15-3が楕円形文の初現的要素を端的に示す事例となる。一方、石器は合計1点の出土と希少であり、微細な剥離痕を形成する剥片1点が出土する。狭長な縦長剥片を素材とし、鋭利な左右二側縁に微細な剥離痕を形成する。

[時期] 土器埋設炉の炉体土器を基準とした相対編年上の時期から榎林式期に求められる。

SI-1005 (図7・13～16・20)

[位置・確認] VII L-92、VII M-92・93 グリッドに位置し、第Ⅲ層中において確認した。

[形態・規模] 平面形態は楕円形を呈し、その規模は長軸339cm、短軸292cmを計測する。北西側と南側が風倒木により攪乱を受けている。

[壁・床面] 壁は急斜度の立ち上がりを示し、掘削深度が深い点を構造上の特徴とする。床面は第V層の礫層を被覆する厚い層厚で貼床を敷設し、全域にわたり硬質化が顕著である。

[炉跡] 炉跡は住居跡中央の位置に上下で重複する関係で更新され、二段階の変遷過程を示す。新期の炉跡は長軸39cm、短軸25cmの長方形を呈する石囲炉で、凝灰岩の扁平な楕円・亜角礫を素材と

する。中心に小型の垂角礫が据え置かれており、立石と同質の象徴性も考慮され、注意される。一方、古期の炉跡は土器埋設炉で、長径64cm、短径46cmの楕円形を呈する掘方に円筒上層 d 式および円筒上層 e 式に帰属する深鉢形土器底部を埋設するが、赤色変化の度合いが小さい。なお、新期の石囲炉と古期の土器埋設炉の中心軸は、SI-1002 の主軸方位に同調する関係にある点に注意され、通時的な検討が必要である。

[柱穴・付属施設] 柱穴・付属施設と認定される痕跡は確認されていない。

[堆積土] 第Ⅱ層および第Ⅲ層を起源とする土壌が凹レンズ状に堆積し、堆積土の中層から下層（第6層～第12層）に至って一括廃棄された状態で多量の土器が包含されていた。なお、図15-3は、SI-1003の堆積土第4層に一括廃棄された資料と接合関係が認められた例であり、相互の廃棄行為における時間的關係が近接していた可能性も示唆される。一方、堆積土中層の第1層～第5層と第6層～第8層を境界に、平面的に硬質化する形跡が把握され、廃絶後の利用形態を示唆する現象と理解された。硬質化する形跡は円形を呈する範囲で広がり、その規模は前段階の住居跡規模から縮小し、北西側に偏る位置関係にある。加えて、地床炉に類似する弱い赤色変化も識別された（図版6）。しかし、風倒木痕の重複により擬似的な様相を示す可能性も否定できない点、硬質化の度合いが相対的に低い点、炉跡の認定に課題が残る点、この赤色変化に対応する規則的な柱穴配置が不在な点を根拠に、更新に伴う住居跡と認定するには至らなかった。住居跡廃絶後における更新形態の規則性の把握と認定に課題を残す。

[出土遺物] 図7に示す通り、堆積土中層から下層（第6層～第12層）に至って一括廃棄された状態で多量の土器が3つのブロックを形成して偏在する分布状況が窺われる。一括廃棄された土器は円筒上層 d 式および円筒上層 e 式に特定される型式組成を示し、型式学的特徴と成形工程における技術的特徴を端的に提示する好例となる。出土した土器は合計1,171点、総重量13,351gを計測する。口唇部端部を尖頭状に整形する型式学的な規則性が窺え、同時に、口唇部端部外面に粘土帯を接合する手法により端部外面の肥厚を表出し、その下端部について器面調整を実施しない点に技術形態的に異質な特徴が看取され、注意される（図13-15、図14-1・2・4・5・8・9、図15-1～5、図16-1・3・4）。青森市近野遺跡にこれと同質の事例が散見される（青森県教育委員会『近野遺跡Ⅸ』2006）。同時に、上下の粘土帯の接合面が内面から外面に傾く外傾接合を示唆する成形技法上の特徴が顕著に観察される（図13-15・16、図14-5・7・9、図15-1・3・5、図16-1・3・4・6・7）（図版14）。この成形技法上の特徴は中期末葉の大木10式併行土器の段階には確実に定着しており、成形技法の連続性を端的に示す初現的事例として評価される。また、粘土帯を二帯で一工程に成形するあり方も窺え（図13-15・16、図14-5・8・9、図15-1・3～5）、この工程の単位で幅約4～5cmの間隔で剥離する例が多く窺え、成形技法を復元する上で注意される。さらに、文様構造に着目した場合、対称の構成と非対称の構成が窺われ、図14-8・図15-1・図16-1（図版11）は中心で四分割される四単位の並列する文様が、正調して反復する対称の文様構造を表出する例（A + A + A + A）である。図14-9（図版11）は中心で四分割される単位文様の文様構成が、並列する二単位の単位文様で正調する文様を反復させ、異質な文様構成が線対称に対峙する非対称の文様構造を表出し（A + A + B + B）、対立する単位文様の領域を線分する境界線上の突起文様一単位が突起相互において異質な文様を構成し、視覚的な正面観を顕示する例（a + A + a + A + b + B + a + B）である。図15-

2 (図版 11) は対角線上で対峙する一対の単位文様が正調して対称の文様構造を表出し、この対角線に直交して対峙する単位文様は対峙的に異質な文様を構成して、総体的に対立する非対称の文様構造を表出する例 (A + B + A + C)。図 15-4 (図版 12) は並列する二単位一対の突起が同質の文様構成で正調し、これと線対称に対峙する突起相互とは異質な文様構成により非対称の構造を表出する例 (A + A + B + B?) で、図 15-5 (図版 12) は対角線上で対峙する一対の突起文様が一方の外面と他方の内面で相互に異質な文様を構成し、対立する非対称の文様構造を表出する例 (外面: B + A + A + A・内面: A + A + B + A) である。一方、石器は合計 6 点が出土し、その内訳は石鏃 2 点 (図 20-4・5)、微細剥離痕を形成する剥片 3 点、石皿 1 点 (図 20-6) である。

[時期] 古期の土器埋設炉の炉体土器を基準とした相対編年上の時期から、円筒上層 d 式および円筒上層 e 式期には構築されていた経緯が窺われる。同時に、堆積土の中層から下層 (第 6 層～第 12 層) に至って円筒上層 d 式を主に円筒上層 e 式も一括廃棄された事象から、当該時期には廃絶の過程にあった経緯も窺える。

SI-1006 (図 8・16・20)

[位置・確認] VIII G-103・104 グリッドに位置し、第 IV 層最上部において床面を確認した。なお、この区域は平成 21 年度の第 3 次調査からの継続調査である。

[重複関係] SI-1007・SK-1009 と重複する関係にあり、SI-1007 と SK-1009 が後出である。

[形態・規模] 貼床を敷設する範囲から平面形態の把握が可能であり、長軸 364cm、短軸 295cm の楕円形を呈する。

[壁・床面] 第 IV 層最上部において床面を確認した理由から、壁は消失しており復元には至らない。第 V 層の礫層上部を掘方下端としており、礫層上部を被覆する層厚で貼床を敷設し、全域にわたり硬質化が顕著である。

[炉跡] 住居跡中央に地床炉が設置され、住居跡の長軸を主軸とする軌跡上に位置する構造上の特徴が看取される。この主軸の方位は SI-1008・SI-1009 の主軸方位と直交する関係にあり、主軸方位のあり方に異なる二者の存在が予測され、注意される。

[柱穴・付属施設] 床下で Pit 1、Pit 2、Pit 3、Pit 4 を検出した。平面形の長軸と炉跡を通る主軸の軌跡上に対置する Pit 1 あるいは Pit 2 と Pit 4 が支柱穴と認識され、SI-1008 が住居構造を提示する典型的な事例となる。なお、付属施設と認定される痕跡は確認されていない。

[堆積土] 第 IV 層上部において床面を検出した調査経過上の理由により、堆積土の特徴を把握するには至っていない。

[出土遺物] 遺物は希薄な分布状況を示し、合計 5 点、総重量 29g の土器が僅かに出土する。図 16-8・9 に示す通り、円筒上層 d 式および円筒上層 e 式の小破片が出土する程度で、年代的位置付けの根拠となる確実な一括遺物に乏しい。一方、石器は凝灰岩製の扁平な楕円礫を素材とする磨石 1 点 (図 20-7) が出土する。

[時期] 貼床から円筒上層 d 式および円筒上層 e 式が出土する点を考慮し、土器を基準とした相対編年上の時期は縄文時代中期中葉の円筒上層 d 式および円筒上層 e 式期以降に求められる。

SI-1007 (図8・16)

[位置・確認] VIII F・G-104 グリッドに位置し、第IV層最上部において確認した。なお、この区域は平成21年度の第3次調査からの継続調査である。

[重複関係] SI-1006・SN-1002と重複する関係にあり、SI-1006とSN-1002が先行する。

[形態・規模] 北東側が攪乱を受けて消失するが、平面形態は楕円形を呈し、その規模は長軸255cm、短軸206cmを計測する。

[壁・床面] 壁は急斜度の立ち上がりを示し、第IV層中を床面とする。全域にわたり顕著に硬質化する状況を示しており、貼床等の処置は施していない。

[炉跡] 住居跡の南南東側に偏った位置に地床炉が設置され、住居跡の長軸を主軸とする軌跡上に位置する構造上の特徴が看取される。

[柱穴・付属施設] 柱穴・付属施設と認定される痕跡は確認されていない。

[堆積土] 第III層および第IV層を起源とする土壌が凹レンズ状に堆積する様相を示し、人為的な堆積を示す特徴は識別されなかった。

[出土遺物] 遺物は希薄な分布状況を示し、合計40点、総重量495gの土器が出土する。図16-10・11は同一個体の資料で円筒上層e式の胴部破片と底部破片である。図16-10の胴部文様帯には形骸化した胸骨文が描出され、文様帯の下端に初現的な楕円形文を構成する点に特徴がある。図15-3とともに、図18-1の榎林式に描出される楕円形文の出現要素を端的に示す好例となる。なお、描出される沈線は篋状施文具により断面形が「V」字形を呈する特徴が窺われ、施文具の種類と扱い方に変異幅が認められる円筒上層e式において多用される要素の一例である。

[時期] 堆積土から円筒上層e式が出土する点を考慮し、土器を基準とした相対編年上の時期は縄文時代中期中葉の円筒上層e式期以降に求められる。

SI-1008 (図8・17・20)

[位置・確認] VIII E-104・105 グリッドに位置し、第III層下部から第IV層最上部において確認した。なお、この区域は平成21年度の第3次調査からの継続調査である。

[形態・規模] 平面形態は楕円形を呈し、その規模は長軸237cm、短軸226cmを計測する。

[壁・床面] 壁は緩斜度の立ち上がりを示し、第IV層中を床面とする。床面は全域にわたり顕著に硬質化する状況を示しており、炉跡周囲および北北東側の特定の位置に硬質化が顕著な貼床を敷設する。

[炉跡] 住居跡中央に土器埋設炉を設置し、上半部を欠く榎林式の深鉢形土器を正位正立の状態に埋設する。炉の周囲が貼床の敷設により周堤状を呈する。対置するPit 1とPit 2を結ぶ軌跡上に特別に敷設された貼床とともに炉跡が位置する構造上の特徴があり、この平面形を相似形に二分する中心線が住居の主軸と理解され、SI-1009が同一の基本構造を補完的に提示する好例である。なお、この主軸方位がSI-1009の主軸方位に同調する関係とともに、SI-1006の主軸方位に直交する関係が看取され、主軸方位のあり方に異なる二者の存在が予測され、注意される。

[柱穴・付属施設] SI-1009の事例から、主軸の軌跡上に対置するPit 1とPit 2が主柱穴と認識される。なお、付属施設と認定される痕跡は確認されていない。

[堆積土] 第III層および第IV層を起源とする土壌が凹レンズ状に堆積する様相を示し、人為的な堆積

を示す特徴は識別されなかった。

[出土遺物] 図8に示す通り、住居跡中央の土器埋設炉に上半部を欠く榎林式の深鉢形土器（図17-8）を正位正立の状態に埋設する。図17-8は節の粗いLRの異方向縄文による波状の構図を特徴とし、同時に、上下の粘土帯の接合面が内面から外面に傾く成形技法上の特徴が顕著に窺われる。また、堆積土中に遺物が高い密度で分布する状況を示し、榎林式を主に合計110点、総重量1,780gの土器が出土する。図17-1は最花式の胴部資料で、SK-1007出土の図17-16・17と同一個体資料であることから、本住居跡の廃絶過程と相互の時間的関係が近接していた可能性が示唆される。図17-2・3・4は榎林式の口縁部資料で、口唇部形態が前段階の要素を継承して外端部が肥厚し、無文帯を構成する点に特徴がある。また、図17-6には榎林式に特徴的な文様要素の重層弧状文を、図17-7には渦巻曲線文を描出する。一方、石器は10点出土し、その内訳は石鏃3点（図20-8～10）、削器1点、二次加工剥片1点、微細な剥離痕を形成する剥片4点（図20-11）、三角形に研磨整形する石製品1点（図20-12）である。

[時期] 土器埋設炉の炉体土器を基準とした相対編年上の時期から榎林式期に求められる。また、堆積土から出土した土器が榎林式を主要とする中に最花式が含まれる点から、当該時期には廃絶過程にあった経緯が窺える。

SI-1009（図9・17）

[位置・確認] VIII G・H-103 グリッドに位置し、第IV層において確認した。なお、この区域は平成21年度の第3次調査からの継続調査である。

[重複関係] SI-1010と重複する関係にあり、SI-1010が先行する。

[形態・規模] 南西側の壁面を消失するが、床面の硬質化する範囲から平面形態の把握が可能であり、径317cmの円形を呈する。

[壁・床面] 北東側の壁が僅かに残存しており、急斜度に立ち上がる様相が窺える。第IV層中を床面とし、全域にわたり顕著に硬質化する状況を示し、炉跡北西側の特定の位置に硬質化が顕著な貼床を敷設する。

[炉跡] 住居跡中央に地床炉が設置され、対置するPit 1とPit 2を結ぶ軌跡上に特別に敷設された貼床とともに位置する構造上の特徴が看取される。この平面形を相似形に二分する中心線が住居の主軸と理解され、SI-1008が同一の基本的構造を具体的に提示する典型例となる。なお、この主軸方位はSI-1009の主軸方位に同調する関係にある点に注意され、通時的な検討が必要である。

[柱穴・付属施設] SI-1008の事例から主軸の軌跡上に対置するPit 1とPit 2が支柱穴と認識される。Pit 1では最花式の土器破片（図17-9・10）が覆蓋する様相を示して出土し（図版7）、一方、これと対置する関係のPit 2では楕円形の礫が直立する状態で出土しており（図版7）、立石と同質の象徴性も考慮され、注意される。なお、付属施設と認定される痕跡は確認されていない。

[堆積土] 第IV層において床面を検出した調査経過上の理由により、堆積土の特徴を把握するには至っていない。

[出土遺物] 遺物は希薄な分布状況を示し、合計27点、総重量307gの土器が出土する。図9に示す通り、Pit 1から最花式の土器破片（図17-9・10）が覆蓋する様相で出土した。図17-9は口唇部外

端が肥厚する形態を呈し、前段階における要素を残す点が古相を示す。口頸部文様帯を無文に構成し、斜位方向から施す刺突列で胴部文様帯とを区画する。胴部文様帯には斜行縄文を下地に蕨状懸垂文が垂下する。図 17-10 は口唇部端部が尖頭状を呈し、口唇部外端が肥厚する。口唇部直下の狭い幅で節の粗い LR を横位施文し、下位を異方向に縦位施文する特徴が窺われる。

[時期] Pit 1 から最花式が出土する点を考慮し、土器を基準とした相対編年上の時期は縄文時代中期後葉の最花式期以降に求められる。

SI-1010 (図 9・17・21)

[位置・確認] VIII G・H-103・104 グリッドに位置し、第 IV 層において確認した。なお、この区域は平成 21 年度の第 3 次調査からの継続調査である。

[重複関係] SI-1009 と重複する関係にあり、SI-1009 が後出である。

[形態・規模] SI-1009 との重複により南西側を消失するが、径 350cm の円形あるいは楕円形を呈するものと推測される。

[壁・床面] 壁が僅かに残存しており、急斜度に立ち上がる様相が窺える。第 IV 層中を床面とし、全域にわたり顕著に硬質化する状況を示す。

[炉跡] SI-1009 との重複により消失したものと推測され、炉跡と認定される痕跡は確認されていない。

[柱穴・付属施設] Pit 1 を検出したが、これに対応する規則的な配置が認識される検出事例が不在であり、支柱穴の認定には至らない。なお、付属施設と認定される痕跡は確認されていない。

[堆積土] 第 IV 層において床面を検出した調査経過上の理由により、堆積土の特徴を把握するには至っていない。

[出土遺物] 遺物は希薄な分布状況を示し、合計 1 点、総重量 7g の土器が僅かに出土する。図 17-11 に示す通り、重層弧線文を描出する榎林式の破片が出土する程度で、年代的位置付けの根拠となる確実な一括遺物に乏しい。一方、石器は凝灰岩製の扁平な円礫を素材とし、顕著な敲打痕を伴う磨石 1 点 (図 21-1) が出土する。

[時期] 床面から榎林式が出土する点を考慮し、土器を基準とした相対編年上の時期は縄文時代中期後葉の榎林式期以降に求められる。

SI-1011 (図 9)

[位置・確認] VIII A・B-106 グリッドに位置し、第 III 層下部から第 IV 層最上部において確認した。なお、この区域は平成 21 年度の第 3 次調査からの継続調査である。

[形態・規模] 平成 18 年度に実施した確認調査のトレンチにより東側を消失するが、平面形態は円形を呈すると推測される。規模は径 289cm を計測する。

[壁・床面] 壁が僅かに残存しており、急斜度に立ち上がる様相が窺える。第 IV 層中を床面とし、軟弱な状況を示す。

[炉跡] 炉跡と認定される痕跡は確認されていない。

[柱穴・付属施設] 柱穴・付属施設と認定される痕跡は確認されていない。

[堆積土] 第Ⅲ層・第Ⅳ層を起源とする単一層が堆積する。

[出土遺物] 遺物は希薄な分布状況を示し、合計2点、総重量8gの土器が僅かに出土する。図17-12・13に示す通り、榎林式の破片が出土する程度で、年代的 position 付けの根拠となる確実な一括遺物に乏しい。

[時期] 堆積土から榎林式が出土する点を考慮し、土器を基準とした相対編年上の時期は縄文時代中期後葉の榎林式期以降に求められる。

SI-1012 (図9)

[位置・確認] ⅧH-102・103 グリッドに位置し、第Ⅳ層において確認した。なお、この区域は平成21年度の第3次調査からの継続調査である。顕著に硬質化する床面が存在する点、壁が僅かに残存する点、隣接して住居跡が重複関係を示して偏在する点を根拠に住居跡と解釈した。

[形態・規模] 南西側を消失するが、平面形態は円形あるいは楕円形を呈するものと推測される。規模は径201cmを計測する。

[壁・床面] 壁が僅かに残存しており、急斜度に立ち上がる様相が窺える。第Ⅳ層中を床面とし、顕著に硬質化する状況を示す。

[炉跡] 炉跡と認定される痕跡は確認されていない。

[柱穴・付属施設] 柱穴・付属施設と認定される痕跡は確認されていない。

[堆積土] 第Ⅳ層において床面を検出した調査経過上の理由により、堆積土の特徴を把握するには至っていない。

[出土遺物] 年代的 position 付けの根拠となる確実な遺物の出土は認められない。

[時期] 基準となる土器の出土事例が不在であり、相対編年上の時期は不明であるが、隣接する住居跡との関係から縄文時代中期中葉以降の時期と推測される。

2. 土坑

SK-1001 (図10)

[位置・確認] ⅧN-92 グリッドに位置し、第Ⅳ層最上部において確認した。

[形態・規模] 隅丸長方形を呈し、その規模は長軸139cm、短軸102cmを計測する。

[壁・底面] 第Ⅴ層上部を底面とし、断面形が皿状を呈する。

[堆積土] 第Ⅲ層を起源とする暗褐色土が堆積する。

[出土遺物] 年代的 position 付けの根拠となる確実な遺物の出土は認められない。

[時期] 第Ⅲ層を起源とする暗褐色土が堆積する状況から、縄文時代中期以降の時期に求められる。

SK-1002 (図10)

[位置・確認] ⅧP-93・94 グリッドに位置し、第Ⅴ層最上部において確認した。

[形態・規模] 楕円形状を呈し、その規模は長軸133cm、短軸115cmを計測する。

[壁・底面] 第Ⅴ層中を底面とし、断面形が逆台形状を呈する。

[堆積土] 第Ⅲ層を起源とする黒褐色土と暗褐色土が凹レンズ状に堆積する。

[出土遺物] 年代的 position 付けの根拠となる確実な遺物の出土は認められない。

[時期] 第Ⅲ層を起源とする黒褐色土と暗褐色土が堆積する状況から、縄文時代中期以降の時期に求められる。

SK-1003 (図10)

[位置・確認] VII O・P-100 グリッドに位置し、第Ⅳ層上部において確認した。

[形態・規模] 不整な楕円形を呈し、その規模は長軸109cm、短軸71cmを計測する。

[壁・底面] 第Ⅳ層中を底面とし、断面形が箱形を呈する。

[堆積土] 第Ⅲ層を起源とする暗褐色土が堆積する。

[出土遺物] 年代的 position 付けの根拠となる確実な遺物の出土は認められない。

[時期] 第Ⅲ層を起源とする暗褐色土が堆積する状況から、縄文時代中期以降の時期に求められる。

SK-1004 (図10)

[位置・確認] VII M-102 グリッドに位置し、第Ⅳ層最上部において確認した。

[形態・規模] 楕円形を呈し、その規模は長軸70cm、短軸57cmを計測する。

[壁・底面] 第Ⅴ層上部を底面とし、断面形が皿状を呈する。

[堆積土] 第Ⅱ層および第Ⅲ層を起源とする褐色土と暗褐色土が凹レンズ状に堆積する。

[出土遺物] 年代的 position 付けの根拠となる確実な遺物の出土は認められない。

[時期] 第Ⅲ層を起源とする暗褐色土が堆積するが、第Ⅱ層を起源とする黒褐色土が混在する状況を考慮すると、年代的 position 付けが不明である。

SK-1005 (図10)

[位置・確認] VII T-106・107 グリッドに位置し、第Ⅳ層において確認した。なお、この区域は平成21年度の第3次調査からの継続調査である。

[形態・規模] 円形を呈する小型の土坑であり、その規模は径56cmを計測する。

[壁・底面] 第Ⅳ層下部を底面とし、断面形が皿状を呈する。

[堆積土] 白頭山火山灰 (B-Tm) と識別されるテフラと褐色土が互層を成して堆積する。

[出土遺物] 年代的 position 付けの根拠となる確実な遺物の出土は認められない。

[時期] 白頭山火山灰 (B-Tm) と識別されるテフラを指標に年代的 position 付けを考慮すると、10世紀中頃以前の時期と把握されるが、近世以降の遺構に同質のテフラが堆積する事例も散見され、近世以降に帰属する可能性もある。

SK-1007 (図10・17・18)

[位置・確認] VIII C-105、VIII D-104・105 グリッドに位置し、第Ⅲ層下部から第Ⅳ層最上部において確認した。なお、この区域は平成21年度の第3次調査からの継続調査である。

[形態・規模] 長楕円形を呈し、その規模は長軸137cm、短軸70cmを計測する。

[壁・底面] 第Ⅳ層上部を底面とし、断面形が逆台形を呈する。

[堆積土] 第Ⅲ層と第Ⅳ層を起源とする暗褐色土が堆積する。

[出土遺物] 土坑南東端の堆積土最上層および土坑縁辺で、横転する榎林式の深鉢形土器が破片化した状態で出土した (図17-15・図18-1)。また、堆積土から敲石1点も出土している (図版15)。

図17-15は口唇部形態が前段階の要素を継承して外端部が肥厚し、縦位の隆帯により加飾する点において古相を示す。口唇部直下に横位の隆帯を付加する点に特徴があり、隆帯により凹線文と同質の文

様効果を演出する資料として注意される。口頸部および胴部文様に先行する胸骨文の型式学的特徴を大きく残し、横位の楕円形文を描出する点に文様構成上の特徴がある。図12-10、図15-3、図16-10が楕円形文の祖型的要素を端的に示す好例となる。図17-16・17は最花式の同一個体資料で、口縁部が波状を呈する。口唇部形態が尖頭状を呈する点と、口唇部直下を幅狭の無文帯を表出する点に型式学的特徴が窺われ、胴部に縦走する単軸絡条体第1類を施す。SI-1008出土の図17-1と同一個体資料であり、SI-1008の廃絶過程と相互の時間的關係が近接していた可能性が示唆される。

[時期] 堆積土から榎林式とともに最花式が出土する点を考慮し、土器を基準とした相対編年上の時期は縄文時代中期後葉の最花式期以降に求められる。

SK-1008 (図10)

[位置・確認] VIII E-104 グリッドに位置し、第IV層上部において確認した。なお、平成21年度の第3次調査で、この区域について調査が実施されている。

[形態・規模] 円形を呈し、その規模は径79cmを計測する。

[壁・底面] 第IV層を底面とし、断面形が皿状を呈する。

[堆積土] 第III層と第IV層を起源とする褐色土が堆積する。

[出土遺物] 年代的な位置付けの根拠となる確実な遺物の出土は認められない。

[時期] 第III層と第IV層を起源とする褐色土が堆積する状況から、縄文時代中期以降の時期に求められる。

SK-1009 (図10)

[位置・確認] VIII G-103 グリッドに位置し、第IV層において確認した。なお、この区域は平成21年度の第3次調査からの継続調査である。

[形態・規模] 隅丸長方形を呈し、その規模は長軸171cm、短軸116cmを計測する。

[重複関係] SI-1006と重複する関係にあり、SI-1006が先行する。

[壁・底面] 第IV層を底面とし、断面形が皿状を呈する。

[堆積土] 第III層と第IV層を起源とする褐色土が堆積する。

[出土遺物] 年代的な位置付けの根拠となる確実な遺物の出土は認められない。

[時期] 円筒上層d式および円筒上層e式期以降のSI-1006に後出する重複関係を考慮すると、同様に円筒上層d式および円筒上層e式期以降に帰属時期が求められる。

3. 土器埋設遺構

SR-1002 (図9・17、図版14)

[位置・確認] VII N-95・96 グリッドに位置し、第III層下部から第IV層上部において確認した。

[形態・規模] 平成18年度に実施した確認調査のトレンチにより北側を消失する。掘方は不整形を呈し、その規模は短径62cmを計測する。土器を正位正立の状態に埋設する。

[堆積土] 第III層と第IV層を起源とする褐色土が土器内部および掘方に堆積する。

[出土遺物] 最花式の深鉢形土器を埋設する。図17-14は口頸部文様帯に横走縄文を、胴部文様帯には斜行縄文を表出し、同一原体の異なる方向施文により装飾効果を演出する点に特徴がある(図版14)。

4. 焼土遺構

SN-1001 (図10)

[位置・確認] VIII G-102 グリッドに位置し、第IV層において確認した。なお、平成21年度の第3次調査で、この区域について調査が実施されている。

[形態・規模] 楕円形を呈し、その規模は長径103cm、短径56cmを計測する。赤色変化の度合いが小さい。

[出土遺物] 年代的 position 付けの根拠となる確実な遺物の出土は認められない。

[時期] 周辺に縄文時代中期中葉以降の竪穴住居跡が重複関係を示して偏在する状況を考慮すると、同一の時間的關係にある竪穴住居跡に伴う炉跡の可能性も指摘される。しかし、これに対応する規則的な配置を示す柱穴の検出事例は不在である。

SN-1002 (図8・図10)

[位置・確認] VIII F・G-104 グリッドに位置し、第IV層において確認した。なお、この区域は平成21年度の第3次調査からの継続調査である。

[重複関係] SI-1007 と重複する関係にあり、SI-1007 が後出である。

[形態・規模] 円形を呈し、その規模は径44cmを計測する。

[出土遺物] 年代的 position 付けの根拠となる確実な遺物の出土は認められない。

[時期] 周辺に縄文時代中期中葉以降の竪穴住居跡が重複関係を示して偏在する状況を考慮すると、同一の時間的關係にある竪穴住居跡に伴う炉跡の可能性も指摘される。しかし、これに対応する規則的な配置を示す柱穴の検出事例は不在である。

SN-1003 (図10)

[位置・確認] VIII F-104 グリッドに位置し、第IV層において確認した。なお、この区域は平成21年度の第3次調査からの継続調査である。

[形態・規模] 円形を呈し、その規模は径39cmを計測する。

[出土遺物] 年代的 position 付けの根拠となる確実な遺物の出土は認められない。

[時期] 周辺に縄文時代中期中葉以降の竪穴住居跡が重複関係を示して偏在する状況を考慮すると、同一の時間的關係にある竪穴住居跡に伴う炉跡の可能性も指摘される。しかし、これに対応する規則的な配置を示す柱穴の検出事例は不在である。

5. Pit (図11)

Pit は第III層下部から第IV層最上部において、SP-1003～1008・1010・1011の合計8基を確認した。平面形態が径25～50cmの円形で、断面形態が箱形を呈するものが主要を占める。これらはVII O-99・100、VII P-99・101、VII Q-98 グリッドの一定の区域に分布する傾向が窺われるが、建物や柵列等を構成する規則的な配置関係は認識されない。また、年代的 position 付けの根拠となる確実な遺物の出土は認められないが、堆積土の質性から近世以降の Pit を含む可能性も考慮される。

第4章 出土遺物

第1節 出土土器 (図12～19)

調査の結果、合計 2,943 点・総重量 32,431 g の土器片が出土し、その内訳は遺構内出土土器が 2,391 点・27,555 g、第Ⅰ層および遺物の主要な包含層である第Ⅱ層・第Ⅲ層を出土層準とする土器が 552 点・4,876 g である。重量に基づく型式別の出土比率は、中期中葉の円筒上層 d 式および円筒上層 e 式を中核とし、これに中期後葉の榎林式、最花式が続き、遺構には反映されない活動と遺跡規模の時間的動態を間接的に提示する。

また、遺物の分布状態は遺跡内でも相対的に希薄な状況を示し、特に、調査区南東側にあたる遺構分布の空白域と、遺跡東端にあたる竪穴住居跡が重複する (SI-1006～1012) 区域以東の集落外郭において顕著に希薄化する傾向を示す。また、遺構の位置関係に対して一定の傾向が窺え、捨て場・盛土遺構・廃絶過程にある住居跡等の特定の場所に遺物を廃棄・集積する行為が長期間踏襲される空間利用の形態が推測される。同時に、集落の空間構成を一定の秩序の下に維持する統制の存在が想定される。以下に細別編年を基軸に総括する。

円筒下層 d 式

図 18-2 は頸部の径が縮小し、胴部上端に胴部最大径を設定する点に特徴がある。僅かに残る口縁部文様帯には結束第一種が、胴部文様帯には多軸絡条体が施文され、頸部に無文帯を形成する。また、胎土に繊維とともに凝灰岩を由来とする白色粒子を混入し、内面に平滑なミガキによる器面調整を施す。円筒下層 d₂ 式への編年的位置付けが可能な資料として理解される。僅かに 1 点の出土である。

円筒上層 b 式

隆帯で区画された口頸部文様帯に、隆帯で表出する弧状文様に縄による馬蹄形状押圧を並列に加える点に特徴があり、縄の側面圧痕と自条自巻を含む絡条体による加飾も普遍的な文様要素として看取される。僅かに 1 点の出土である。

円筒上層 c 式

隆帯で区画された口頸部文様帯に、隆帯で表出する弧状文様に馬蹄形の刺突文と縄の側面圧痕を並列多段に加える点に特徴がある。馬蹄形の刺突文には押引手法と連続刺突手法の異なる二つの施文手法が看取され、図 18-4 は連続刺突手法により刺突文を加える例である。僅かに 1 点の出土である。

円筒上層 d 式・円筒上層 e 式

口唇部端部が尖頭状を呈し、端部外面が肥厚する型式学的な規則性が窺え、斜行縄文を下地に幅狭の隆帯により胸骨文を表出する文様構成に特徴がある。口唇部端部外面の肥厚は、端部外端に粘土帯を接合する手法により表出し、下端の器面調整を実施しない点が異質な特徴として看取され (図 18-5～7、図 19-1)、技術形態に反映された地域的特性としての解釈も可能であり、看過できない型式構造上の変異である。なお、これと同質の事例が青森市近野遺跡に散見される (青森県教育委員会『近野遺跡Ⅸ』2006)。また、成形技術上の特徴として、上下の粘土帯の接合面が内面から外面に傾く外傾接合のあり方が顕著化する傾向が看取される (図版 14)。この特徴は中期末葉の大木 10 式併行土器の段階には技術上の特徴として定着しており、成形技術の連続性を端的に示す初現の事例と

して評価される。同時に、粘土帯を二帯で一工程に成形するあり方が窺え、この工程を単位に幅約4～5cmの間隔で剥離する例が多く窺える。

文様構成は四単位の縦位区画文を表出する点に構造上の特徴があり、その施文順位には規制的秩序が看取され、中心で四分割される縦位隆帯を形成し、横位の隆帯により胴部文様帯の下端を規定する。これにより四単位の縦位区画文が顕示され、単位文様となる胸骨文を充填するあり方が観察される。一方、後続する円筒上層 e 式では、隆帯による文様表出手法が沈線文へと置換される点に文様構造上の特徴と、先行型式からの大きな技術的変換が認識される。しかし、文様構成に両者間で共有する要素が随所に窺え、これに同調して同一の施文順位を踏襲している点が、型式変化の成立要因を考察する上で特に注意される。円筒上層 d 式では、隆帯文の両側縁に沈線と同質の工具痕による軌跡が二条一対で施される事例が多く存在し、隆帯文が剥落する資料において隆帯文と工具痕との相関関係が明瞭に観察される。この沈線と同質の工具痕には目的に応じた異なる二者が存在し、施文工程における隆帯文との前後関係により識別される。一つは隆帯文を器面に付加する工程で隆帯の定着と器面調整の目的で隆帯文の両側縁に加える調整痕であり（図 12-10・21、図 13-15・16、図 15-2）、もう一方が隆帯を付加する前工程における文様構図の下描きを目的とした工具の軌跡である（図 12-1・3、図 13-1・2・15・16、図 14-1・8・9、図 15-1・2、図 16-1、図 18-5、図版 14）。この両者の初現は円筒上層 a 式の段階に求められ、技術構造上の連続性が窺える。特に後者に内在する製作と連動した身体動作を包括する技術構造が注意され、沈線文を描出する動作と同質の身体動作がすでに円筒上層 a 式から土器製作上の技術構造下に成立していたと理解される。

円筒上層 d 式における下描きを目的とした調整工具の軌跡には、調整工具の種類とその扱い方に円筒上層 e 式の文様を構成する沈線と同一の属性が看取されることから、調整工具が施文工具へ置換されたとする見方が可能である。つまり、両者からは、半截竹管状の工具により断面形態が「U」字形を呈する例（図 12-8、図 13-1・2・10・11、図 14-8・9、図 15-2、図 16-1）、多截竹管状の工具により断面形態が角形を呈する例（図 12-1・3、図 13-8・9・15・16、図 14-3、図 15-1）、半截竹管状の工具を筥状に扱い断面形態が「V」字形を呈する例（図 16-10）、半截竹管状の工具による内側竹管文の例（図 16-10）が抽出され（青森県教育委員会『近野遺跡Ⅸ』2006）、両型式間で共有される現象が窺える。さらに、この施文具の種類とその扱い方が多様な点は、円筒上層 e 式における施文具と施文手法が流動的で、未だ流儀が確立されていない揺らいだ過程と理解され、その要因を調整工具から施文工具への置換に求めることも可能である。それと同時に、円筒上層 d 式と円筒上層 e 式の器形と文様構造に同一性がある点、文様の施文順位に代表される一連の製作工程に同一性がある点、口唇部形態等の技術形態的要素に同一性がある点、多様な工具の種類と扱い方に同一性がある点から、円筒上層 d 式の製作者あるいは製作技術を伝授された受け手が保持する、伝統的な技術的要素と施文技術に関連する身体動作を基層に、調整工具から施文工具への置換と単位文様から隆帯文の脱却を採決し、円筒上層 d 式から円筒上層 e 式への型式変化が成立したものと解釈される。

さらに、底部に網代痕を伴う事例が希少な点が特徴として看取され、図 14-8・図 16-7 の底部に器面調整から逃れた網代痕が僅かに残る形跡が観察される事例から（図版 13）、器面調整により網代痕を磨り消す工程が復元される。

なお、図 12-1～5、図 13-2・7・13・14、図 14-4～7、図 15-4・5、図 16-1～4、図 18-

6・7は胴部文様が地文的な要素に減退し、編年の位置が円筒上層d式と円筒上層e式に共伴する例である。

榎林式

口唇部形態が前段階の要素を継承して外端部が肥厚し、凹線による装飾を加える点に特徴がある(図19-6)。口頸部文様帯および胴部文様帯には斜行縄文、横走縄文、絡条体を下地に、刺突列による横位の区画帯(図19-8・11)、重層弧線文(図13-12・図17-6・11、図19-7)、渦巻曲線文(図12-15～17、図17-7)、渦巻懸垂文(図19-9・10・12)を表出する点に文様構成上の特徴が看取される。図12-13・14、図17-2・3、図19-5は胴部文様が地文的な要素に減退する例である。また、図17-15、図19-2・3は口唇部直下に横位の隆帯を付加する点に特徴があり、隆帯により凹線文と同質の文様効果を演出する資料として注意される。図17-15の口頸部および胴部文様は先行する胸骨文の型式学的特徴を大きく残し、横位の楕円形文を描出する点に文様構成上の特徴がある。図12-10、図15-3、図16-10が楕円形文の祖型的要素を端的に示す好例である。なお、縄文を縦位に回転施文する例(図19-4・10)も散見され、この段階に増加する傾向を示す。

最花式

口唇部形態は前段階の要素が減退し、外端部の肥厚が退化する点に特徴があり、口唇部端部が尖頭状を呈する形態が多い。同時に、先行する渦巻曲線文・渦巻懸垂文が形骸化し、文様要素が「U」字状文、逆「U」字状懸垂文(図19-13・17・18)、楕円形区画文へと集約される。図19-17は逆「U」字状懸垂文が形骸化により直線的な文様構成へと転化する例であり、図19-18・19は条痕文を下地に施文する点において異質である。また、図17-9は口唇部外端が肥厚し、前段階における要素を残す点において古相を示す。図17-10も同質の特徴が看取され、図17-14の文様表出手法と同様に、口唇部直下の狭い幅と胴部とを異方向縄文で構成する文様構造に特徴があり、図19-14～16の口唇部直下に幅狭の無文帯を形成する例と同質の文様構造が窺われる。

大木10式併行土器

「J」字・「C」字・「N」字を基調とするアルファベット状の文様構成を特徴とし(図19-22・23)、胴部文様帯の下端を波状文・波頭文(図19-22)・錨状文で表出する構成も特徴的に窺える。また、器面を縄文で覆う例(図19-20・21)には、縄文を縦位に回転施文する施文手法上の特徴が看取される。

十腰内2式(鈴木克彦 2001)

図19-24は口唇部端部に単節RLを回転施文し、口頸部文様帯に同一原体で斜行縄文を表出する。頸部が「く」字状に屈曲する特徴的な器形が多い。

弥生時代の土器

図19-25は口頸部文様帯と胴部文様帯とを浅い横位沈線で画す。器壁が薄い点に特徴があり、胴部文様帯への斜行縄文は乾燥の度合いが進行し、器面が硬質化した状態で施文が実施された工程が復元され、弥生時代中期に編年の位置が求められる可能性がある。

第2節 出土石器 (図20～23)

調査の結果、第Ⅰ層および遺物の主要な包含層である第Ⅱ・Ⅲ層を出土層準とする石器が合計109点出土し、遺構内出土が23点、遺構外出土が86点である。器種組成の内訳は、石鏃6点、石錐19点、石筥3点、搔器1点、削器23点、二次加工剥片5点、微細な剥離痕を形成する剥片24点、石核3点、剥片10点、敲石4点、磨石6点、石皿2点、石製品3点である。石錐・削器・微細な剥離痕を形成する剥片の占める割合が高く、器種組成から石匙が欠落している点、礫石器の組成比率が低い点等が特徴として看取される。

石鏃 (図20-4・5・8～10、図21-2)

合計6点が出土し、いずれも珪質頁岩製である。その内訳は、尖基有茎鏃3点、凹基無茎鏃2点、未成品1点である。図20-10は凹基無茎鏃で、側縁の屈曲により五角形を呈する形態に特徴がある。図20-4・5・10はアスファルトが付着し、そのあり方から矢柄への装着方法が想定可能な例である。

石錐 (図20-1、図21-3～14)

合計19点が出土し、いずれも珪質頁岩製である。二次加工の主要な目的が錐部の作出に特定される例 (図20-1、図21-3～12・14)、両面調整により棒状に成形する例 (図21-13) があり、明瞭な握み部を作出する例が不在である。一方、図21-10～12は器種相互間においても小形の度合に特殊性が窺える点で、注意される。縄文時代中期後葉から後期前葉に増加する傾向があり、青森市中平遺跡に典型的事例がある (青森県教育委員会『中平遺跡』2009)。また、図21-3・11は複数の錐部を併設する例である。

石筥 (図21-16～18)

合計3点が出土し、いずれも珪質頁岩製である。素材剥片の背腹両面に二次加工を施し、左右対称となる撥形の形態を呈する。図21-16は求心的な二次加工により凸形の弧状を呈する刃部形態に特徴があり、図21-17・18は大きく刃部を欠損する。

搔器 (図21-19)

合計1点が出土し、石材は珪質頁岩製である。縦長剥片を素材とし、背面側の末端に二次加工により弧状の刃部を形成する。刃部は刃厚が薄く、緩斜度を呈する。

削器 (図21-15、図22-1～7)

合計23点が出土し、いずれも石材は珪質頁岩製である。刃部の形態や二次加工の進行度合いと刃部の強度、素材剥片に対する二次加工の位置、素材剥片の形態に変異がある (観察表参照)。図21-15は節理により分断された3点が接合した例で、鋭利な右側縁腹面側に直線的な刃部を作出する。また、接合する図21-14は分断された削器の中間部を素材に、鋭角なその一端に二次加工により錐部を作出する。図22-6～7は小形の度合に特殊性が窺える例で、鋭利な側縁に連続的な二次加工を施す。

二次加工剥片 (図22-8～10)

合計5点が出土し、石材別の内訳は珪質頁岩製が4点、カルセドニー (石英) が1点である。二次加工の頻度、規格性および連続性が低く、明確な刃部を形成していない点を特徴とし、これを器種の分類基準とする。その多くは削器の製作途上に位置付けられる可能性が高い。図22-9はカルセドニー (石英) 製の横長剥片を素材に連続性の低い二次加工を、図22-8の左右二側縁には挟り状の二次加工

を、図 22-10 は左側縁および末端に整形を目的とした二次加工を施す。

微細な剥離痕が形成される剥片（図 20-11、図 22-11・12）

合計 24 点が出土し、いずれも珪質頁岩製である。鋭利な縁辺を付帯する剥片を素材に選択し、機能部位における剥離痕の形成密度や度合に差異がある。

石核（図 22-13）

合計 3 点が出土し、石材はいずれも珪質頁岩である。図 22-13 は重厚な大形剥片を素材とする石核で、素材剥片の背面側と腹面側の両面に打面を設定し、素材剥片の側縁において並列に剥片剥離作業が進行する。剥離生産された剥片は小形の矩形剥片が主要である。また、右側縁に搔器の刃部と同質の二次加工と鋸歯縁を形成する点において、石核からの変形過程を示唆する事例と理解される。

敲石（図 23-1・2、図版 15）

合計 4 点が出土する。石材は凝灰岩の占める割合が高く、これに安山岩、砂岩が含まれる。使用に伴う異なる使用痕跡が複合して存在する例が多く、素材礫の形態に応じた機能部位の設定が成されて使用痕跡が付加される特徴が窺える。素材礫の形態、敲打の機能部位、敲打痕の度合いと状態を基準に分類する。図 23-1・2 は重厚な礫を素材とし、素材礫の特定の部位に敲打痕が形成される例である。図 23-1 は素材礫の稜に敲打痕が形成され、図 23-2 は素材礫の中央に局所的な敲打による凹部が形成される。

磨石（図 20-2・7、図 21-1、図 23-3～5）

合計 6 点が出土する。石材は凝灰岩の占める割合が高く、これに凝灰質砂岩が含まれる。使用に伴う異なる使用痕跡が複合して存在する例が多く、素材礫の形態に応じて機能部位が設定される。図 20-2・7 は楕円礫の広い平坦面を機能部位に選択し、図 20-2 は右側縁の稜を同時に機能部位に設定する。図 21-1、図 23-3・4・5 は磨痕に付随して敲打痕が形成される例である。図 21-1 は裏面の広い領域に磨痕を形成し、下端の稜を敲打の機能部位に選択する例である。図 23-3・4 は素材礫の平坦な表裏両面を機能部位に設定し、磨痕に付随して敲打による局所的な凹部を形成する例である。図 23-5 は、扁平な楕円礫を素材とし、素材の鋭角な両側縁の稜を機能部位に設定し、磨痕に伴う平滑面とともに打ち敲いた場合に生じる剥離面が形成される。同時に、素材の端部に敲打痕に付随して打撃を加えた際の衝撃による剥離痕を形成する。

石皿（図 20-3・6）

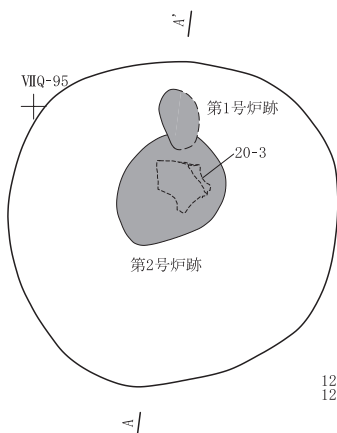
合計 2 点が出土し、石材はデイサイトおよび凝灰岩が選択される。いずれも無縁石皿で、素材の備える平坦な形態を利用し、機能部位を設定する点に特徴がある。

石製品（図 20-12、図 23-6・7）

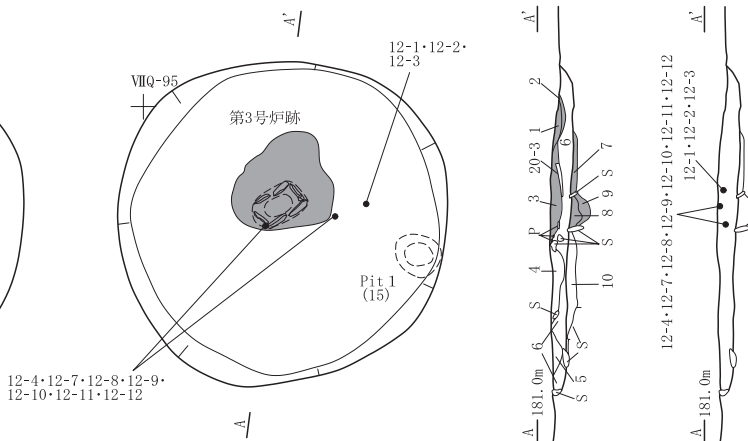
合計 3 点の出土である。図 20-12 は凝灰質泥岩製で、三角形を基調とする形態に研磨整形し、表裏両面に擦痕が顕著に観察される。図 23-6 は節理で剥離するデイサイト製の板状礫を素材とする円板状石製品で、素材の周縁を表裏両面からの二次加工により整形する。図 23-7 は自然作用により長軸上で対峙する抉りが形成される凝灰質泥岩製の楕円礫を素材とし、抉りの内側に擦痕による摩滅が観察される。



SI-1001 (新期)



SI-1001 (古期)

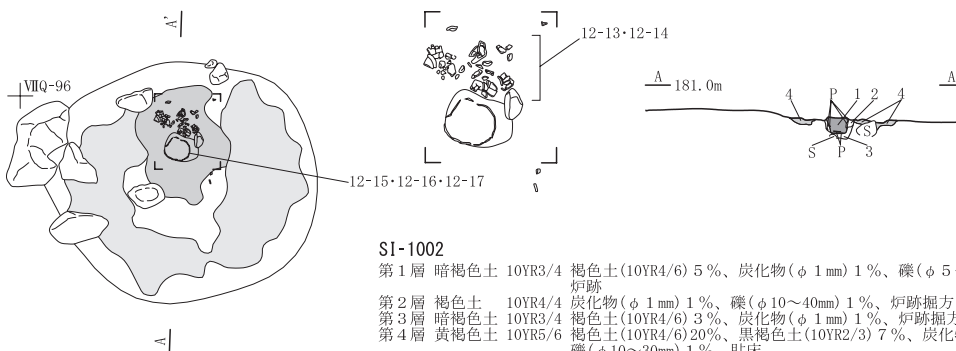


SI-1001

- 第1層 暗褐色土 10YR3/4 炭化物(φ 1~2mm) 1%、礫(φ 10~20mm) 3%、第1号炉跡
- 第2層 暗褐色土 10YR3/4 第1号炉跡
- 第3層 褐色土 7.5YR4/4 黒褐色土(10YR2/3) 3%、炭化物(φ 1mm) 1%、礫(φ 5~10mm) 1%、第2号炉跡
- 第4層 褐色土 10YR4/4 暗褐色土(10YR3/4) 3%、炭化物(φ 1mm) 1%、礫(φ 10~80mm) 2%
- 第5層 暗褐色土 10YR3/3 黒褐色土(10YR2/3) 3%、炭化物(φ 1~2mm) 1%、礫(φ 1~10mm) 1%
- 第6層 暗褐色土 10YR3/4 褐色土(10YR4/6) 30%、炭化物(φ 1mm) 1%、礫(φ 10~220mm) 5%、貼床
- 第7層 暗褐色土 10YR3/4 褐色土(10YR4/6) 10%、礫(φ 4~20mm) 2%、第3号炉跡
- 第8層 暗褐色土 10YR3/4 礫(φ 40~70mm) 1%、第3号炉跡
- 第9層 暗褐色土 10YR3/4 炭化物(φ 1mm) 1%、礫(φ 10~110mm) 1%、第3号炉跡
- 第10層 暗褐色土 10YR3/4 褐色土(10YR4/6) 30%、炭化物(φ 1mm) 1%、礫(φ 10~220mm) 5%、貼床



SI-1002

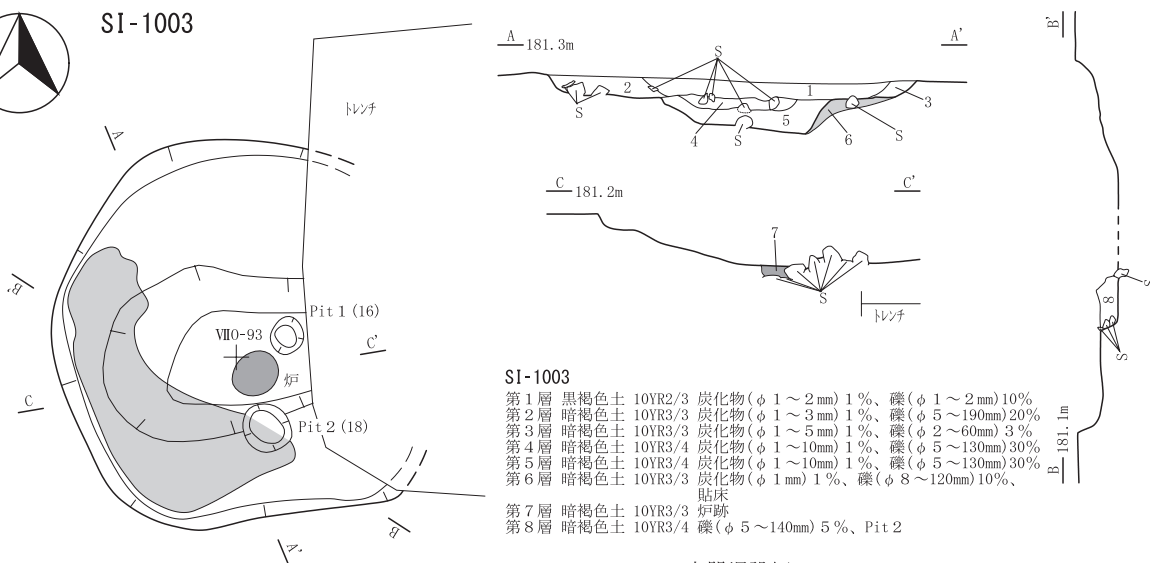


SI-1002

- 第1層 暗褐色土 10YR3/4 褐色土(10YR4/6) 5%、炭化物(φ 1mm) 1%、礫(φ 5~10mm) 15%、炉跡
- 第2層 褐色土 10YR4/4 炭化物(φ 1mm) 1%、礫(φ 10~40mm) 1%、炉跡掘方
- 第3層 暗褐色土 10YR3/4 褐色土(10YR4/6) 3%、炭化物(φ 1mm) 1%、炉跡掘方
- 第4層 黄褐色土 10YR5/6 褐色土(10YR4/6) 20%、黒褐色土(10YR2/3) 7%、炭化物(φ 1mm) 1%、礫(φ 10~30mm) 1%、貼床



SI-1003



SI-1003

- 第1層 黒褐色土 10YR2/3 炭化物(φ 1~2mm) 1%、礫(φ 1~2mm) 10%
- 第2層 暗褐色土 10YR3/3 炭化物(φ 1~3mm) 1%、礫(φ 5~190mm) 20%
- 第3層 暗褐色土 10YR3/3 炭化物(φ 1~5mm) 1%、礫(φ 2~60mm) 3%
- 第4層 暗褐色土 10YR3/4 炭化物(φ 1~10mm) 1%、礫(φ 5~130mm) 30%
- 第5層 暗褐色土 10YR3/4 炭化物(φ 1~10mm) 1%、礫(φ 5~130mm) 30%
- 第6層 暗褐色土 10YR3/3 炭化物(φ 1mm) 1%、礫(φ 8~120mm) 10%、貼床
- 第7層 暗褐色土 10YR3/3 炉跡
- 第8層 暗褐色土 10YR3/4 礫(φ 5~140mm) 5%、Pit 2

土器埋設炉
(S=1/30)

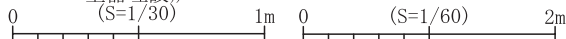
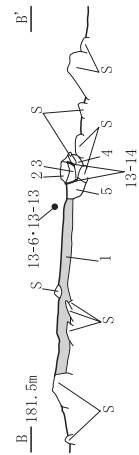
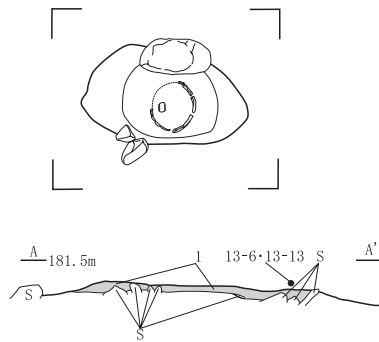
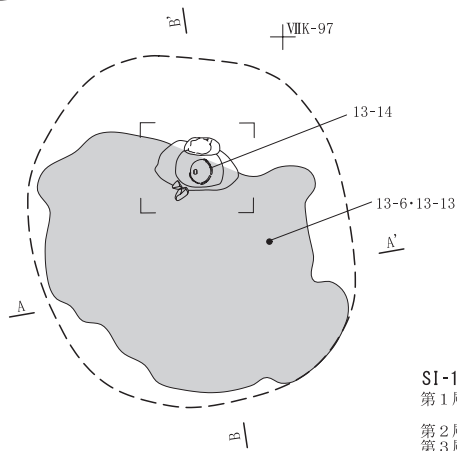


図6 SI-1001・1002・1003



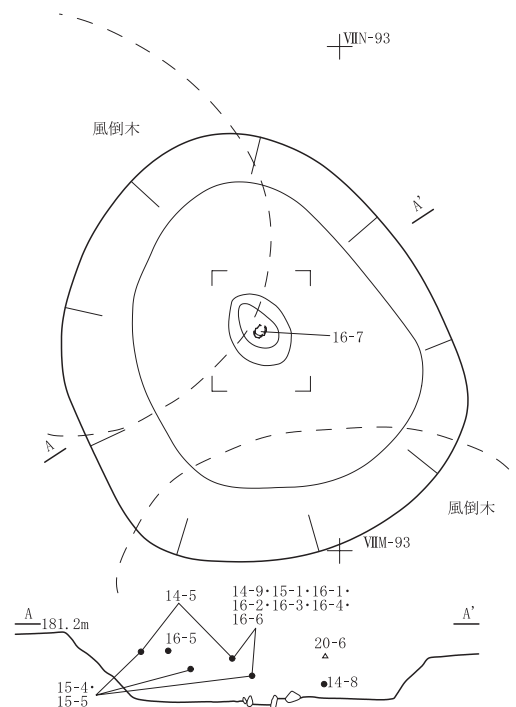
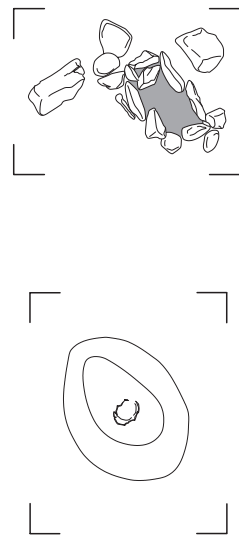
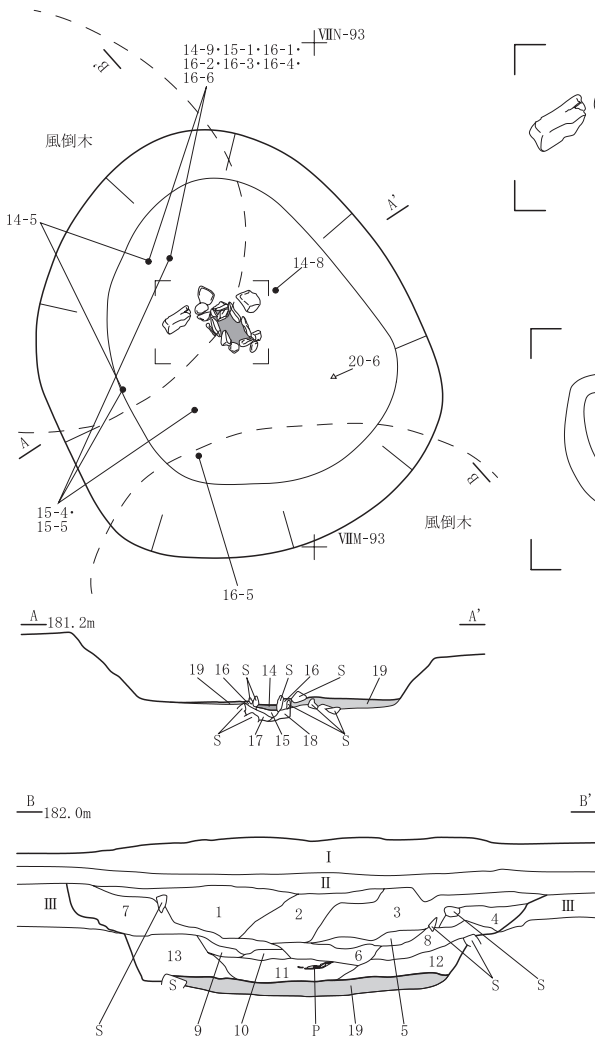
SI-1004



SI-1004

- 第1層 暗褐色土 10YR3/4 褐色土(10YR4/4)20%、炭化物(φ 1mm)1%、
礫(φ 15~180mm)30%、貼床
- 第2層 黒褐色土 10YR2/3 炭化物(φ 1mm)1%、礫(φ 3~40mm)3%
- 第3層 黒褐色土 10YR2/2 炭化物(φ 1mm)1%、礫(φ 5~13mm)2%
- 第4層 暗褐色土 10YR3/4 礫(φ 1~10mm)1%
- 第5層 暗褐色土 10YR3/3 炭化物(φ 1mm)1%、礫(φ 12~150mm)30%

SI-1005(新期)



SI-1005(古期)

SI-1005

- 第1層 暗褐色土 10YR3/4 炭化物(φ 1~2mm)1%、礫(φ 10~150mm)7%
- 第2層 暗褐色土 10YR3/3 炭化物(φ 1~3mm)1%、礫(φ 10~70mm)10%
- 第3層 暗褐色土 10YR3/4 炭化物(φ 1~10mm)1%、礫(φ 10~130mm)10%
- 第4層 暗褐色土 10YR3/4 炭化物(φ 1mm)1%、礫(φ 20~120mm)7%
- 第5層 褐色土 10YR4/4 炭化物(φ 1mm)1%、礫(φ 8~40mm)10%
- 第6層 黒褐色土 10YR3/2 炭化物(φ 1~3mm)1%、礫(φ 10~50mm)20%
- 第7層 黒褐色土 10YR2/3 礫(φ 10~150mm)25%
- 第8層 暗褐色土 10YR3/4 炭化物(φ 1mm)1%、礫(φ 20~60mm)20%
- 第9層 黒褐色土 10YR2/3 炭化物(φ 1mm)1%、礫(φ 10~120mm)20%
- 第10層 暗褐色土 10YR3/4 炭化物(φ 1~2mm)1%、礫(φ 10~20mm)20%
- 第11層 暗褐色土 10YR2/2 炭化物(φ 1~8mm)1%、礫(φ 10~100mm)40%
- 第12層 暗褐色土 10YR3/4 礫(φ 20~80mm)30%、砂質
- 第13層 暗褐色土 10YR3/4 礫(φ 6~90mm)40%、砂質
- 第14層 暗褐色土 7.5YR3/4 炭化物(φ 2~10mm)2%、焼土層
- 第15層 暗褐色土 10YR3/4 小礫(φ 5~10mm)3%
- 第16層 暗褐色土 10YR3/4 礫(φ 20~80mm)5%、灰跡掘方
- 第17層 暗褐色土 10YR3/4 礫(φ 1~20mm)1%、灰跡掘方
- 第18層 暗褐色土 10YR3/4 小礫(φ 2~13mm)2%、灰跡掘方
- 第19層 暗褐色土 10YR3/3 礫(φ 10~250mm)40%、砂質、貼床

石囲炉・土器埋設炉

(S=1/30)

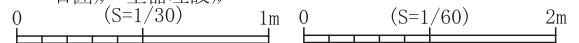
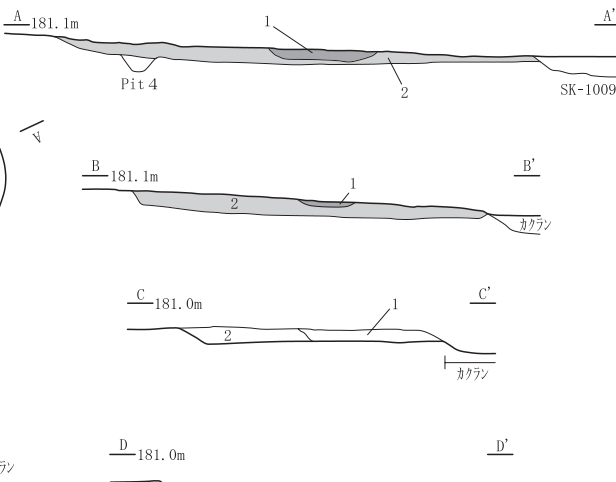
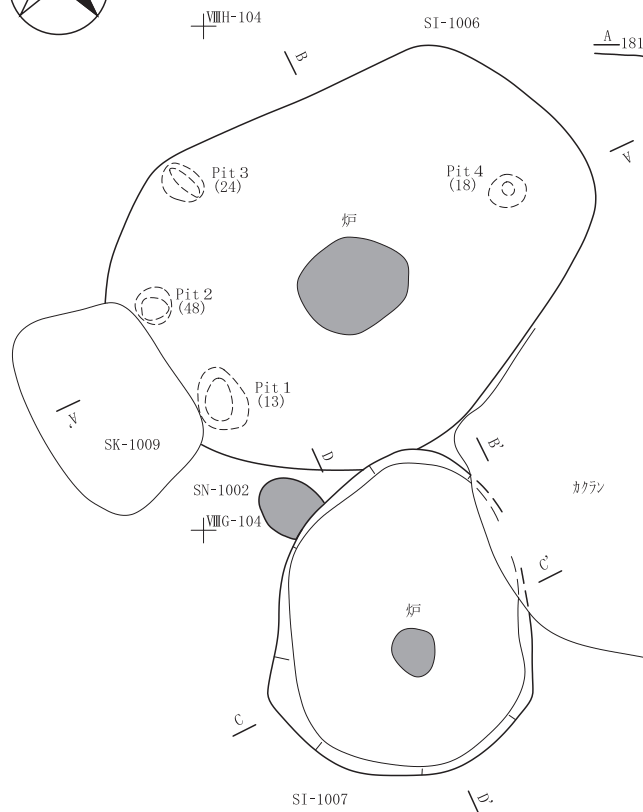


図7 SI-1004・1005



SI-1006・1007



SI-1006

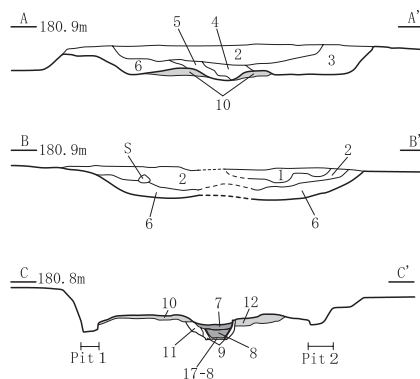
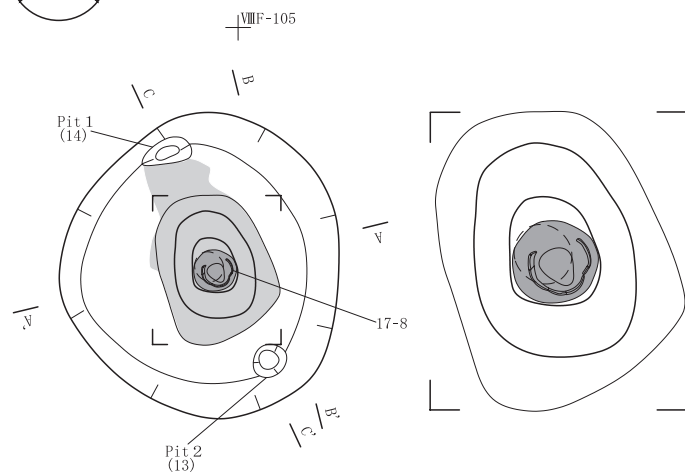
第1層 暗褐色土 10YR3/4 炭化物(φ 1~5mm) 1%
小礫(φ 10~30mm) 1%、炉跡
第2層 暗褐色土 10YR3/4 礫(φ 20~350mm) 10%、貼床

SI-1007

第1層 褐色土 10YR4/4 炭化物(φ 1~2mm) 1%
第2層 褐色土 10YR4/4 炭化物(φ 1mm) 1%、礫(φ 20~40mm) 1%



SI-1008



SI-1008

第1層 黒褐色土 10YR2/3 褐色土(7.5YR4/4) 3%、炭化物(φ 1~6mm) 1%、礫(φ 1~12mm) 1%、攪乱
第2層 褐色土 7.5YR4/4 暗褐色土(10YR3/4) 20%、炭化物(φ 1~10mm) 1%、礫(φ 10~40mm) 2%
第3層 暗褐色土 10YR3/4 褐色土(10YR4/4) 10%、炭化物(φ 1~4mm) 1%
第4層 暗褐色土 10YR3/4 褐色土(7.5YR4/4) 20%、炭化物(φ 1~10mm) 1%、浮石(φ 10~20mm) 1%
第5層 褐色土 7.5YR4/4 炭化物(φ 1mm) 1%
第6層 暗褐色土 10YR3/4 褐色土(7.5YR4/4) 20%、炭化物(φ 1~3mm) 1%、礫(φ 10~30mm) 2%
第7層 褐色土 10YR4/4 炭化物(φ 1mm) 1%、火床面
第8層 褐色土 10YR4/4 炭化物(φ 1~4mm) 1%
第9層 褐色土 10YR4/4 炭化物(φ 1mm) 1%、炉跡插方
第10層 褐色土 10YR4/6 暗褐色土(10YR3/4) 5%、炭化物(φ 1~4mm) 1%、貼床
第11層 褐色土 10YR4/4 炭化物(φ 1~2mm) 1%、炉跡插方
第12層 褐色土 10YR4/6 暗褐色土(10YR3/4) 5%、炭化物(φ 1~4mm) 1%、貼床

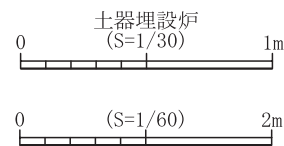


図 8 SI-1006・1007・1008

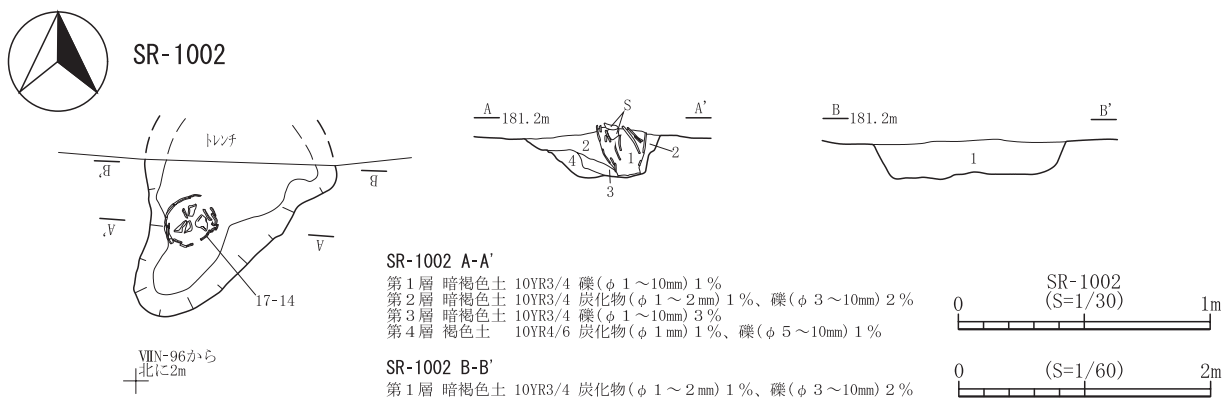
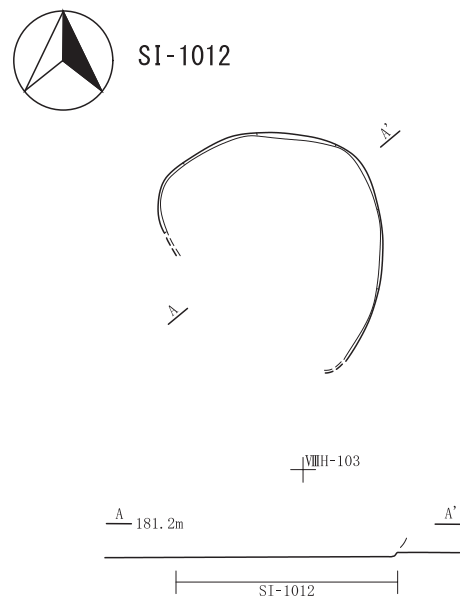
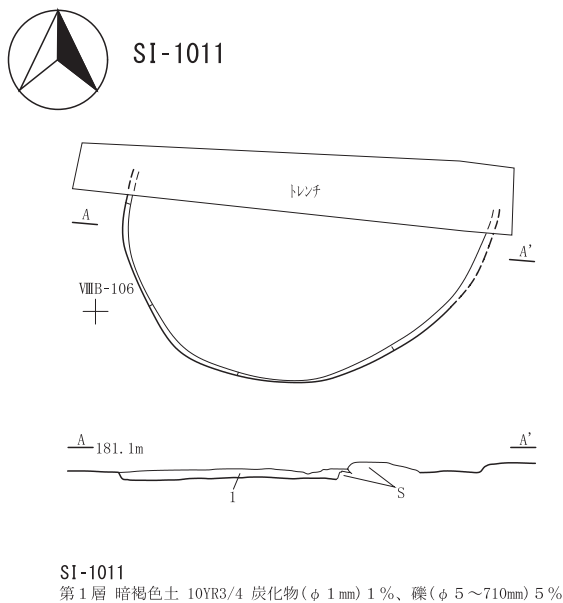
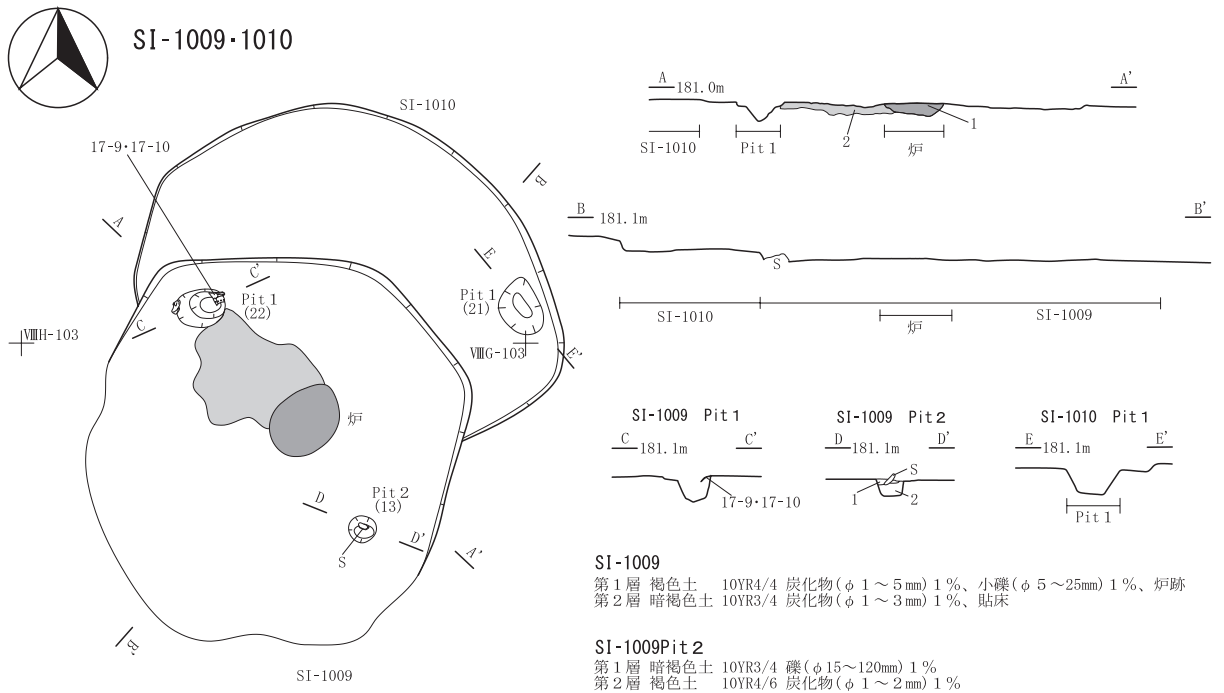
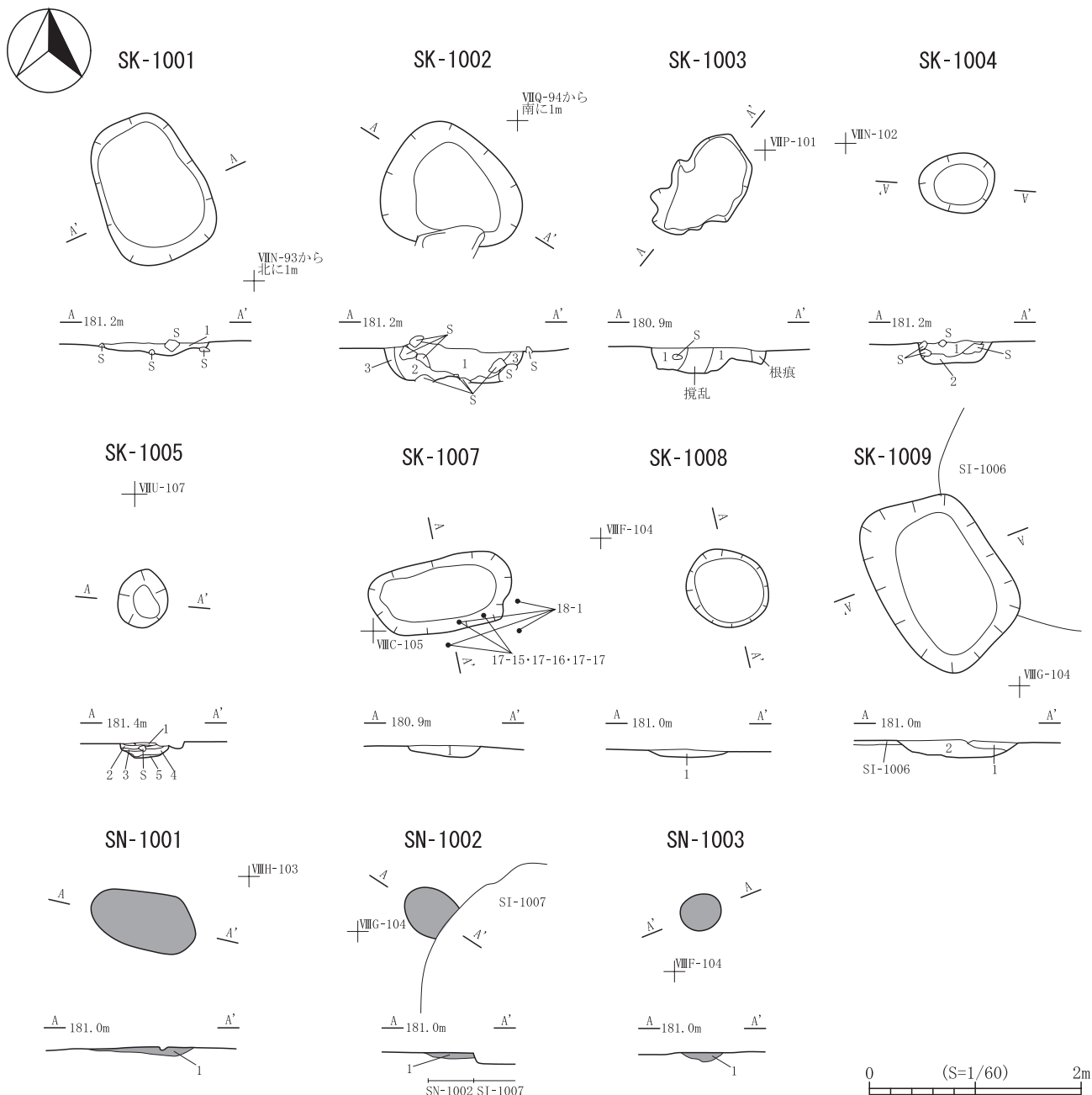


図9 SI-1009・1010・1011・1012、SR-1002



SK-1001

第1層 暗褐色土 10YR3/3 炭化物(φ 1~2mm) 1%、礫(φ 5~140mm) 2%

SK-1002

第1層 黒褐色土 10YR2/3 炭化物(φ 1mm) 1%、礫(φ 8~190mm) 2%
 第2層 暗褐色土 10YR3/4 礫(φ 10~200mm) 10%
 第3層 暗褐色土 10YR3/3 礫(φ 5~240mm) 5%

SK-1003

第1層 暗褐色土 10YR3/3 礫(φ 5~110mm) 3%

SK-1004

第1層 褐色土 10YR4/6 暗褐色土(10YR3/4)20%、炭化物(φ 1mm) 1%、
 礫(φ 10~100mm)20%
 第2層 暗褐色土 10YR3/4 黒褐色土(10YR3/2)10%、炭化物(φ 1mm) 1%、
 礫(φ 8~80mm)15%

SK-1005

第1層 暗褐色土 7.5YR3/4 火山灰層
 第2層 明褐色土 7.5YR5/6 明褐色土(7.5YR5/8)30%
 第3層 褐色土 7.5YR4/6 火山灰含む
 第4層 褐色土 7.5YR4/6 明褐色土(7.5YR5/6)20%
 第5層 暗褐色土 10YR3/4

SK-1007

第1層 暗褐色土 10YR3/4 褐色土(10YR4/4)20%、炭化物(φ 1~2mm) 1%、
 礫(φ 10~20mm) 1%

SK-1008

第1層 褐色土 10YR4/4 炭化物(φ 1~4mm) 1%

SK-1009

第1層 褐色土 10YR4/4 礫(φ 1~10mm) 1%
 第2層 褐色土 10YR4/4 炭化物(φ 1mm) 1%、礫(φ 1~10mm) 1%

SN-1001

第1層 褐色土 10YR4/6 炭化物(φ 1~5mm) 1%、小礫(φ 2~15mm) 1%

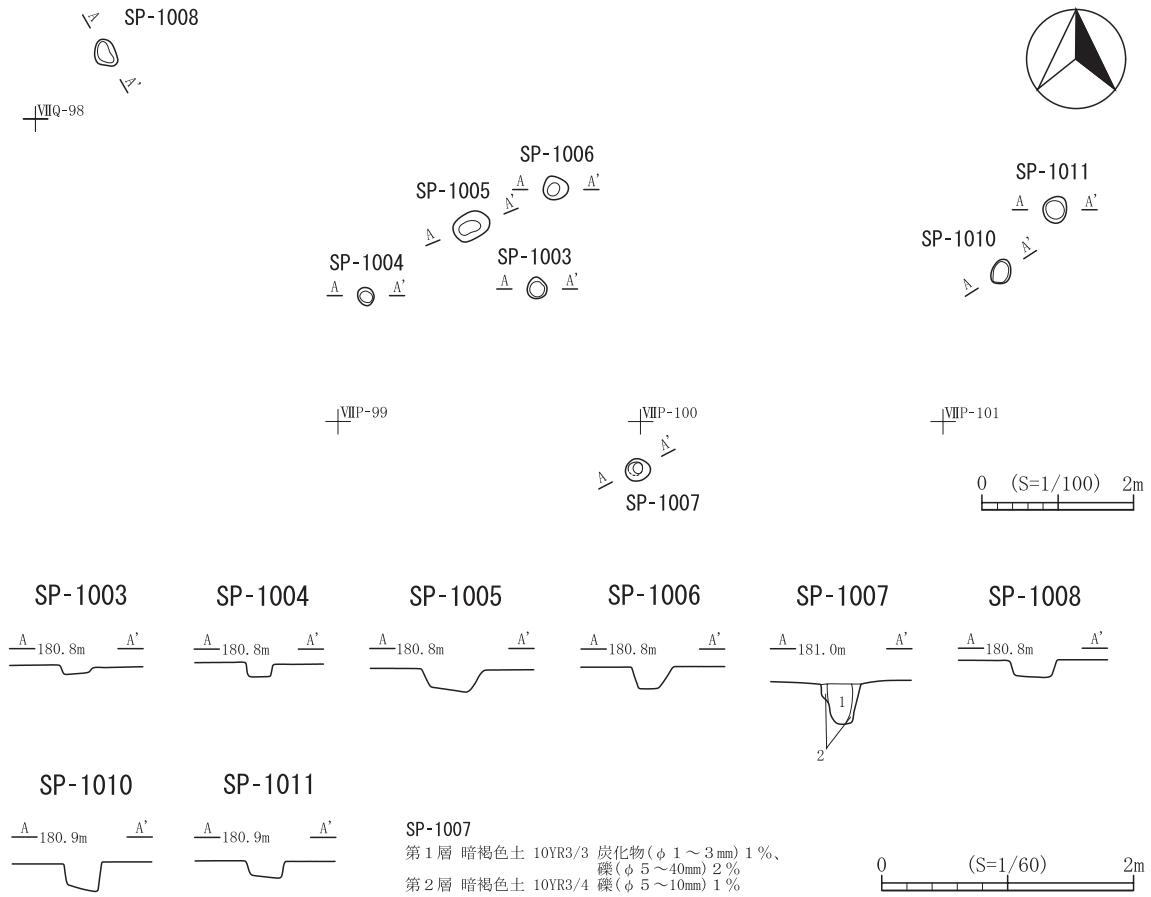
SN-1002

第1層 暗褐色土 10YR3/4 炭化物(φ 1~5mm) 1%、小礫(φ 5~55mm) 1%

SN-1003

第1層 褐色土 7.5YR4/4 暗褐色土(10YR3/4)20%、炭化物(φ 2mm) 1%、
 礫(φ 1~16mm) 1%

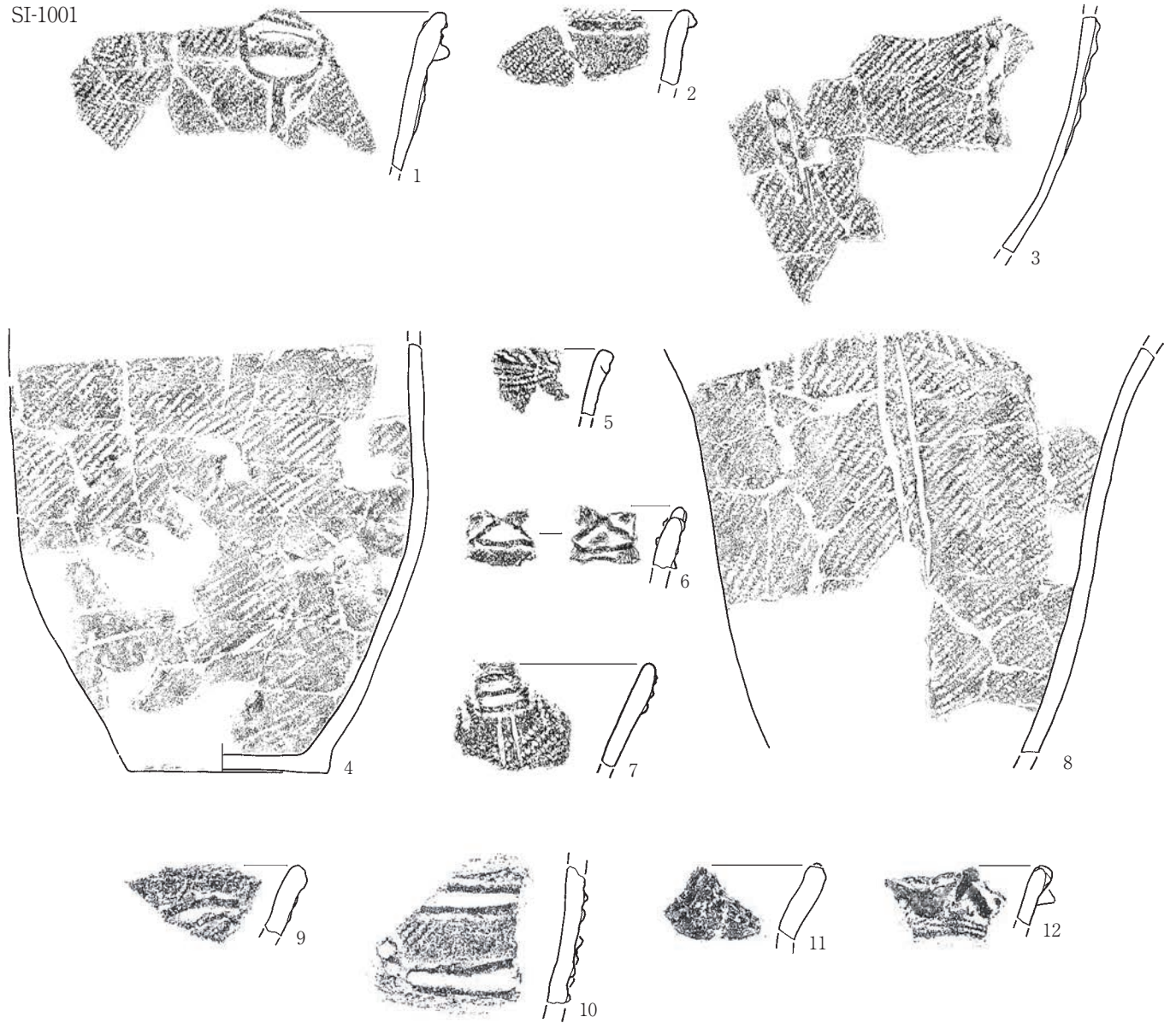
図 10 SK-1001 ~ 1009、SN-1001 ~ 1003



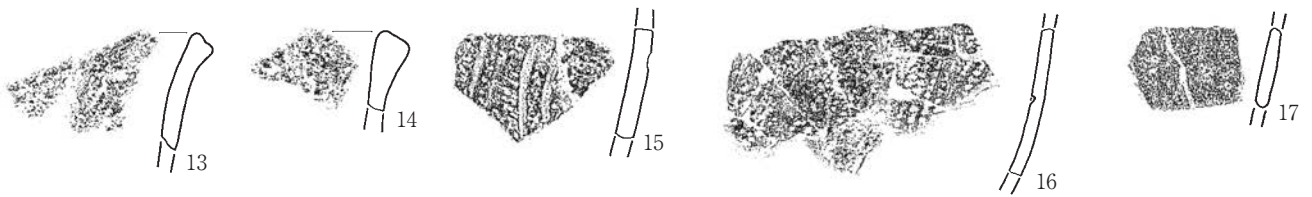
Pit 分布状況(北から)

図 11 Pit 分布状況

SI-1001



SI-1002



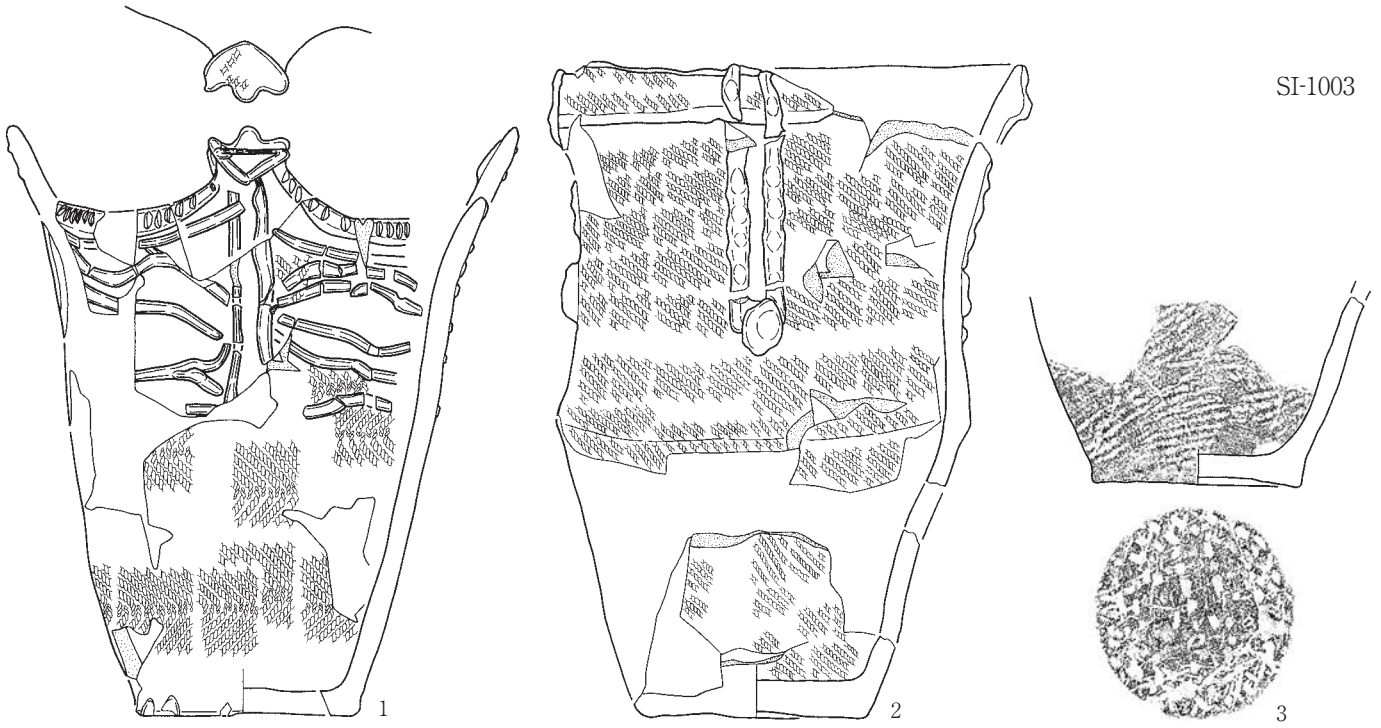
SI-1003



(S=1/3) 0 10cm

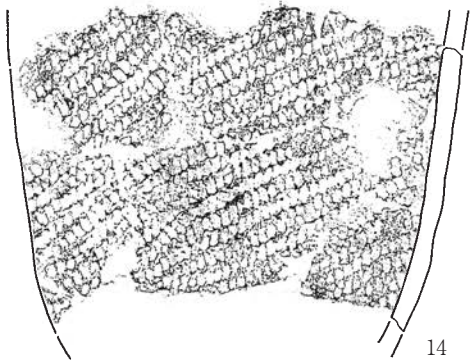
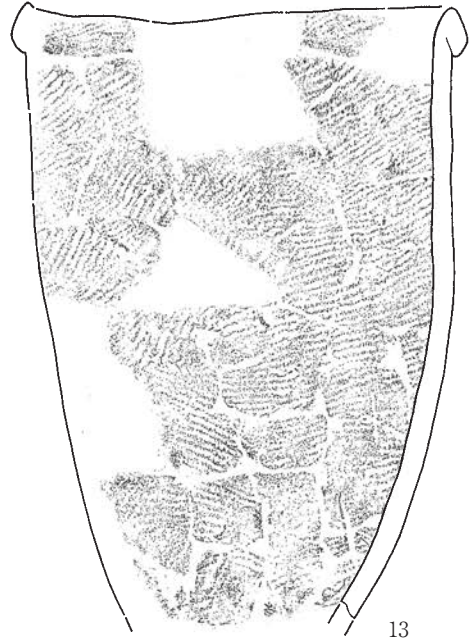
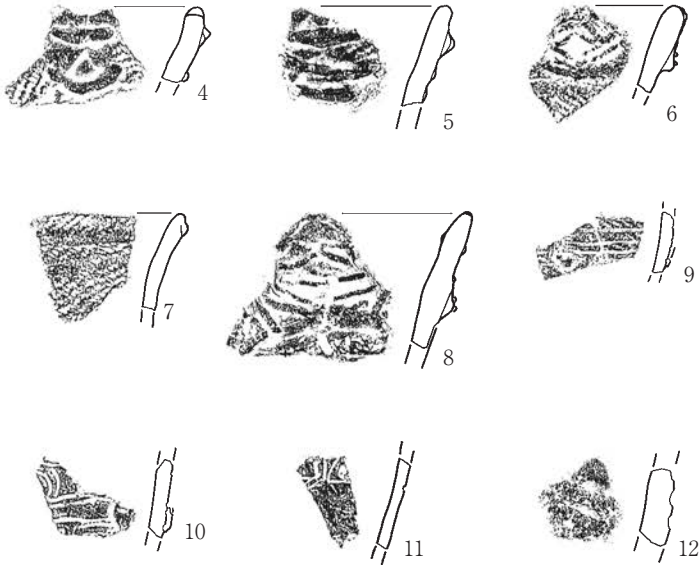
图 12 SI-1001 · 1002 · 1003(1) 出土土器

水上(2)遺跡

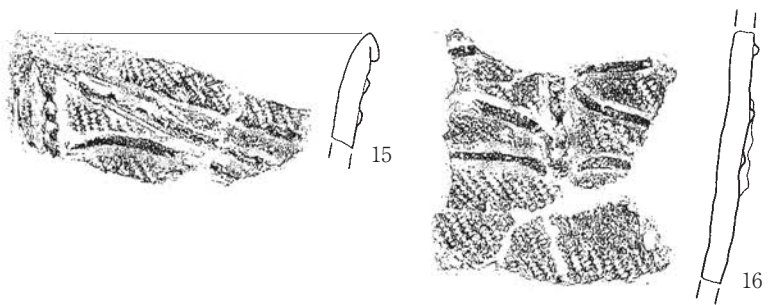


SI-1003

SI-1004



SI-1005



0 (S=1/3) 10cm

图 13 SI-1003(2) · 1004 · 1005(1) 出土土器

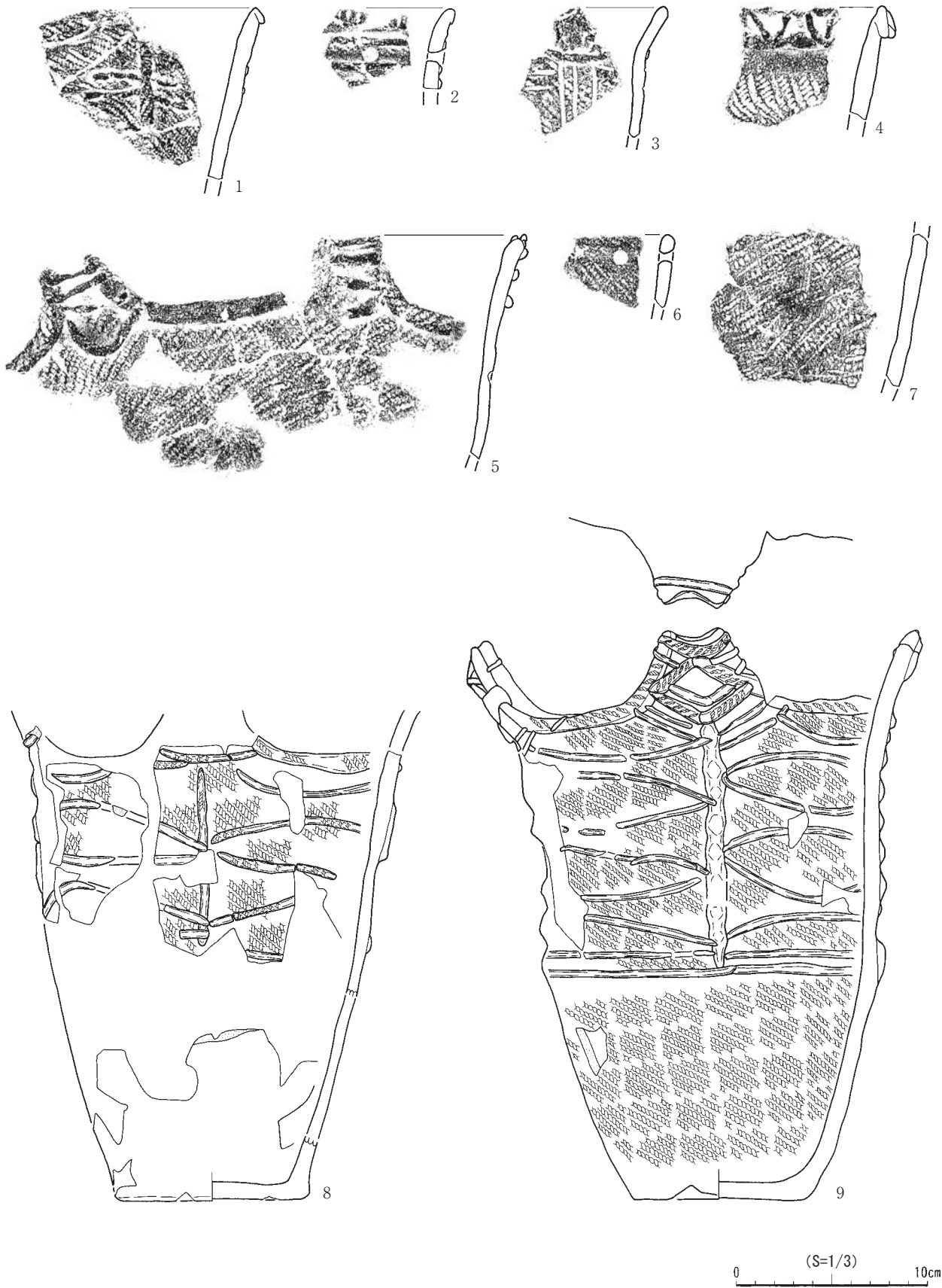


图 14 SI-1005 出土土器(2)

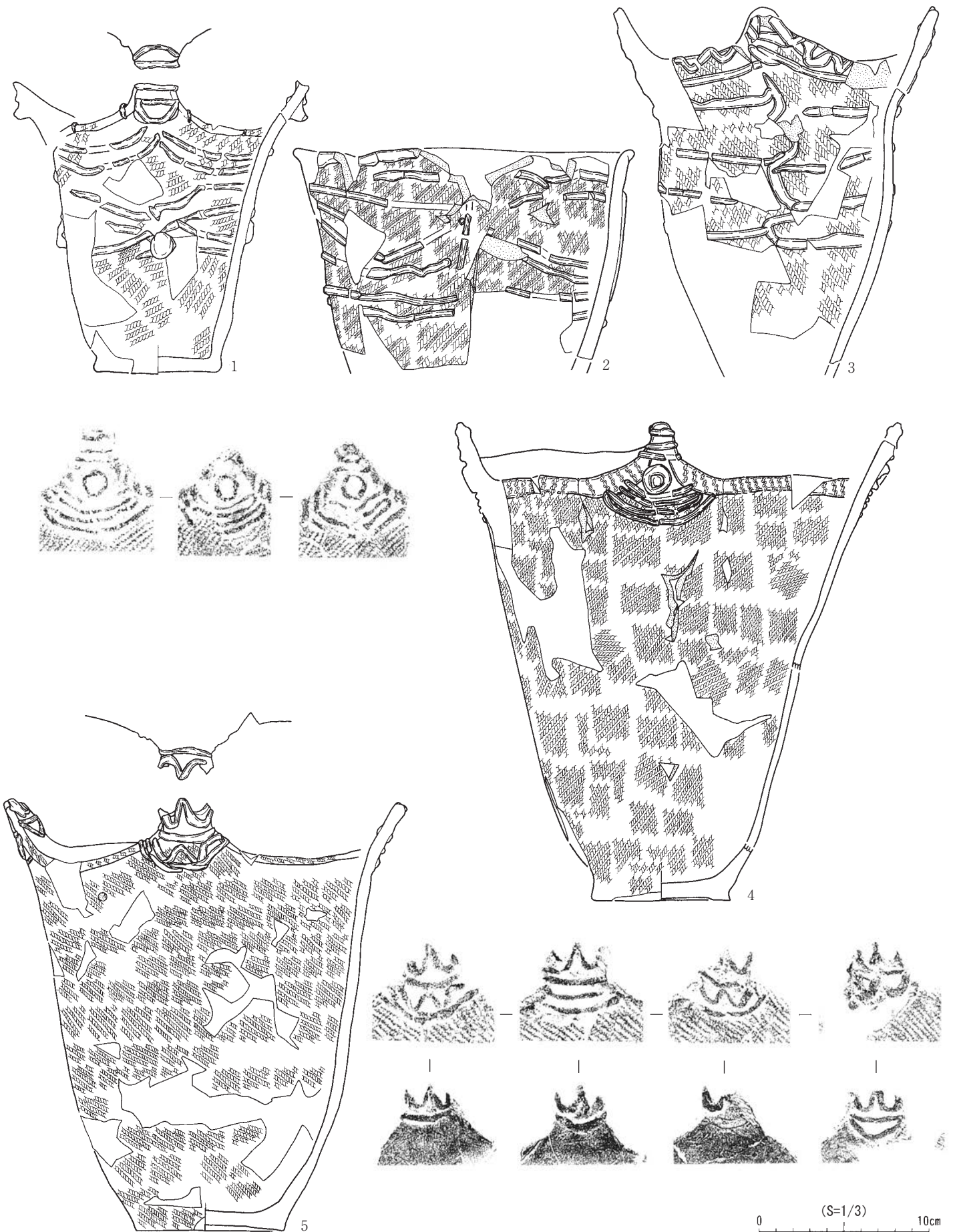
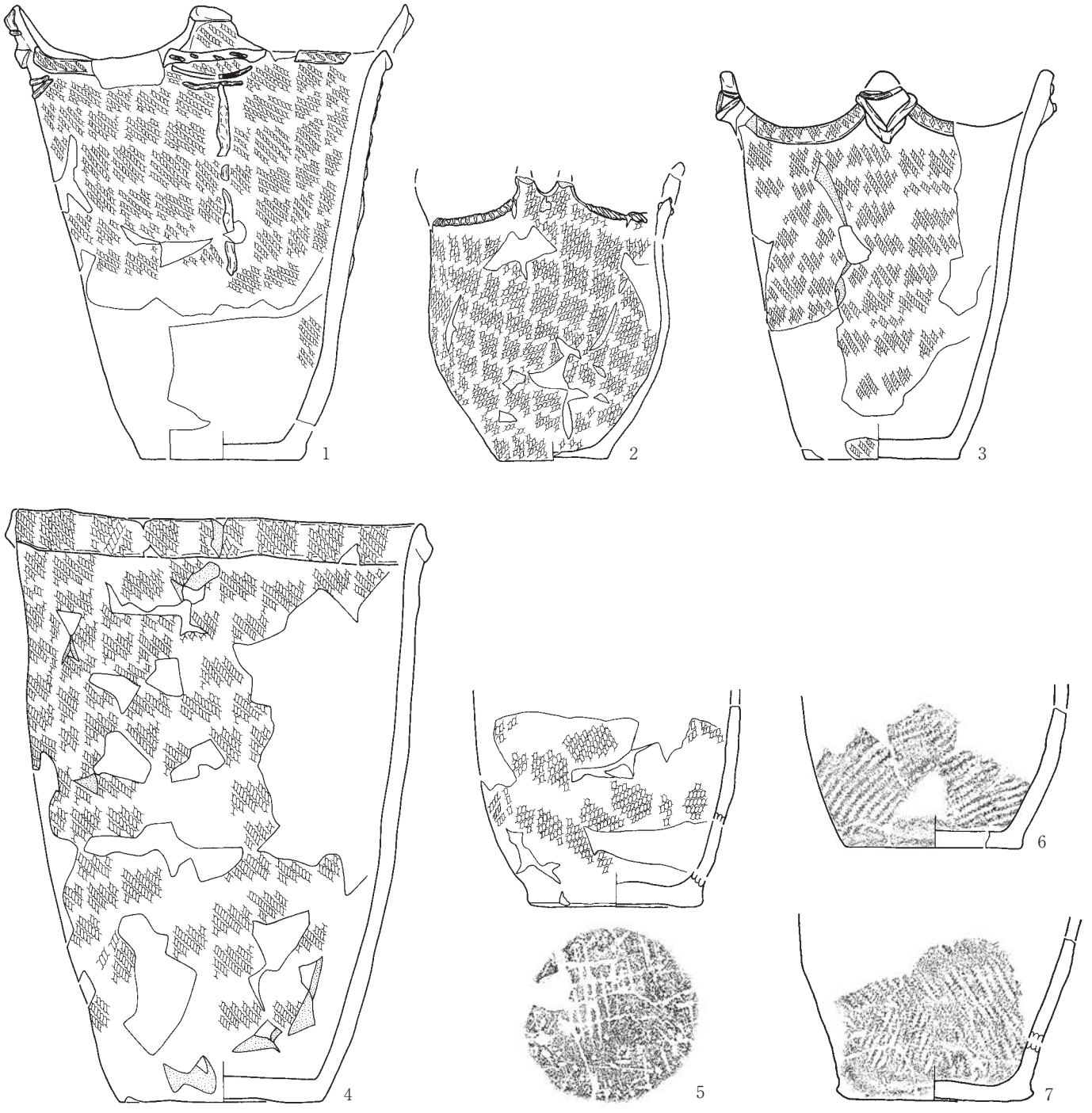


图 15 SI-1005 出土土器(3)



SI-1005

SI-1006

SI-1007

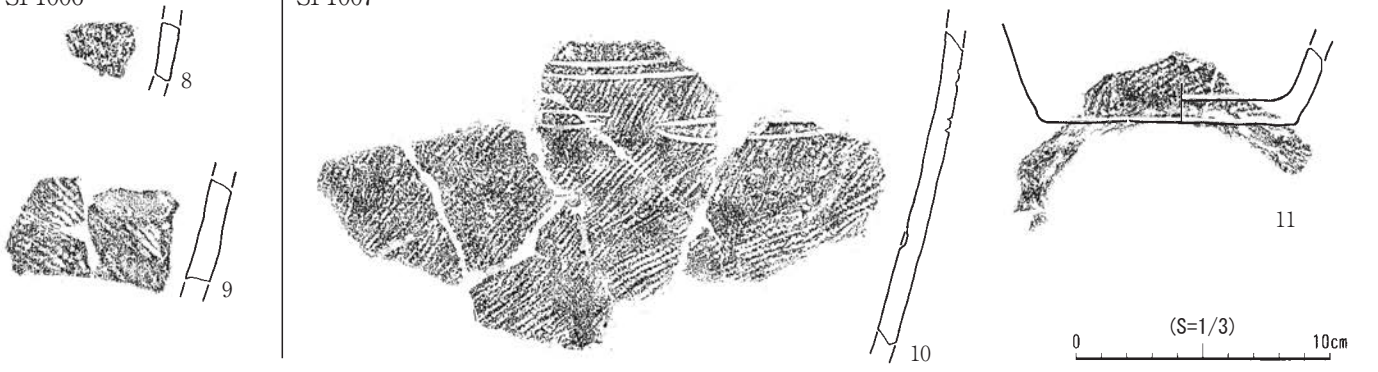
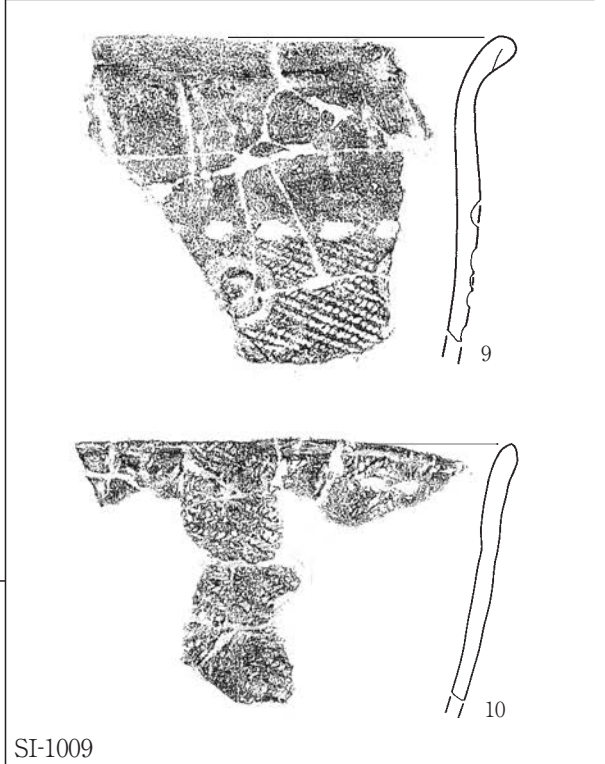
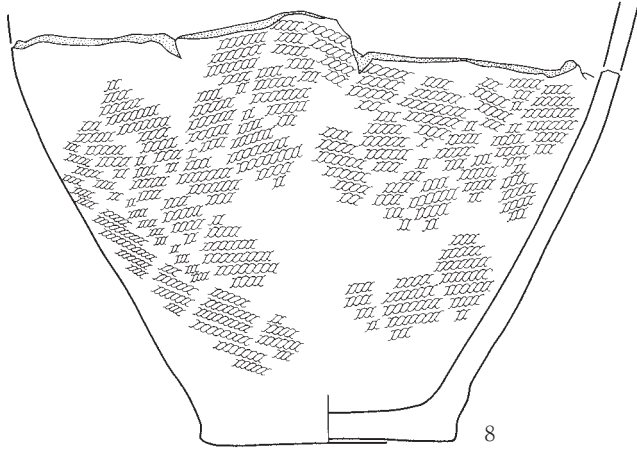
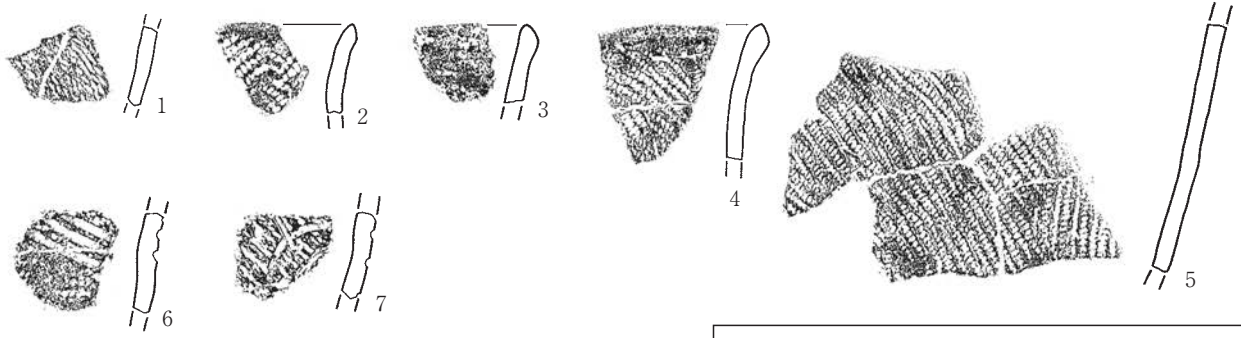


图 16 SI-1005(4) · 1006 · 1007 出土土器



SI-1008

SI-1010

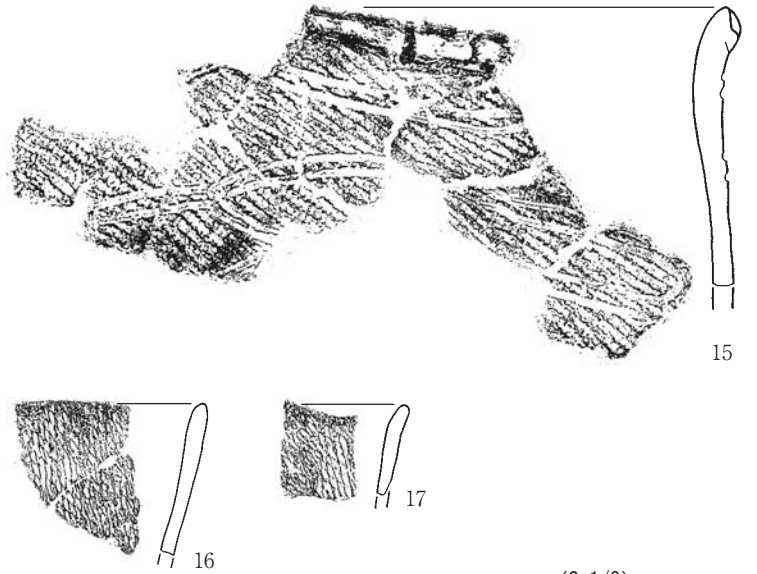
SI-1011



SI-1009

SR-1002

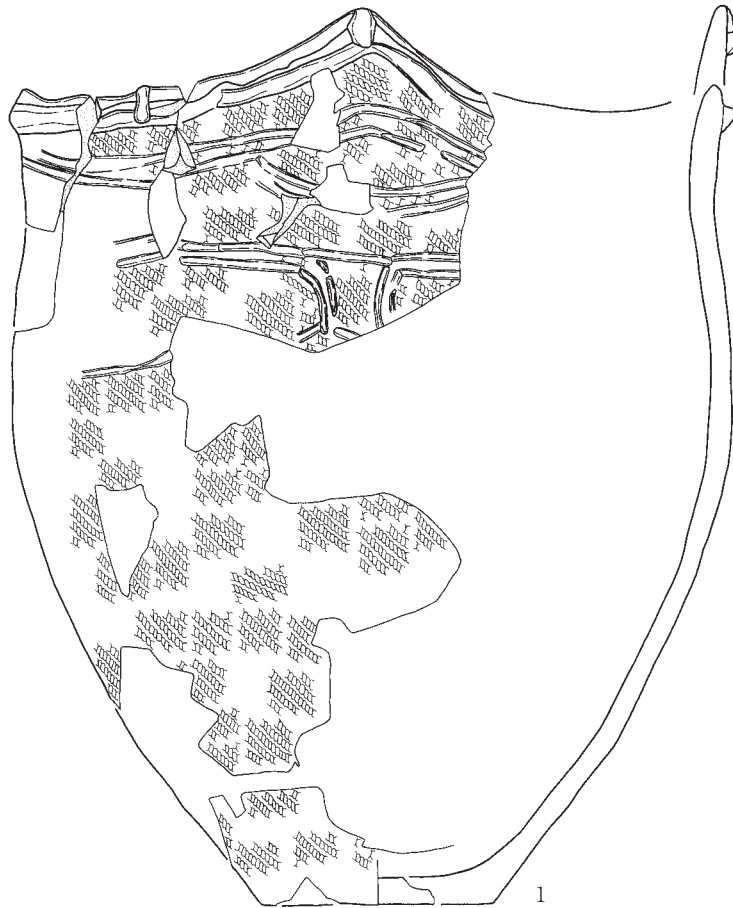
SK-1007



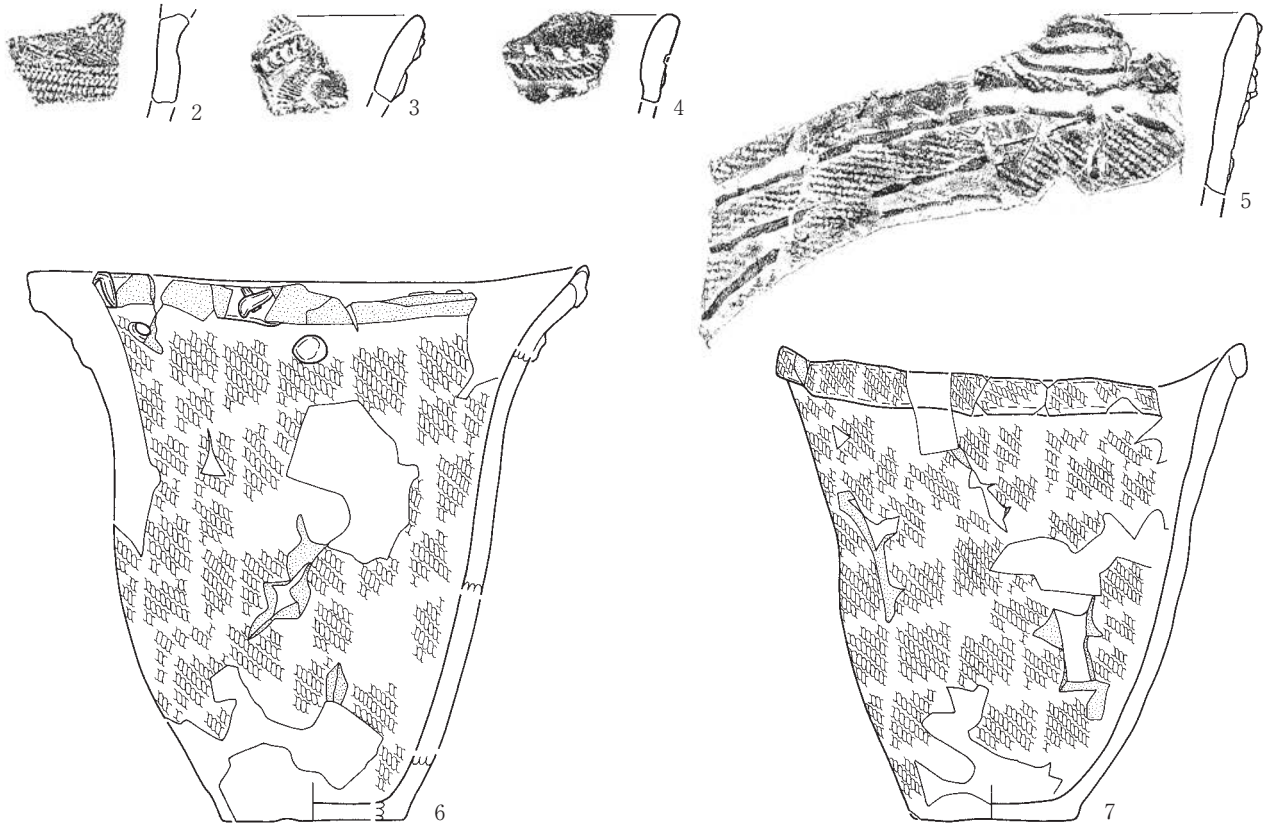
0 (S=1/3) 10cm

图 17 SI-1008 · 1009 · 1010 · 1011、SR-1002、SK-1007(1) 出土土器

SK-1007



遺構外出土土器



0 (S=1/3) 10cm

图 18 SK-1007(2)、遺構外出土土器(1)

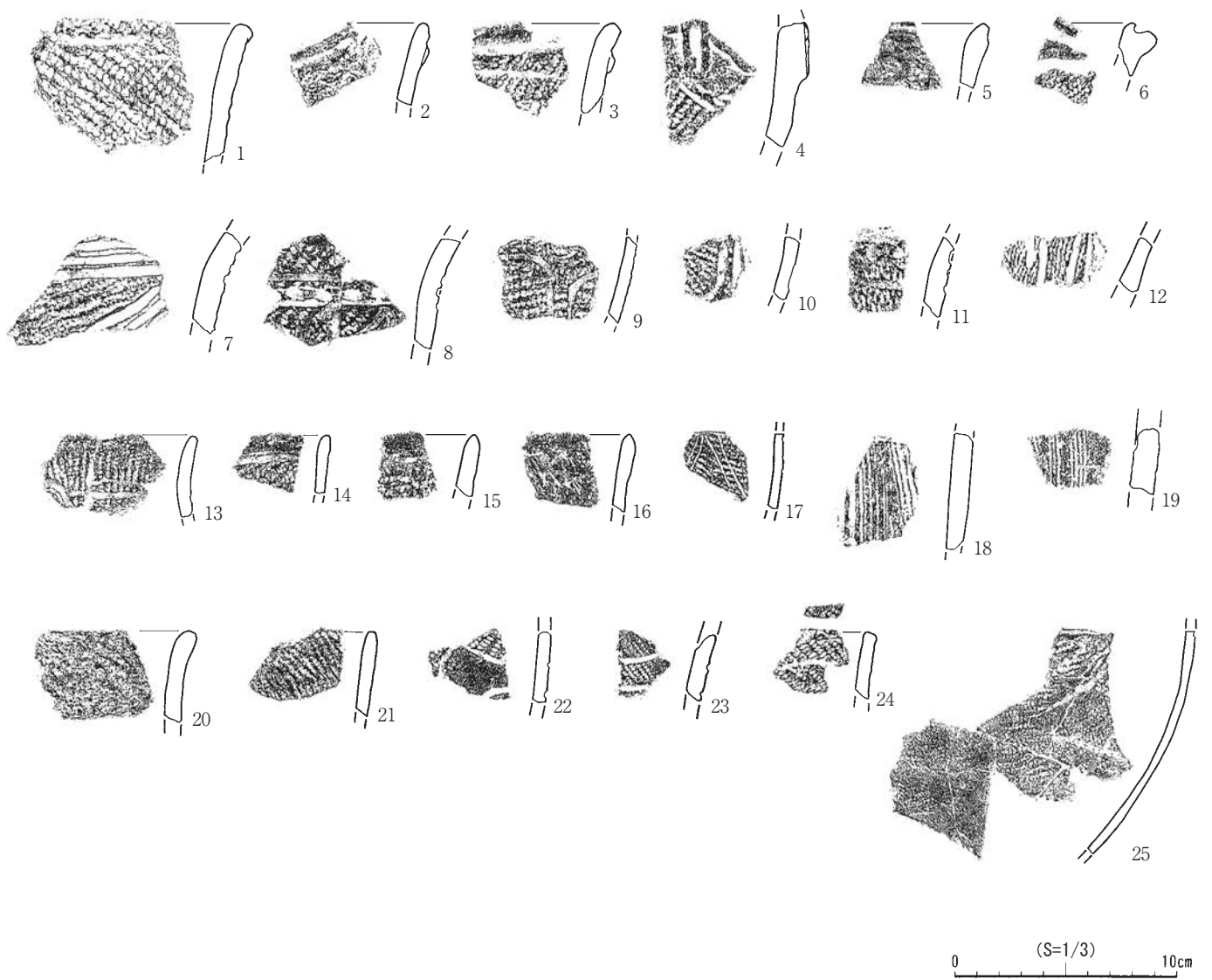
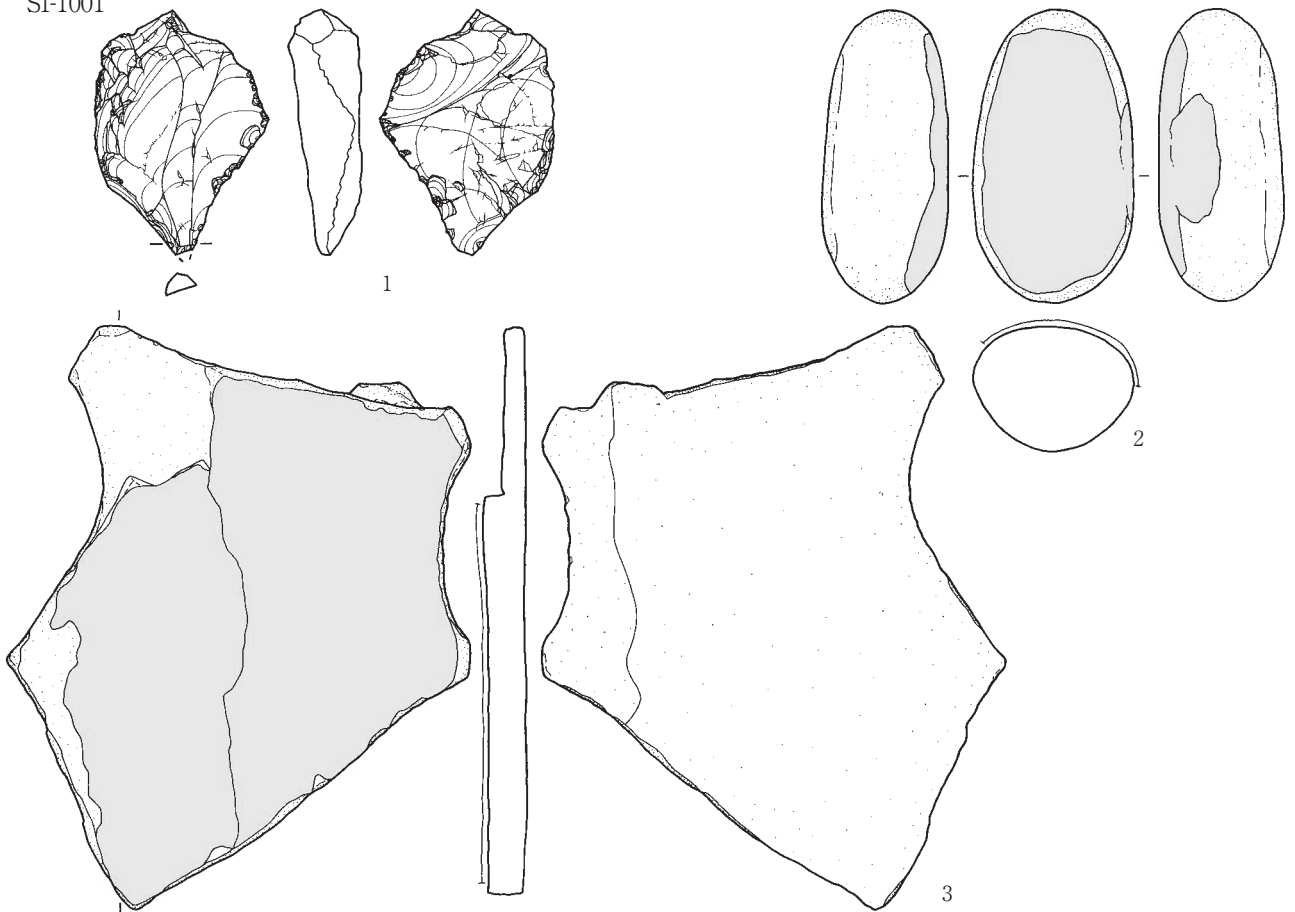
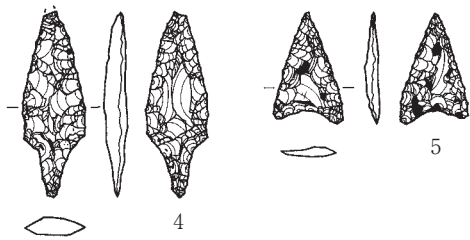


図 19 遺構外出土土器(2)

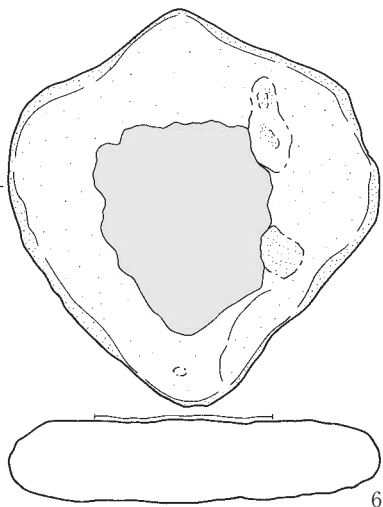
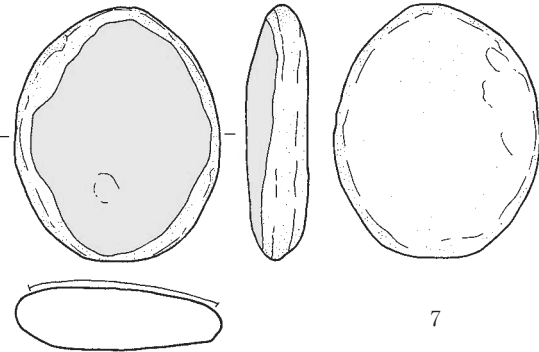
SI-1001



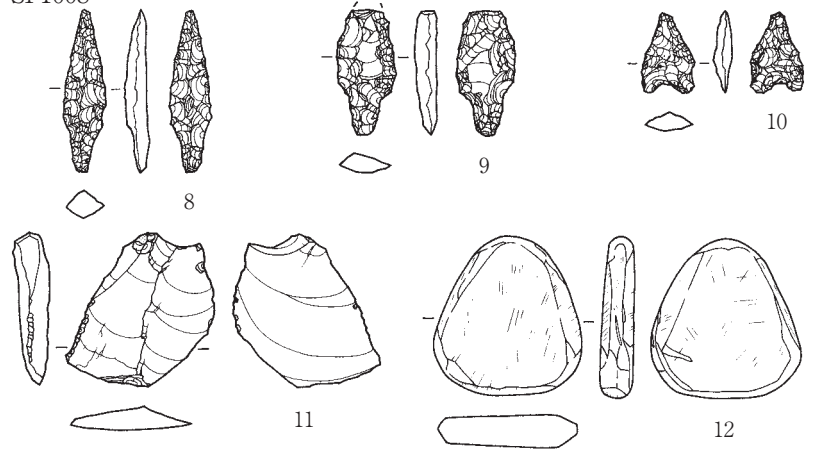
SI-1005



SI-1006



SI-1008



0 (S=1/2:1·4·5·8~12) 5cm

0 (S=1/3:2·7) 10cm

0 (S=1/6:3·6) 20cm

图 20 SI-1001 · 1005 · 1006 · 1008 出土石器

SI-1010

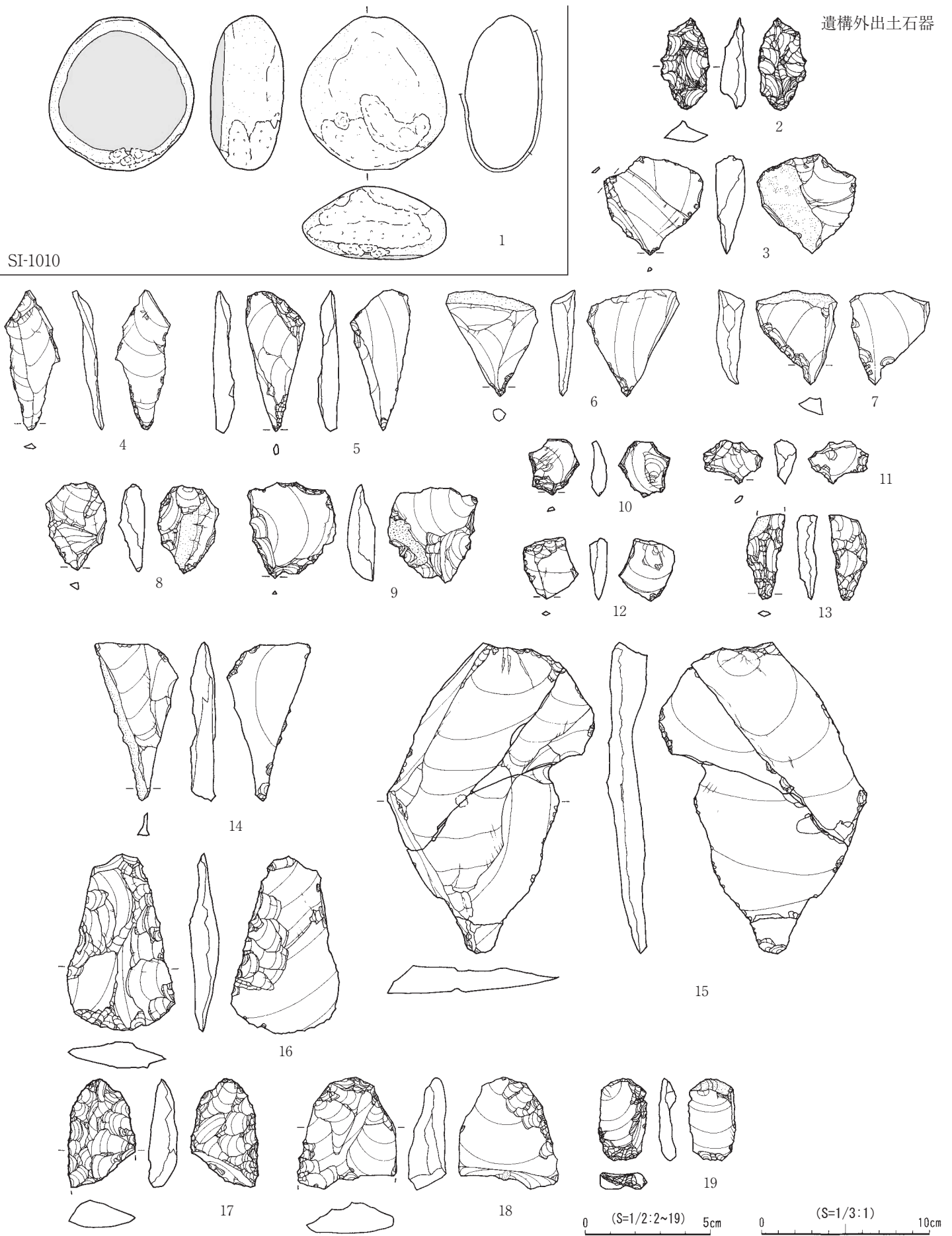


图 21 SI-1010、遺構外出土石器(1)

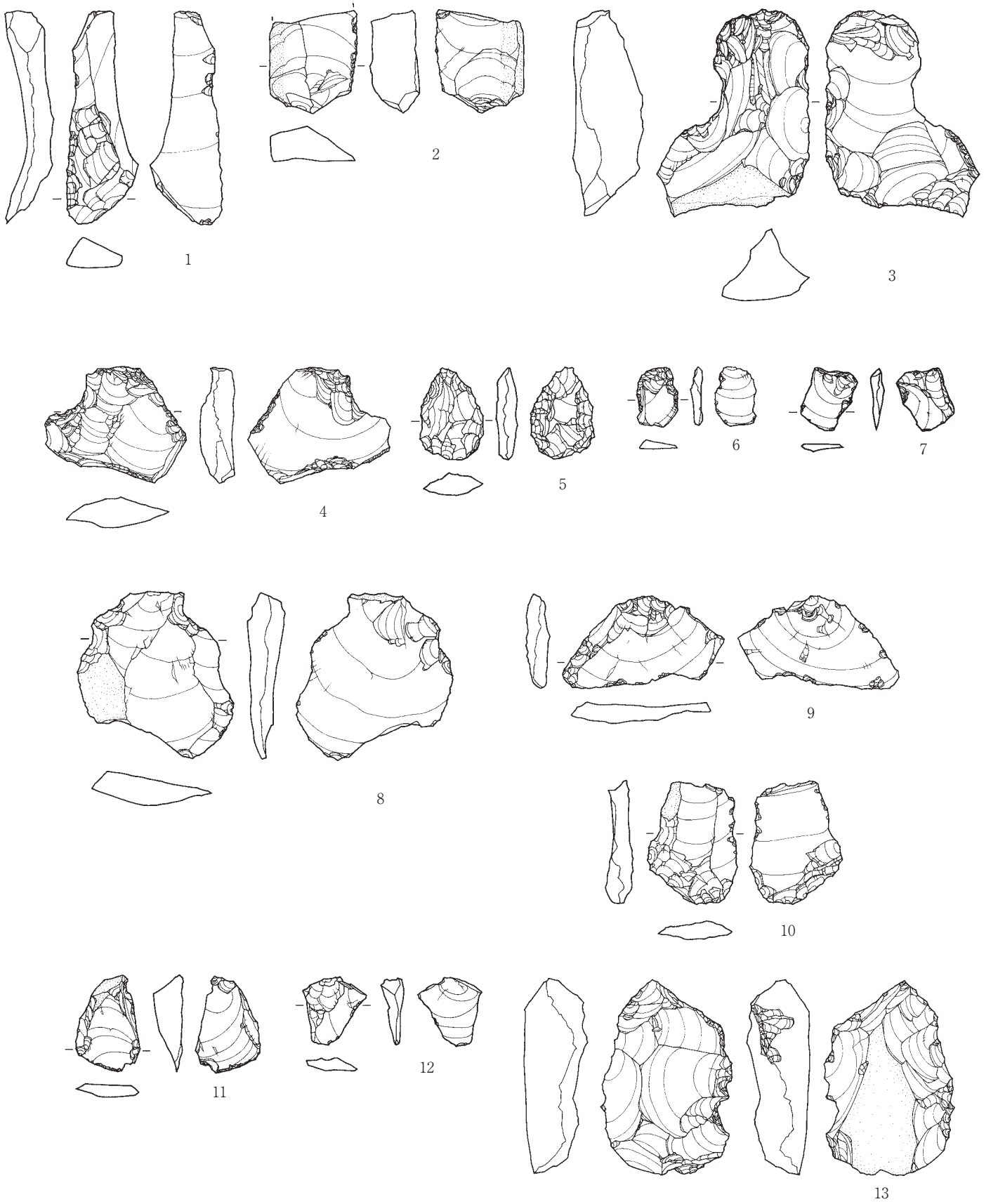


図 22 遺構外出土石器(2)

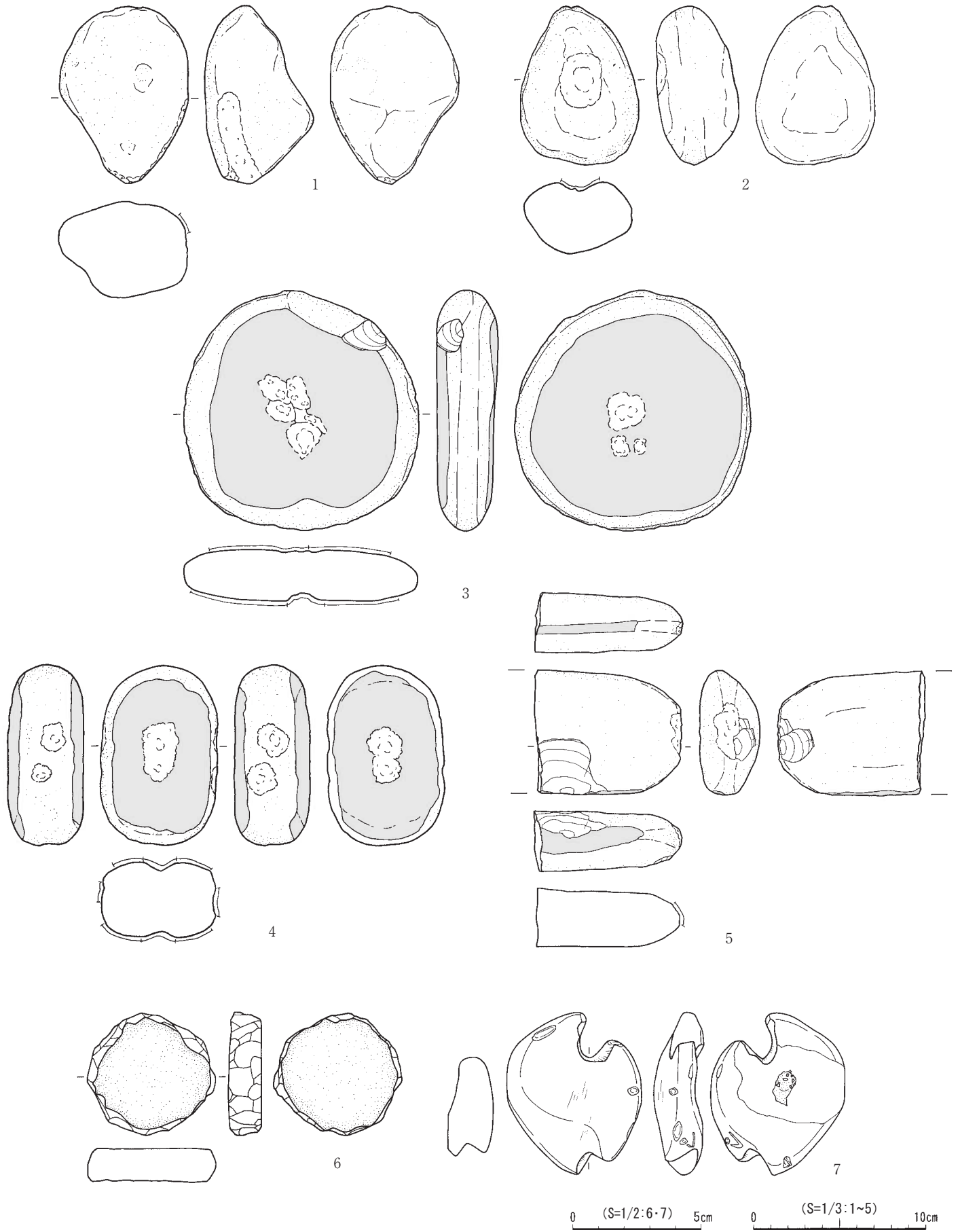


图 23 遺構外出土石器(3)

第5章 まとめ

平成22年度に実施した第4次調査の結果、検出した遺構は縄文時代中期中葉から後葉の竪穴住居跡(SI) 12棟、土坑(SK) 8基、土器埋設遺構(SR) 1基、焼土遺構(SN) 3基、Pit(SP) 8基である。

集落の空間構成に着目した場合、竪穴住居跡の分布が等質な状況とは異なる点に注意され、偏在して分布するあり方と空白域を形成するあり方が集落構造上の特徴として看取される(図5)。特に、盛土遺構東側にあたる傾斜面に重複関係を示して偏在する(SI-1006～1012)事象から、盛土遺構を核とした区域には竪穴住居跡が高い密度で展開する空間構成が窺え、傾斜面の等高線に平行して帯状に広がるシルト質層(第IV層)の分布に同調して、さらに北側に高い密度で分布することが推測される。一方、調査区南西側に東西方向に展開する一群(SI-1001・1002・1003・1005)が認められるが、重複関係と互いの隣接距離を指標に対比した場合、盛土遺構東側の一群との間に量的な不均衡が看取され、集落構造が備える性質の一側面を示唆するあり方として注意される。

これらの分布状況からは、特定の場所に特定の機能と性格を備えた施設を継続的に配置する空間構成が予測される。円筒式土器様式圏の集落が「直線的帯状平行構造」を特徴とし、円筒式土器様式終焉後に大木式系土器の受容と同時に集落構造が環状集落に変容したと主張する見解(桜田隆 1997)を評価しつつ、マクロな視点に基づいた空間構成に表現される規則性の抽出が今後の課題である。それと同時に、集落の空間構成のあり方について、ミクロな視点から遺構の質的な差異と量的な不均衡などの異質性を抽出し、通時的な変化を踏まえた動態の検討も不可欠である。

また、住居跡に反映された現象に着目した場合、更新のあり方、主軸方向のあり方等に二つの対立する異質性の存在が指摘される。竪穴住居跡に示される更新のあり方には異なる二者の存在が注意され、一つは、SI-1001に代表される、平面形態と規模が前段階の住居空間を意図的に踏襲する点を特徴とする更新のあり方で、他方は、SI-1009とSI-1010に代表される、前段階の住居空間を踏襲せずに、平面形態と規模、位置関係を違えて住居空間を更新する点を特徴とするあり方である。両者の背景には、居住の継続性および時間的な連続性、住居の構造と耐久性などの居住形態の差違が想定され、量的な優位性の変動と住居数の変動の相関性を見出す視点も重要となろう。

さらに、SI-1002・SI-1008・SI-1009を典型例に、住居の平面形を相似形に二分する主軸が想定され、SI-1002・SI-1004・SI-1005・SI-1007・SI-1008・SI-1009とSI-1001・SI-1006の主軸は相互に直交する関係にあり、主軸方位に対照性を示す二つの異なるあり方が示唆される。住居構造に表現された一定の規則と類型的構造を抽出するとともに、空間構成における両者の量的な異質性について通時的に見極める視角が必要である。

一方、水上(2)遺跡周辺では縄文時代の遺跡が近距離で隣接して分布する様相が窺われ、遺跡の発達と解消が周辺遺跡の動向と密接に関係することが予測される。これらの遺跡について成立から解体に至る変遷過程を分析する中で、発達期(顕在化)と中断期(潜在化)とを繰り返す「点滅的な循環」(谷口康浩 2005)の現象を捉える基礎的作業が必要不可欠であり、集合と分散の居住形態を視野に入れたセトルメント・パターンの変動や遺跡間の連鎖へと、より深化した理解が可能となろう。今後の調査の進展に伴い、この地域の文化的な一般性と特殊性の実態が明らかになることが期待される。

引用・参考文献

- 青森県教育委員会 2006 『川原平(1)・(4)遺跡 大川添(2)遺跡 水上遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書 第409集
- 青森県教育委員会 2006 『近野遺跡Ⅸ』青森県埋蔵文化財調査報告書 第418集
- 青森県教育委員会 2007 『潟野遺跡Ⅱ』青森県埋蔵文化財調査報告書 第431集
- 青森県教育委員会 2008 『水上遺跡Ⅱ』青森県埋蔵文化財調査報告書 第452集
- 青森県教育委員会 2009 『砂子瀬遺跡 水上(3)遺跡 水上(4)遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書 第466集
- 青森県教育委員会 2009 『中平遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書 第474集
- 青森県教育委員会 2010 『砂子瀬遺跡Ⅱ 大川添(2)遺跡Ⅱ』青森県埋蔵文化財調査報告書 第482集
- 青森県教育委員会 2011 『大川添(1)遺跡 水上(4)遺跡Ⅱ 芦沢(1)遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書 第500集
- 阿子島香 1984 「不定石器分析の視点」『文化』第47巻第3・4号
- アンドレ・ルロワ＝グーラン 1973 『身ぶりと言葉』(荒木亨訳) 新潮社
- 五十嵐彰 1998 「考古資料の接合－石器研究における母岩・個体問題－」『史学』第67巻第3・4号
- 石井 匠 2009 『縄文土器の文様構造－縄文人の神話的思考の解明に向けて－』小林達雄監修 未完成考古学叢書⑦ アム・プロモーション
- 犬木 努 1996 「埴輪製作における個体内・工程別分業と種類別分業－千葉県小見川町城山1号墳出土埴輪の再検討－」『埴輪研究会会誌』第2号
- 大西秀之 1998 「土器製作者の誕生－カンカナイ社会における技術の伝習と実践」『民族学研究』62-4
- 大西秀之 1998 「ルソン島北部・カンカナイ社会において形作られた土器製作者の身体」『物質文化』第64号
- 小笠原雅行 2008 「円筒上層式土器」『総覧 縄文土器』アム・プロモーション
- 後藤 明 1997 「実践的問題解決過程としての技術－東部インドネシア・ティドレ地方の土器製作－」『国立民族学博物館研究報告』22巻1号
- 小保内裕之 2004 「八戸市松ヶ崎遺跡出土の縄文時代中期後半の土器について」『第2回 東北・北海道の縄文時代中期後葉の諸問題』海峡土器編年研究会
- 小保内裕之 2008 「陸奥大木系土器(榎林式・最花式・大木10式併行土器)」『総覧 縄文土器』アム・プロモーション
- 小林達雄 1994 『縄文土器の研究』小学館
- 小林正史 1991 「縄文時代終末期における東北地方中・南部間の地域差」『北越考古学』第4号
- 小林正史 1993 「カリंगा土器の製作技術」『北陸古代土器研究』第3号
- 桜田 隆 1997 「秋田県池内遺跡」日本考古学協会 1997年度大会研究発表要旨
- 鈴木克彦 1976 「東北地方北部に於ける大木系土器文化の編年的考察」『北奥古代文化』第8号
- 鈴木克彦 1982 「円筒土器に後続する土器の編年」『考古風土記』第7号
- 鈴木克彦 2001 『北日本の縄文後期土器編年の研究』雄山閣
- 第52回埋蔵文化財研究集会実行委員会 2003 『埴輪－円筒埴輪製作技法の観察・認識・分析－』
- 竹岡俊樹 1989 『石器研究法』言叢社
- 谷口康浩 2005 『環状集落と縄文社会構造』学生社
- 福島真人(編) 1995 『身体の構築学－社会的学習過程としての身体技法－』ひつじ書房
- BOURDIEU,P (ブルデュ, P) [1980] 『実践感覚 1』今村仁司・港道隆/訳 みすず書房 (*Le Sens Pratique*. Les Editions de Minuit)
- BOURDIEU,P (ブルデュ, P) [1980] 『実践感覚 2』今村仁司・福井憲彦・塚原史・港道隆/訳 みすず書房 (*Le Sens Pratique*. Les Editions de Minuit)
- 三宅徹也 1974 「青森県における円筒下層式土器群の地域展開」『北奥古代文化』第6号
- 三宅徹也 1978 「円筒土器の概念とその崩壊」『青森県立郷土館調査研究年報』第3号
- 三宅徹也 1981 「円筒土器」『縄文文化の研究3』雄山閣
- 三宅徹也 1989 「円筒土器上層様式」小林達雄編『縄文土器大観1』小学館
- 村越 潔 1974 『円筒土器文化』雄山閣
- モース, M. (MAUSS, M.) [1968] 「身体技法」『社会学と人類学Ⅱ』有地亨・山口俊夫/訳 弘文堂 (*Sociologie et Anthropologie*. Presses Universitaires de France)
- 柳沢清一 1991 「「榎林式」から「最花式」(中の平Ⅲ式)へ」『古代』第91号
- 柳田俊雄・藤原妃敏 1981 「瀬戸内技法と石刃技法－調整技術のもつ意味－」『旧石器考古学』23
- 山内清男 1979 『日本先史土器の縄紋』先史考古学会
- 山中一朗 1994 『石器研究のダイナミズム』大阪文化研究会
- 山本典幸 2000 『縄文時代の地域生活史』ミュゼ
- 山本典幸 2002 「異形列文様・文様帯の同一個体内共存と社会的機能に関する試論－縄文時代中期初頭－」『國學院大學考古学資料紀要』18 國學院大學考古学資料館
- レイヴ, J.&E. ウェンガー 1995 『状況に埋め込まれた学習－正統的周辺参加－』第2版 佐伯胖/訳 産業図書 (*Situated Learning: Legitimate Peripheral Participation*. Cambridge University Press)

竪穴住居跡(SI)観察表

遺構番号	図番号	位置 (グリッド)	平面形	炉形態	主軸方向	堆積土 堆積状況	長軸	短軸	深さ	床面積 (㎡)	重複関係	備考
							(cm)	(cm)	(cm)			
SI-1001	図6	VIP-94・95 VIQ-95	円形	(新)地床炉 (古)石囲炉	N-57°-E	-	265	-	27	4.5	-	建替えによる更新 円筒上層 d・e 式期以降
SI-1002	図6	VIP-Q-96	(円形)	土器埋設炉	N-15°-W	-	(190)	-	-	3.3	-	榎林式期
SI-1003	図6	VIN-0-92・93	(多角形)	地床炉	不明	凹レンズ状	308	-	19	-	-	最花式期以降
SI-1004	図7	VIIJ-96・97	円形	土器埋設炉	N-5°-W	-	(275)	(254)	-	-	-	榎林式期
SI-1005	図7	VII L-92 VIIM-92・93	楕円形	(新)石囲炉 (古)土器埋設炉	N-33°-W	凹レンズ状	339	292	66	4.1	-	炉跡の更新 円筒上層 d・e 式期
SI-1006	図8	VIII G-103・104	(楕円形)	地床炉	N-56°-E	-	(364)	(295)	-	(9.3)	SI1007>SI1006<SK1009	円筒上層 d・e 式期 以降
SI-1007	図8	VIII F-G-104	楕円形	地床炉	N-3°-W	凹レンズ状	255	206	15	(4.2)	SI1006<SI1007>SN1002	円筒上層 e 式期以降
SI-1008	図8	VIII E-104・105	楕円形	土器埋設炉	N-25°-W	凹レンズ状	237	226	23	2.6	-	榎林式期
SI-1009	図9	VIII G-H-103	円形	地床炉	N-35°-W	-	(317)	(307)	(12)	7.3	SI1009>SI1010	最花式期以降
SI-1010	図9	VIII G-H-103・ 104	(楕円形)	不明	N-66°-W	-	350	-	15	-	SI1010<SI1009	榎林式期以降
SI-1011	図9	VIII A-B-106	(円形)	不明	不明	単層	(289)	-	9	-	-	榎林式期以降
SI-1012	図9	VIII H-102・103	(楕円形)	不明	不明	-	201	-	9	-	-	縄文時代中期中葉 以降

土坑(SK)観察表

遺構番号	図番号	位置 (グリッド)	平面形	断面形	主軸方向	堆積土 堆積状況	長径	短径	深さ	重複関係	備考
							(cm)	(cm)	(cm)		
SK-1001	図10	VIN-92	隅丸長方形	皿状	N-24°-W	単層	139	102	23	-	縄文時代中期以降
SK-1002	図10	VIP-93-94	楕円形	逆台形	N-62°-W	凹レンズ状	133	115	45	-	縄文時代中期以降
SK-1003	図10	VII O-P-100	楕円形	箱形	N-34°-E	単層	109	71	18	-	縄文時代中期以降
SK-1004	図10	VIM-102	楕円形	皿状	N-86°-W	凹レンズ状	70	57	22	-	
SK-1005	図10	VII T-106・107	円形	皿状	不明	凹レンズ状	56	-	16	-	10世紀中頃以前 または近世以降
SK-1007	図10	VIII C-D-105 VIID-104	長楕円形	逆台形	N-81°-E	単層	137	70	11	-	最花式期以降
SK-1008	図10	VIII E-104	円形	皿状	不明	単層	79	-	10	-	縄文時代中期以降
SK-1009	図10	VIII G-103	隅丸長方形	皿状	N-35°-W	凹レンズ状	171	116	10	SK1009>SI1006	円筒上層 d・e 式期以降

土器埋設遺構(SR)観察表

遺構番号	図番号	位置 (グリッド)	平面形	埋設状態	主軸方向	堆積土 堆積状況	長径	短径	深さ	重複関係	備考
							(cm)	(cm)	(cm)		
SR-1002	図9	VIN-95-96	不整な 楕円形	正位正立	N-29°-E	凹レンズ状	(69)	62	17	-	最花式期

焼土遺構(SN)観察表

遺構番号	図番号	位置 (グリッド)	平面形	主軸方向	長径	短径	深さ	重複関係	備考
					(cm)	(cm)	(cm)		
SN-1001	図10	VIII G-102	楕円形	N-74°-W	(103)	(56)	(8)	-	赤色変化の度合いが小さい 縄文時代中期中葉以降
SN-1002	図10	VIII F-G-104	円形	不明	(44)	-	(6)	SN1002<SI1007	縄文時代中期中葉以降
SN-1003	図10	VIII F-104	円形	不明	(39)	-	(8)	-	縄文時代中期中葉以降

Pit(SP)観察表

遺構番号	図番号	位置 (グリッド)	平面形	断面形	主軸方向	堆積土 堆積状況	長径	短径	深さ	重複関係	備考
							(cm)	(cm)	(cm)		
SP-1003	図11	VIP-99	円形	箱形	不明	単層	29	-	9	-	
SP-1004	図11	VIP-99	円形	箱形	不明	単層	25	-	12	-	
SP-1005	図11	VIP-99	楕円形	逆台形	N-68°-E	単層	50	35	21	-	
SP-1006	図11	VIP-99	円形	逆台形	不明	単層	31	-	20	-	
SP-1007	図11	VII O-99・100	円形	U字形	不明	柱痕が明瞭	33	-	31	-	
SP-1008	図11	VII Q-98	楕円形	箱形	N-27°-W	単層	39	39	16	-	
SP-1010	図11	VIP-101	楕円形	箱形	N-10°-E	単層	32	36	24	-	
SP-1011	図11	VIP-101	円形	箱形	不明	単層	31	-	15	-	

土器観察表

図版番号	出土位置	層位	器種	部位	文様等の属性	型式/時期	胎土	備考
図12-1	SI-1001	3層	深鉢形	口縁部	山形突起(縦・横位隆帯、突起状隆帯) 口唇部外面肥厚(LR横位、縦位並隆帯) 弧状隆帯 縦位隆帯(指頭圧痕) 地文LR横位施文	円筒上層d・e式	Ⅲ	図12-3と同一個体
図12-2	SI-1001	3層	深鉢形	口縁部	口唇部外面肥厚(LR回転施文) LR横位施文	円筒上層d・e式	Ⅱ	
図12-3	SI-1001	3層	深鉢形	胴部	縦位隆帯(指頭圧痕) 地文LR横位施文	円筒上層d・e式	Ⅲ	図12-1と同一個体
図12-4	SI-1001	3層	深鉢形	胴～底部	0段多条LR横位施文(開端他条結節)	円筒上層d式	Ⅱ	器高(20.1)cm、口径(-)cm、底径9.2cm
図12-5	SI-1001	6層上層	深鉢形	口縁部	口唇部外面肥厚(RL側面圧痕) RL縦位施文	円筒上層d・e式	Ⅳ	
図12-6	SI-1001	6層上層	深鉢形	突起	二山状突起 三角形隆帯	円筒上層d・e式	Ⅳ	
図12-7	SI-1001 第2号炉跡	3層	深鉢形	口縁～胴部	口唇部外面肥厚(LR側面圧痕) 縦位区画沈線 地文LR横位施文	円筒上層e式	Ⅲ	図12-8と同一個体
図12-8	SI-1001 第2号炉跡	3層	深鉢形	突起	横位隆帯 口唇部外面肥厚(LR側面圧痕) 縦位区画沈線(2条) 地文LR横位施文	円筒上層e式	Ⅲ	図12-7と同一個体
図12-9	SI-1001 第2号炉跡	3層	深鉢形	口縁部	胸骨文(隆帯) 地文LR横位施文	円筒上層d式	Ⅱ	
図12-10	SI-1001 第2号炉跡	3層	深鉢形	胴部	縦位隆帯(指頭圧痕) 胸骨文(隆帯) 地文LR横位施文	円筒上層d式	Ⅱ	
図12-11	SI-1001 第2号炉跡	3層	深鉢形	突起	無文	円筒上層d式	Ⅱ	
図12-12	SI-1001 第2号炉跡	3層	深鉢形	口縁部	突起欠損 口唇部外面肥厚(刻目) 縦位隆帯 突起状隆帯 RL斜位施文	円筒上層d・e式	Ⅳ	
図12-13	SI-1002	床面直上	深鉢形	口縁部	山形口縁 口唇部外面肥厚 LR横位施文	複林式	Ⅳ	
図12-14	SI-1002	床面直上	深鉢形	口縁部	山形口縁 口唇部外面肥厚	複林式	Ⅳ	
図12-15	SI-1002 土器埋設炉	2・3層	深鉢形	胴部	渦巻曲線文 地文RL横位施文	複林式	Ⅲ	図12-16・17と同一個体
図12-16	SI-1002 土器埋設炉	2・3層	深鉢形	胴部	LR横位施文	複林式	Ⅲ	図12-15・17と同一個体
図12-17	SI-1002 土器埋設炉	確認面	深鉢形	胴部	無文	複林式	Ⅲ	図12-15・16と同一個体
図12-18	SI-1003	堆積土	深鉢形	口縁部	口唇部外面肥厚 横位隆帯 地文LR横位施文	円筒上層d式	Ⅰ	
図12-19	SI-1003	堆積土	深鉢形	胴部	横位隆帯(胸骨文) 地文RL横位施文	円筒上層d式	Ⅲ	
図12-20	SI-1003 付属施設	4層	深鉢形	胴部	胸骨文(隆帯) 口唇部外面肥厚(LR横位) 地文LR横位施文	円筒上層d式	Ⅲ	
図12-21	SI-1003	堆積土	深鉢形	胴部	胸骨文(隆帯) 縦位隆帯 地文RL横位施文	円筒上層d式	Ⅱ	
図12-22	SI-1003	堆積土	深鉢形	口縁部	口唇部外面肥厚(RL回転施文) RL横位施文	円筒上層d・e式	Ⅰ	
図12-23	SI-1003	堆積土	深鉢形	口縁部	液状口縁 LR横位施文	最花式	Ⅲ	
図13-1	SI-1003 付属施設	4層	深鉢形	口縁～底部	三山突起(逆三角形隆帯) 口唇部外面肥厚(刻目) 縦位隆帯 胸骨文(隆帯) 地文結束線一種(RL-LR)	円筒上層e式	Ⅰ	器高23.9cm、口径(20.1)cm、底径8.5cm
図13-2	SI-1003 付属施設	4層	深鉢形	口縁～胴部	口唇部外面肥厚(RL横位) 縦位隆帯(2条指頭圧痕) ボタン状隆帯(円形押圧) 地文RL横位施文	円筒上層d式	Ⅱ	器高26.0cm、口径(18.6)cm、底径8.5cm
図13-3	SI-1003 付属施設	4層	深鉢形	底部	LR横位施文	円筒上層e式	Ⅲ	底面網代痕 器高(7.5)cm、口径(-)cm、底径8.0cm
図13-4	SI-1004	1層	深鉢形	突起	二山状突起 横位・弧状隆帯 口唇部外面肥厚(LR回転施文)	円筒上層d・e式	Ⅲ	
図13-5	SI-1004	1層	深鉢形	突起	二山状突起 横位隆帯 口唇部外面肥厚(LR回転施文)	円筒上層d・e式	Ⅲ	
図13-6	SI-1004	床面	深鉢形	突起	菱形隆帯 口唇部外面肥厚 RL横位施文	円筒上層d・e式	Ⅲ	
図13-7	SI-1004	1層	深鉢形	口縁部	口唇部外面肥厚(LR回転施文) LR横位施文	円筒上層d・e式	Ⅲ	
図13-8	SI-1004	堆積土	深鉢形	突起	横位・弧状隆帯 口唇部外面肥厚(LR回転施文・縦位隆帯) 胸骨文 地文LR横位施文	円筒上層e式	Ⅲ	
図13-9	SI-1004	1層	深鉢形	胴部	縦位隆帯(円形刺突) 平行沈線(胸骨文)	円筒上層e式	Ⅳ	
図13-10	SI-1004	1層	深鉢形	胴部	縦位隆帯(指頭圧痕) 胸骨文 縦位弧状文	円筒上層e式	Ⅰ	図13-11と同一個体
図13-11	SI-1004	1層	深鉢形	胴部	胸骨文 縦位弧状文	円筒上層e式	Ⅰ	図13-10と同一個体
図13-12	SI-1004	1層	深鉢形	胴部	重層弧線文	複林式	Ⅳ	
図13-13	SI-1004	床面	深鉢形	口縁～胴部	水平口縁 口唇部外面肥厚(LR横位施文) LR(横位・斜位・縦位施文)	円筒上層d・e式	Ⅱ	器高(24.2)cm、口径(17.4)cm、底径(-)cm
図13-14	SI-1004 土器埋設炉	4・5層	深鉢形	胴部	LR横位施文	円筒上層d・e式	Ⅱ	器高(12.9)cm、口径(-)cm、底径(-)cm
図13-15	SI-1005	堆積土上～中層	深鉢形	口縁部	口唇部外面肥厚(RL横位施文) 縦位隆帯(指頭圧痕) 胸骨文(隆帯) 地文RL横位施文	円筒上層d式	Ⅱ	図13-16と同一個体
図13-16	SI-1005	堆積土上～中層	深鉢形	胴部	縦位隆帯(指頭圧痕) 胸骨文(隆帯) 地文RL横位施文	円筒上層d式	Ⅱ	図13-15と同一個体
図14-1	SI-1005	堆積土	深鉢形	口縁部	口唇部外面肥厚(RL横位) 縦位隆帯 胸骨文(隆帯) 地文RL横位施文	円筒上層d式	Ⅲ	
図14-2	SI-1005	堆積土	深鉢形	口縁部	口唇部外面肥厚(刻目) 胸骨文(隆帯) 地文RL横位施文	円筒上層d式	Ⅲ	補修孔
図14-3	SI-1005	堆積土上～中層	深鉢形	口縁部	突起(弧状隆帯) 縦位区画沈線 平行沈線(胸骨文) 地文RL横位施文	円筒上層e式	Ⅳ	
図14-4	SI-1005	堆積土上～中層	深鉢形	口縁部	口唇部外面肥厚(鋸歯状隆帯) RL横位施文	円筒上層d・e式	Ⅲ	
図14-5	SI-1005	堆積土上～中層	深鉢形	口縁～胴部	突起(横位・弧状隆帯) 口唇部外面肥厚(LR横位施文) 地文LR横位施文	円筒上層d・e式	Ⅲ	
図14-6	SI-1005	堆積土上～中層	深鉢形	口縁部	口唇部外面肥厚(RL横位) RL横位施文	円筒上層d・e式	Ⅲ	補修孔
図14-7	SI-1005	床面直下	深鉢形	胴部	附加条二種 L ₁ +L ₂ 横位施文	円筒上層d・e式	Ⅰ	
図14-8a・b	SI-1005	床面直上	深鉢形	口縁～底部	口唇部外面肥厚(RL横位) 縦位隆帯(RL横位) 胸骨文(RL横位) 地文RL横位施文	円筒上層d式	Ⅱ	底面網代痕 器高(25.1)cm、口径(-)cm、底径9.4cm
図14-9	SI-1005	床面直上 堆積土上～中層	深鉢形	口縁～底部	二山状突起 八巻状隆帯・菱形隆帯(RL側面圧痕) 口唇部外面肥厚(RL横位) 縦位隆帯(指頭状圧痕) 胸骨文(隆帯) 地文LR横位施文	円筒上層d式	Ⅰ	器高30.1cm、口径(23.0)cm、底径8.8cm
図15-1	SI-1005	床面直上	深鉢形	口縁～底部	突起(逆三角形隆帯・三角柱状突起) 口唇部外面肥厚(LR横位) 弧状隆帯 胸骨文(隆帯) ボタン状突起 地文LR横位・斜位施文	円筒上層d式	Ⅲ	器高17.2cm、口径(17.5)cm、底径7.8cm
図15-2	SI-1005	堆積土上～中層	深鉢形	口縁～胴部	水平口縁 口唇部外面肥厚(附加条) 縦位隆帯 胸骨文(隆帯) 地文附加条 R ₁ +R ₂	円筒上層d式	Ⅰ	器高(13.1)cm、口径(20.3)cm、底径(-)cm
図15-3	SI-1003 SI-1005	堆積土	深鉢形	口縁～胴部	山形突起(三角形隆帯) 口唇部外面肥厚(鋸歯状隆帯) 縦位蛇行隆帯 胸骨文(隆帯) 地文RL横位施文	円筒上層d式	Ⅰ	器高(21.1)cm、口径(18.7)cm、底径(-)cm
図15-4	SI-1005	堆積土上～中層	深鉢形	口縁～底部	三山状突起(弧状・鋸歯状隆帯) 口唇部外面肥厚(LR横位) 地文LR横位施文	円筒上層d・e式	Ⅲ	補修孔 器高25.6cm、口径23.3cm、底径8.6cm
図15-5	SI-1005	床面直上 堆積土上～中層	深鉢形	口縁～底部	山形突起(八巻状隆帯) 口唇部外面肥厚(LR側面圧痕) ボタン状隆帯(円形押圧) 弧状隆帯 LR横位施文	円筒上層d・e式	Ⅲ	器高28.3cm、口径(26.3)cm、底径8.0cm
図16-1	SI-1005	床面直上 堆積土上～中層	深鉢形	口縁～底部	山形突起(斜行・横位隆帯) 口唇部外面肥厚(RL横位施文) 弧状隆帯(二重) 縦位隆帯(指頭圧痕) 地文RL横位施文	円筒上層d・e式	Ⅲ	器高22.7cm、口径(19.4)cm、底径7.9cm
図16-2	SI-1005	床面直上	深鉢形	口縁～底部	二山状突起 山形突起(弧状隆帯) 口唇部外面肥厚(刻目) LR横位施文	円筒上層d・e式	Ⅱ	器高(14.2)cm、口径(12.6)cm、底径5.4cm
図16-3	SI-1005	床面直上 堆積土上～中層	深鉢形	口縁～底部	山形突起(三角形隆帯) 三角錐状突起 口唇部外面肥厚(RL横位施文) RL横位施文	円筒上層d・e式	Ⅱ	器高19.4cm、口径(16.6)cm、底径7.7cm
図16-4	SI-1005	床面直上	深鉢形	口縁～底部	口唇部外面肥厚(RL横位施文) RL横位施文	円筒上層d・e式	Ⅱ	底面網代痕 器高29.2cm、口径(20.5)cm、底径10.2cm
図16-5	SI-1005	堆積土上～中層	深鉢形	胴～底部	LR横位施文	円筒上層d・e式	Ⅲ	底面網代痕 器高(10.0)cm、口径(-)cm、底径8.3cm
図16-6	SI-1005	堆積土上～中層	深鉢形	胴～底部	LR横位施文	円筒上層d・e式	Ⅲ	底面網代痕 器高(7.0)cm、口径(-)cm、底径8.7cm
図16-7	SI-1005 土器埋設炉	17・18層	深鉢形	胴～底部	附加条二種 L ₁ +L ₂	円筒上層d・e式	Ⅲ	底面網代痕 器高(9.9)cm、口径(-)cm、底径8.7cm

土器観察表

図版番号	出土位置	層位	器種	部位	文様等の属性	型式/時期	胎土	備考
図16-8	SI-1006	2層	深鉢形	胴部	LR 横位施文	円筒上層 d・e 式	Ⅲ	
図16-9	SI-1006	2層	深鉢形	胴部	RL 横位施文	円筒上層 d・e 式	Ⅰ	
図16-10	SI-1007	堆積土	深鉢形	胴部	胸骨文の変形 地文 LR 横位施文	円筒上層 e 式	Ⅲ	図16-1 と同一個体
図16-11	SI-1007	堆積土	深鉢形	底部	LR 横位施文	円筒上層 e 式	Ⅲ	図16-10 と同一個体
図17-1	SI-1008	堆積土	深鉢形	胴部	単軸絡条体(R)	最花式	Ⅲ	図17-16、17 と同一個体
図17-2	SI-1008	堆積土	深鉢形	口縁部	口唇部外面肥厚(無文帯) LR 横位・縦位施文	複林式	Ⅳ	
図17-3	SI-1008	堆積土	深鉢形	口縁部	口唇部外面肥厚 無文	複林式	Ⅳ	
図17-4	SI-1008	堆積土	深鉢形	口縁部	口唇部外面肥厚 RL 横位施文	複林式	Ⅲ	図17-5 と同一個体
図17-5	SI-1008	堆積土	深鉢形	胴部	RL 縦位・斜位施文	複林式	Ⅲ	図17-4 と同一個体
図17-6	SI-1008	堆積土	深鉢形	頸部	重層弧線文 地文 LR 斜位施文	複林式	Ⅳ	
図17-7	SI-1008	堆積土	深鉢形	胴部	渦巻曲線文 地文単軸絡条体第1類(R)	複林式	Ⅳ	
図17-8	SI-1008 土器埋設炉	9層	深鉢形	胴部～底部	LR 斜位施文	複林式	Ⅲ	底部瘤状圧痕器高(17.2)cm、口径(-)cm、底径9.5cm
図17-9	SI-1009 Pit1	最上層	深鉢形	口縁部	口唇部外面肥厚 口頸部無文帯 刺突列 蕨状懸垂文 地文 RL 横位施文	最花式	Ⅳ	
図17-10	SI-1009 Pit1	最上層	深鉢形	口縁部	口唇部外面肥厚(無文帯) 節の粗い LR 縦・横位施文	最花式	Ⅰ	
図17-11	SI-1010	床面	深鉢形	胴部	重層弧線文 地文 RL 横位施文?	複林式	Ⅳ	著しい摩滅
図17-12	SI-1011	堆積土	深鉢形	胴部	無文	複林式	Ⅲ	
図17-13	SI-1011	堆積土	深鉢形	底部	RL 横位施文	複林式	Ⅳ	
図17-14	SR-1002	2・3層	深鉢形	口縁～底部	水平口縁 口頸部(LR 斜位施文) 胴部(LR 横位施文)	最花式	Ⅰ	底部網状痕器高25.3cm、口径(22.0)cm、底径8.7cm
図17-15	SK-1007	堆積土	深鉢形	口縁部	山形口縁 口唇部外面肥厚(隆帯による凹線文と同質の演出効果・縦位隆帯) 波状文 胸骨文 長柄円形状文 地文 RL 横位施文	複林式	Ⅳ	図18-1 と同一個体
図17-16	SK-1007	堆積土	深鉢形	口縁部	単軸絡条体第1類(R)	最花式	Ⅲ	図17-1、17 と同一個体
図17-17	SK-1007	堆積土	深鉢形	口縁部	単軸絡条体第1類(R)	最花式	Ⅲ	図17-1、16 と同一個体
図18-1	SK-1007	堆積土	深鉢形	口縁～底部	山形口縁 口唇部外面肥厚(隆帯による凹線文と同質の演出効果・縦位隆帯) 波状文 弧状文 長柄円形状文 地文 RL 横位施文	複林式	Ⅳ	顕著な摩滅器高35.4cm、口径(27.3)cm、底径(9.2)cm
図18-2	表採	I層	深鉢形	頸部	結束第一種(LR・RL) 多軸絡条体(R) 頸部無文帯	円筒下層 d ₂ 式	Ⅲ	
図18-3	表採	I層	深鉢形	突起	口唇部 R 側面圧痕 LR・RL 側面圧痕 弧状隆帯(馬蹄形状押圧 R・自条自巻 B 種側面押圧 L)	円筒上層 b 式	Ⅲ	
図18-4	表採	I層	深鉢形	口縁部	馬蹄形刺突文 弧状隆帯(L 側面圧痕)	円筒上層 c 式	Ⅲ	
図18-5	VME-103	Ⅱ・Ⅲ層	深鉢形	口縁部	突起(横位隆帯) 口唇部外面肥厚(RL 横位) 胸骨文(隆帯) 縦位隆帯 地文 RL 横位施文	円筒上層 d 式	Ⅰ	
図18-6	VJ-98	Ⅱ層下部	深鉢形	口縁～底部	水平口縁 口唇部外面肥厚(RL 横位施文・鋸歯状隆帯) ボタン状突起 RL 横位施文	円筒上層 d 式	Ⅲ	補修孔器高21.8cm、口径(22.3)cm、底径(7.2)cm
図18-7	VJ-98	Ⅱ層下部	深鉢形	口縁～底部	水平口縁 口唇部外面肥厚(RL 横位施文) RL 横位施文	円筒上層 d・e 式	Ⅱ	器高18.9cm、口径(18.2)cm、底径(6.4)cm
図19-1	VIG-102	風倒木	深鉢形	口縁部	口唇部外面肥厚(RL 横位) RL 横位施文	円筒上層 d・e 式	Ⅱ	
図19-2	VIK-103	Ⅱ層	深鉢形	口縁部	口唇部直下無文帯 横位隆帯による凹線文と同質の演出効果 RL 斜位施文	複林式	Ⅲ	
図19-3	表採	I層	深鉢形	口縁部	口唇部直下無文帯 横位隆帯による凹線文と同質の演出効果 LR 横位施文	複林式	Ⅲ	
図19-4	VIU-104	Ⅱ層	深鉢形	口縁部	口唇部外面肥厚 縦位・横位隆帯 重層弧線文 地文 RL 縦位施文	複林式	Ⅲ	
図19-5	VIG-102	風倒木	深鉢形	口縁部	口唇部外面肥厚 無文	複林式	Ⅰ	
図19-6	表採	I層	深鉢形	口縁部	口唇部外面肥厚 凹線文 LR 斜位施文	複林式	Ⅳ	
図19-7	VIH-103	Ⅲ層	深鉢形	頸部	横位区画沈線 重層弧線文 地文 RL 横位施文	複林式	Ⅳ	
図19-8	VIF-103	風倒木	深鉢形	頸部	横位区画沈線 刺突列 弧線文 地文 LR 横位施文	複林式	Ⅲ	
図19-9	VIF-103	風倒木	深鉢形	胴部	渦巻懸垂文 円形文 地文 LR 斜位施文	複林式	Ⅳ	
図19-10	VIH-103	Ⅲ層	深鉢形	胴部	渦巻懸垂文 円形文 地文 LR 縦位施文	複林式	Ⅳ	
図19-11	VIG-102	風倒木	深鉢形	頸部	刺突列 横位区画沈線	複林式	Ⅲ	図19-12 と同一個体
図19-12	VIG-102	風倒木	深鉢形	胴部	渦巻懸垂文 地文単軸絡条体第1種(R)	複林式	Ⅲ	図19-11 と同一個体
図19-13	VIF-103	風倒木	深鉢形	口縁部	横位区画沈線 逆「U」字状懸垂文 地文 RL 斜位施文	最花式	Ⅲ	
図19-14	VJ-103	Ⅱ層	深鉢形	口縁部	口唇部直下無文帯 横位区画沈線 LR 横位施文	最花式	Ⅲ	
図19-15	VIG-102	風倒木	深鉢形	口縁部	口唇部直下無文帯 LR 斜位施文	最花式	Ⅳ	
図19-16	表採	I層	深鉢形	口縁部	無文	最花式	Ⅳ	
図19-17	表採	I層	深鉢形	胴部	横位区画沈線 逆「U」字状懸垂文の変形 地文 LR 縦位施文	最花式	Ⅲ	
図19-18	VIP-100	Ⅱ層	深鉢形	胴部	逆「U」字状懸垂文 条痕文(縦位)	最花式	Ⅳ	
図19-19	VII-97	Ⅱ層	深鉢形	胴部	逆「U」字状懸垂文 条痕文(縦位)	最花式	Ⅲ	
図19-20	表採	I層	深鉢形	口縁部	LR 縦位施文	大木10式併行	Ⅳ	
図19-21	VII-97	Ⅱ層	深鉢形	口縁部	LR 縦位施文	大木10式併行	Ⅳ	
図19-22	VJ-103	Ⅱ層	深鉢形	胴部	「J」字状 波頭文 RL 充填施文	大木10式併行	Ⅳ	
図19-23	表採	I層	深鉢形	胴部	「J」字状 LR 充填施文	大木10式併行	Ⅳ	
図19-24	VII-97	Ⅱ層	深鉢形	口縁部	口唇部 RL 回転施文 RL 横位施文	十腰内2式	Ⅳ	
図19-25	VIM-99	Ⅱ層	甕～壺	胴部	横位区画沈線 LR 横位施文	弥生中期 (Ⅰ)		

胎土の種類

- I類：粘土基質の量比が高く、混和される鉱物組成や岩片組成の割合が低い特徴がある。また、海綿骨針の比率が高い例もある。
- Ⅱ類：白色粒子の組成比率が極めて高い点に特徴があり、白色粒子は凝灰岩に由来する岩片の可能性が高く、粒径が0.5mmを超える粗粒子の粒径組成が高い。また、粗粒砂や角閃石等の鉱物片も組成に含まれる。
- Ⅲ類：白色粒子の組成比率はⅡ類よりも低く、粒径も微粒の量比が高い。粗粒砂や角閃石等の鉱物片も組成に含まれる。
- Ⅳ類：角閃石、石英、長石等の鉱物片と粗粒砂の組成比率が高い点に特徴がある。

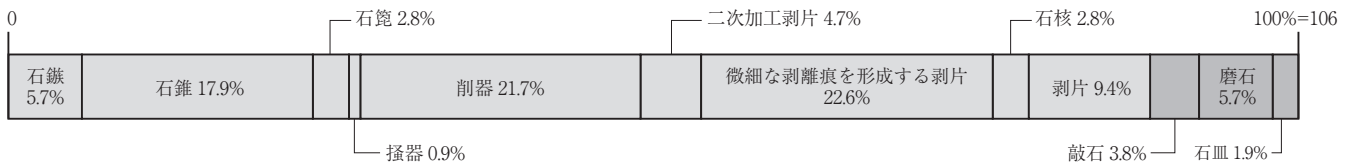
Ⅳ類									
Ⅲ類									
Ⅱ類									
Ⅰ類									
	円筒下層 d ₂ 式	円筒上層 b 式	円筒上層 c 式	円筒上層 d 式	円筒上層 d・e 式	円筒上層 e 式	複林式	最花式	大木10式併行土器

胎土類型の型式別出現傾向

(型式別のサンプル数には差異がある。)

石器観察表

図版番号	出土位置	層位	器種	石材	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	備考
図20-1	SI-1001	3層	石錐	珪質頁岩	(6.5)	4.6	1.95	38.7	錐部折損 腹面側末端に大きな二次加工 左側縁に微細な剥離痕を形成
図20-2	SI-1001	3層	磨石	凝灰岩	11.6	6.3	5.0	419.5	楕円形の正面及び右側面の後に磨痕を形成
図20-3	SI-1001 第2号炉跡	6層	石皿	デイサイト	37.2	46.9	3.5	7000.0	無縁石皿 素材の備えた平坦面を機能部位に選択
図20-4	SI-1005	堆積土上～中層	石鏃	珪質頁岩	4.9	1.7	0.5	2.7	尖基有茎鏃 衝撃剥離により先端部欠損 先端部を再生 基部及び基部にアスファルト付着
図20-5	SI-1005	堆積土上～中層	石鏃	珪質頁岩	2.95	1.85	0.4	1.7	凹基無茎鏃 表裏にアスファルトが付着し、矢柄への装着方法が想定可能な例
図20-6	SI-1005	堆積土下層	石皿	凝灰岩	32.1	29.8	6.8	8000.0	無縁石皿 素材の備えた平坦面を機能部位に選択
図20-7	SI-1006	貼床	磨石	凝灰岩	10.1	8.1	2.5	269.9	扁平な楕円形 正面に広い磨痕
図20-8	SI-1008	堆積土	石鏃	珪質頁岩	4.3	1.1	0.7	4.5	尖基有茎鏃 棒状の形態で基部と基部の境界が不明瞭
図20-9	SI-1008	堆積土	石鏃	珪質頁岩	(3.3)	1.6	0.6	3.2	尖基有茎鏃 先端部欠損
図20-10	SI-1008	堆積土	石鏃	珪質頁岩	2.15	1.4	0.5	1.8	凹基無茎鏃 五角形を呈する アスファルト付着
図20-11	SI-1008	堆積土	石製品	珪質頁岩	4.1	3.9	1.05	11.4	微細剥離痕を形成する剥片 左側縁に連続する微細な剥離痕を形成
図20-12	SI-1008	堆積土	石製品	凝灰質泥岩	4.25	3.95	0.85	21.5	三角形に研磨整形 表裏両面に顕著な擦痕
図21-1	SI-1010	床面	磨石	凝灰岩	9.2	8.8	4.4	427.9	平坦な裏面に磨痕 下端の後に敲打痕
図版15	SK-1007	堆積土	敲石	砂岩	10.5	7.3	3.6	378.4	楕円形の片面に敲打による凹部と磨痕を形成
図21-2	VII-97	II層	石鏃	珪質頁岩	3.65	1.9	1.0	5.6	未成品 背腹両面から二次加工を施し左側縁が鋸歯状を呈する
図21-3	表採	I層	石錐	珪質頁岩	3.95	4.0	1.15	13.3	二次加工が錐部の作出に特定され、複数の錐部を形成
図21-4	VII-99	II層	石錐	珪質頁岩	5.6	2.2	1.2	3.5	二次加工が錐部の作出に特定され、素材剥片の末端に錐部を作出
図21-5	表採	I層	石錐	珪質頁岩	5.65	2.35	0.85	9.6	折損する素材剥片の一端に錐部を作出し、基部側を二次加工により成形する
図21-6	VII-G-102	風倒木	石錐	珪質頁岩	4.3	3.7	1.0	12.1	二次加工が錐部の作出に特定され、折損する素材剥片の一端に錐部を作出
図21-7	表採	I層	石錐	珪質頁岩	3.8	3.2	1.15	11.1	二次加工が錐部の作出に特定され、折損する素材剥片の一端に錐部を作出
図21-8	表採	I層	石錐	珪質頁岩	3.5	2.45	1.05	7.8	両面加工により左右対称の形態を呈する
図21-9	VII-N-104	II層	石錐	珪質頁岩	3.85	3.55	1.1	14.3	素材剥片の一端に錐部を作出し、基部側に二次加工を施す
図21-10	表採	I層	石錐	珪質頁岩	2.2	2.0	0.65	2.7	小形の度合を特徴とし、複数の錐部を併設する
図21-11	表採	I層	石錐	珪質頁岩	1.7	2.3	0.9	3.1	小形の度合を特徴とし、複数の錐部を併設する
図21-12	表採	I層	石錐	珪質頁岩	2.45	2.15	0.7	3.7	小形の度合を特徴とし、素材剥片の末端に錐部を作出
図21-13	VII-D-106	III層	石錐	珪質頁岩	3.4	1.5	0.8	3.6	背腹両面から二次加工を施し棒状の形態を作出
図21-14	VII-P-98	II層	石錐	珪質頁岩	6.35	3.35	1.0	13.6	折損する削器の中間部の端部に錐部を作出
図21-15	VII-P-98	II層	削器	珪質頁岩	12.45	8.3	1.6	106.4	節理により折損 右側縁に直線的な刃部を作出
図21-16	VII-N-101	II層	石筥	珪質頁岩	7.1	4.4	1.2	26.3	二次加工により左右対称の形態を呈し、弧状の刃部を作出
図21-17	VII-G-102	風倒木	石筥	珪質頁岩	(4.4)	(2.7)	1.2	13.6	両面加工により左右対称の形態を呈する石筥の基部
図21-18	表採	I層	石筥	珪質頁岩	(4.5)	(4.0)	1.5	23.0	二次加工により左右対称の形態を呈する石筥の基部
図21-19	表採	I層	搔器	珪質頁岩	3.3	1.9	0.65	3.3	背面側の末端に二次加工により弧状の刃部を形成する小形の搔器
図22-1	VII-Q-100	II層	削器	珪質頁岩	8.1	2.7	1.8	21.4	縦長剥片の左側縁に直線的な刃部を形成
図22-2	表採	I層	削器	珪質頁岩	(3.9)	3.3	1.85	25.6	素材剥片の左側縁に直線的な刃部を形成 折損
図22-3	表採	I層	削器	珪質頁岩	7.8	5.8	2.7	81.5	素材剥片の左側縁に挟り状の刃部を形成 右側縁及び末端に二次加工による成形
図22-4	VII-M-105	II層	削器	珪質頁岩	4.4	5.35	1.3	26.5	素材剥片の左側縁に挟り状の刃部を、末端に直線的な刃部を形成
図22-5	VII-F-105	III層	削器	珪質頁岩	3.45	2.4	0.8	6.4	背腹両面に求心的な二次加工を施し左右対称の形態を形成 正面左側縁に連続的な微細剥離痕を形成する
図22-6	表採	I層	削器	珪質頁岩	2.25	1.5	0.45	1.4	小形の度合を特徴とし、左右両側縁に二次加工により刃部を形成
図22-7	表採	I層	削器	珪質頁岩	2.35	2.1	0.5	2.1	小形の度合を特徴とし、左側縁及び末端に二次加工により刃部を形成
図22-8	VII-F-103	風倒木	二次加工剥片	珪質頁岩	6.3	5.9	1.4	38.6	素材剥片の左右二側縁に挟り状の二次加工を施す
図22-9	VII-T-106	II層	二次加工剥片	カルセドニー(石英)	3.55	6.1	0.8	14.3	素材剥片の左側縁に連続性の低い二次加工を施す
図22-10	表採	I層	二次加工剥片	珪質頁岩	(4.7)	3.4	1.1	15.3	素材剥片の左右両側縁から末端にかけて連続性の低い二次加工を施す
図22-11	表採	I層	微細剥離痕を形成する剥片	珪質頁岩	3.65	2.4	1.1	8.2	素材剥片の鋭利な末端に連続的な微細剥離痕を形成する
図22-12	VII-L-102	II層	微細剥離痕を形成する剥片	珪質頁岩	2.6	2.4	0.9	3.2	素材剥片の鋭利な右側縁及び末端に連続的な微細剥離痕を形成する
図22-13	表採	I層	石核	珪質頁岩	7.4	5.0	2.4	90.5	重厚な大形剥片を素材とした石核 素材剥片の側縁を打面に設定し、素材剥片の背腹両面において並列に剥離作業が進行する。右側縁に、搔器の刃部と同質の二次加工及び鋸歯縁を形成する
図23-1	表採	I層	敲石	凝灰岩	10.4	7.5	6.3	454.1	末端から右側面の後に敲打痕
図23-2	VII-J-98	II層	敲石	凝灰岩	9.3	6.9	4.8	363.1	表面の中央に敲打による一単位の凹部を形成
図23-3	VII-J-101	II層	磨石	凝灰岩	14.1	13.7	3.6	850.5	扁平な円形形の表裏両面に磨痕と敲打による凹部を形成
図23-4	VII-K-98	II層	磨石	凝灰岩	10.5	6.8	4.4	492.4	表裏両面に磨痕を形成 表裏両面及び両側面に敲打による二単位の凹部を形成
図23-5	VII-F-103	III層	磨石	凝灰質砂岩	(8.6)	7.3	3.5	349.3	上下面に磨痕 下面・右側面の後に剥離痕 鋭角な両側縁に平滑面を形成し、端部に敲打痕を形成 磨面及び敲打痕に伴う剥離痕を形成
図23-6	表採	I層	石製品	デイサイト	4.8	5.0	1.3	48.1	円板状石製品 素材の周縁に表裏両面からの二次加工により整形
図23-7	VII-W-105	II層	石製品	凝灰質泥岩	6.35	5.25	1.95	46.5	自然作用による一対の挟り部に擦痕を形成



(遺構の時期・土器型式の量比から縄文時代中期中葉から後葉の組成を反映していると推測される。)

石器器種組成



遺跡近景（西から）



調査区南側全景（北から）



基本土層（北から）



シルト質層（IV層）と礫層（V層）の関係（北から）



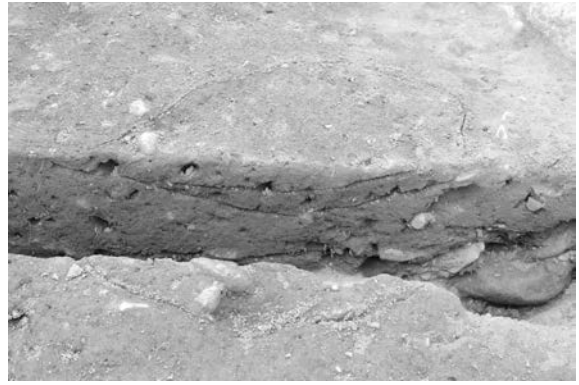
SI-1001・1002・1003・1005 配置状況（東から）



SI-1006・1007・1009・1010・1012 配置状況（西から）



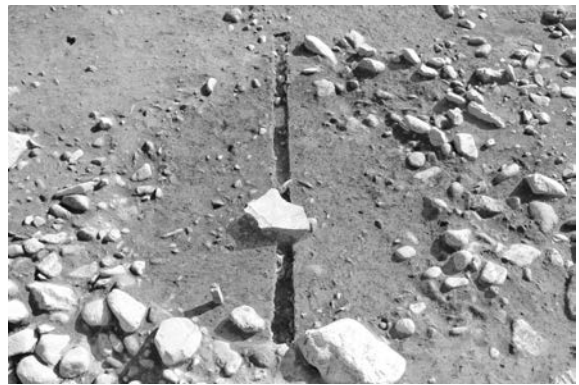
SI-1001 (新期) 完掘及び土層 (東から)



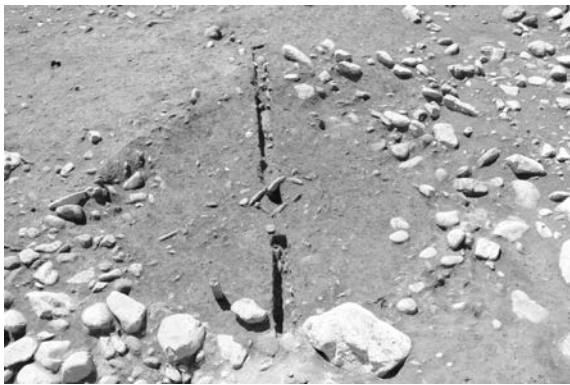
SI-1001 (新期) 炉跡土層 (東から)



SI-1001 遺物出土状況 (東から)



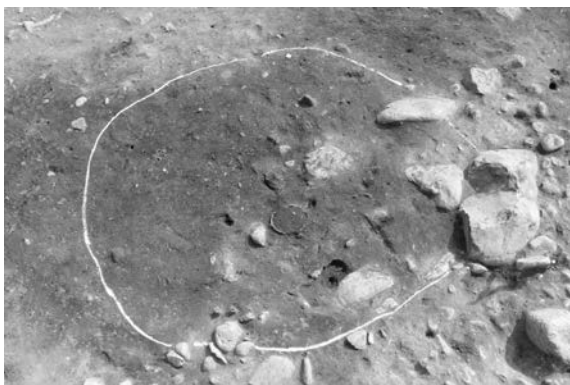
SI-1001 (古期) 石皿で覆蓋された炉跡 (北から)



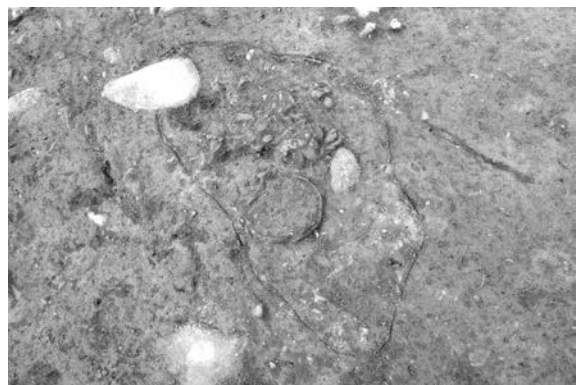
SI-1001 (古期) 完掘 (北から)



SI-1001 (古期) 炉跡検出状況 (北東から)



SI-1002 完掘 (北から)



SI-1002 土器埋設炉検出状況 (南から)



SI-1002 土器埋設炉土層（東から）



SI-1003 土層（西から）



SI-1003 完掘（東から）



SI-1004 床面検出状況（北から）



SI-1004 土器埋設炉検出状況（北から）



SI-1004 土器埋設炉土層（東から）



SI-1005 土層（東から）



SI-1005 遺物出土状況（西から）



SI-1005 作業風景（北から）



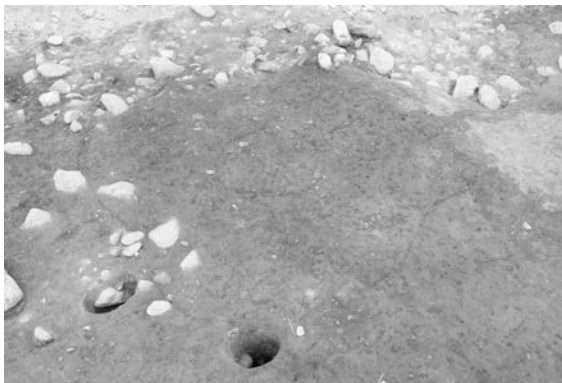
SI-1005 堆積土中の硬化面検出状況（東から）



SI-1005 石囲炉（新期）完掘（東から）



SI-1005 土器埋設炉（古期）完掘（南から）



SI-1006 検出状況（西から）



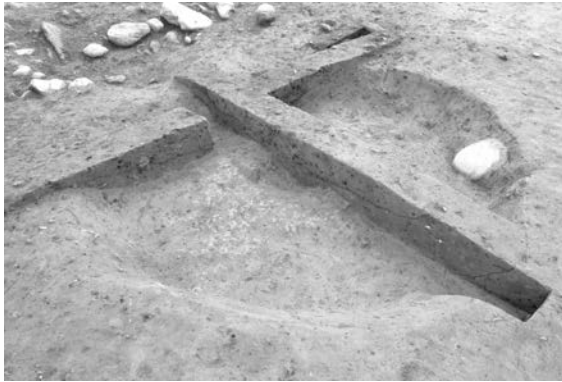
SI-1006 貼床土層（西から）



SI-1007 土層（南から）



SI-1007 完掘（西から）



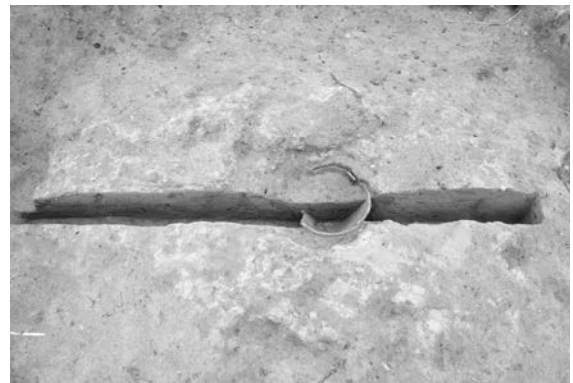
SI-1008 土層 (北西から)



SI-1008 完掘 (西から)



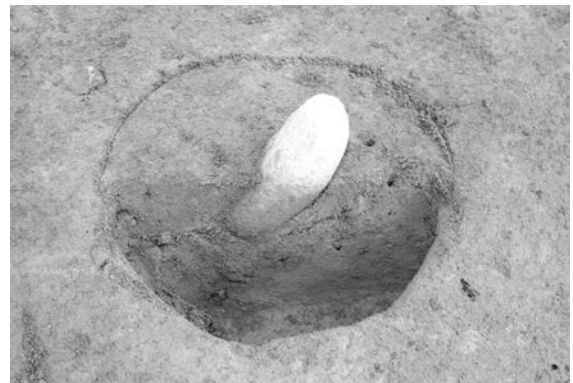
SI-1008 土器埋設炉検出状況 (西から)



SI-1008 土器埋設炉土層 (西から)



SI-1009 Pit1 土器出土状況 (北から)



SI-1009 Pit2 土層及び礫検出状況 (北から)



SI-1009・SI-1010 完掘 (西から)



SI-1009 炉跡検出状況 (西から)



SI-1011 土層 (南から)



SI-1011 完掘 (西から)



SI-1012 完掘 (南西から)



SK-1001 土層 (南から)



SK-1002 土層 (南西から)



SK-1003 土層 (南東から)



SK-1004 完掘 (南から)



SK-1005 土層 (南から)



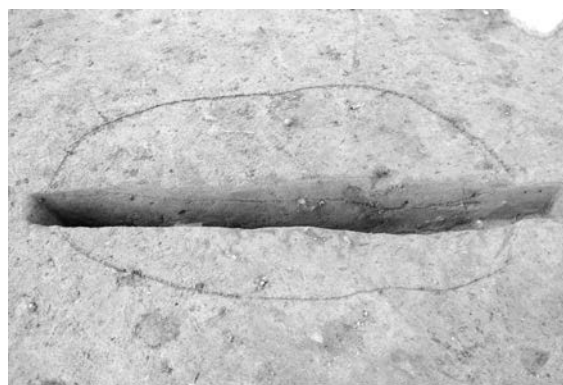
SK-1007 完掘 (南から)



SK-1008 土層 (西から)



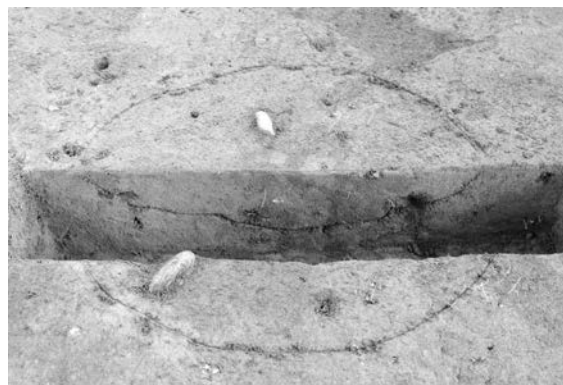
SK-1009 土層 (北から)



SN-1001 検出状況及び土層 (南西から)



SN-1002 検出状況及び土層 (南西から)



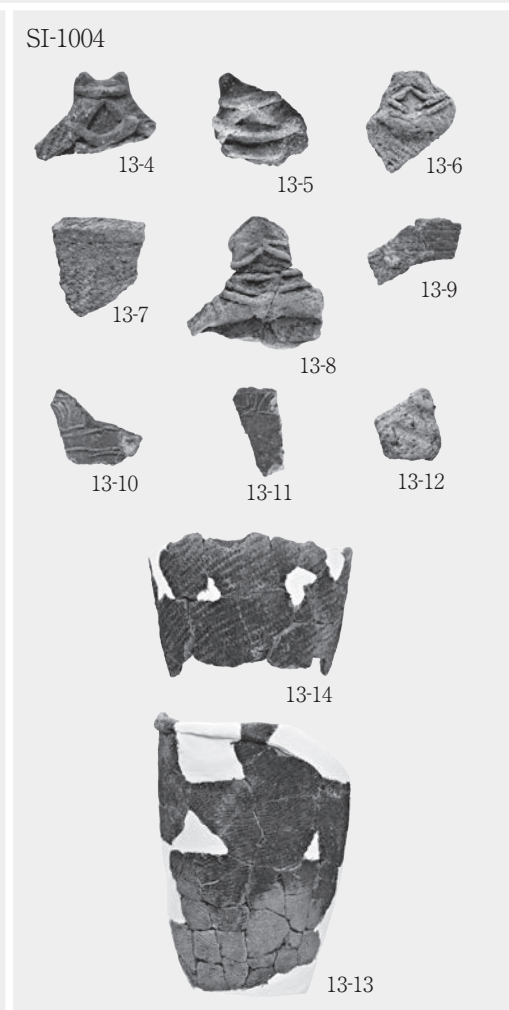
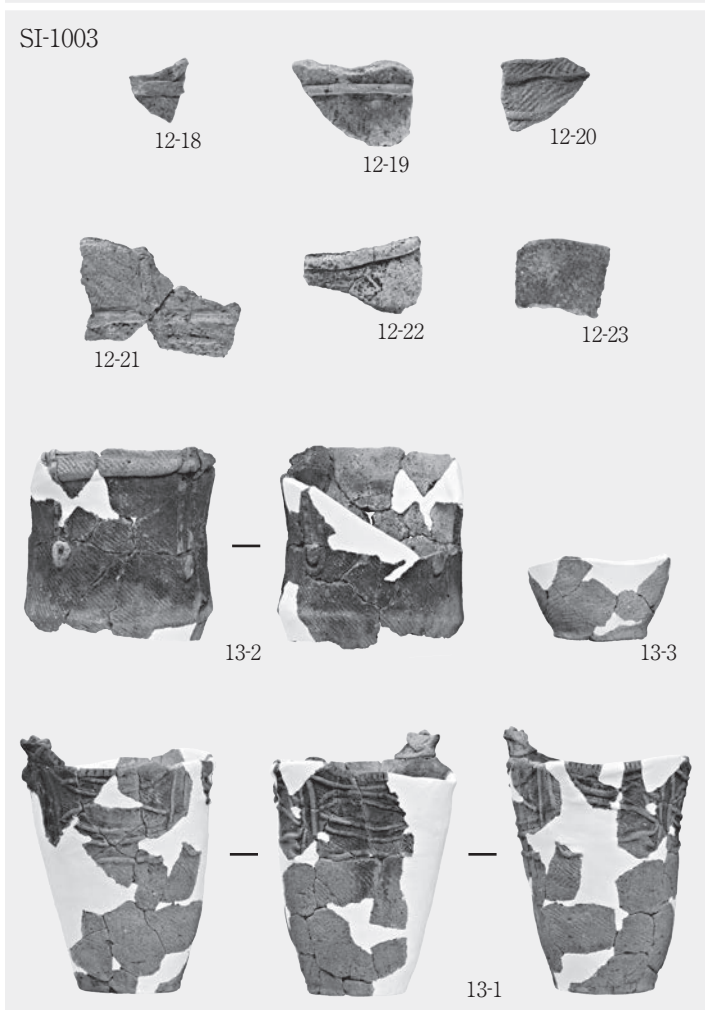
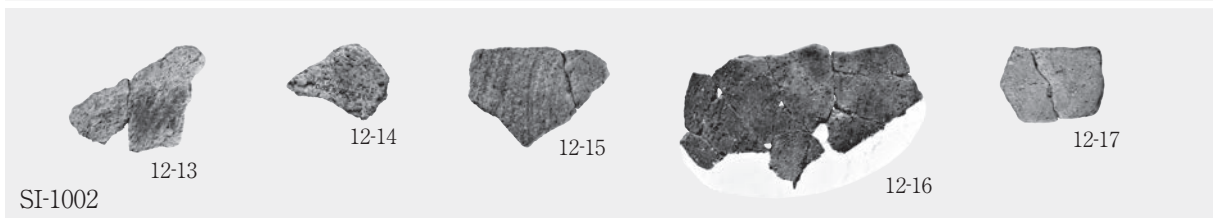
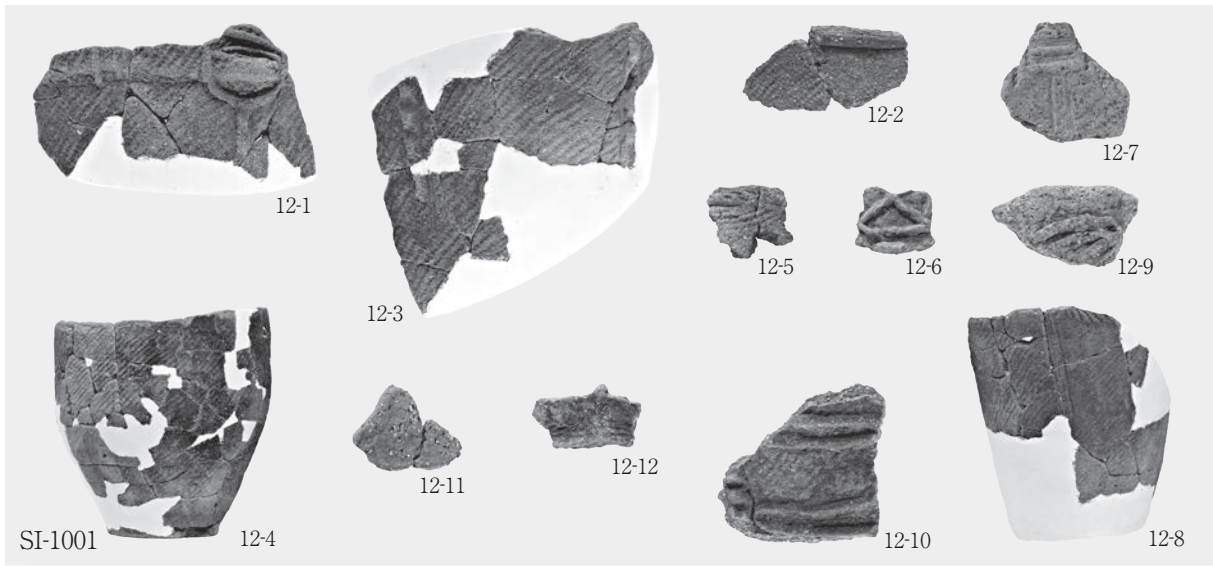
SN-1003 検出状況及び土層 (北から)

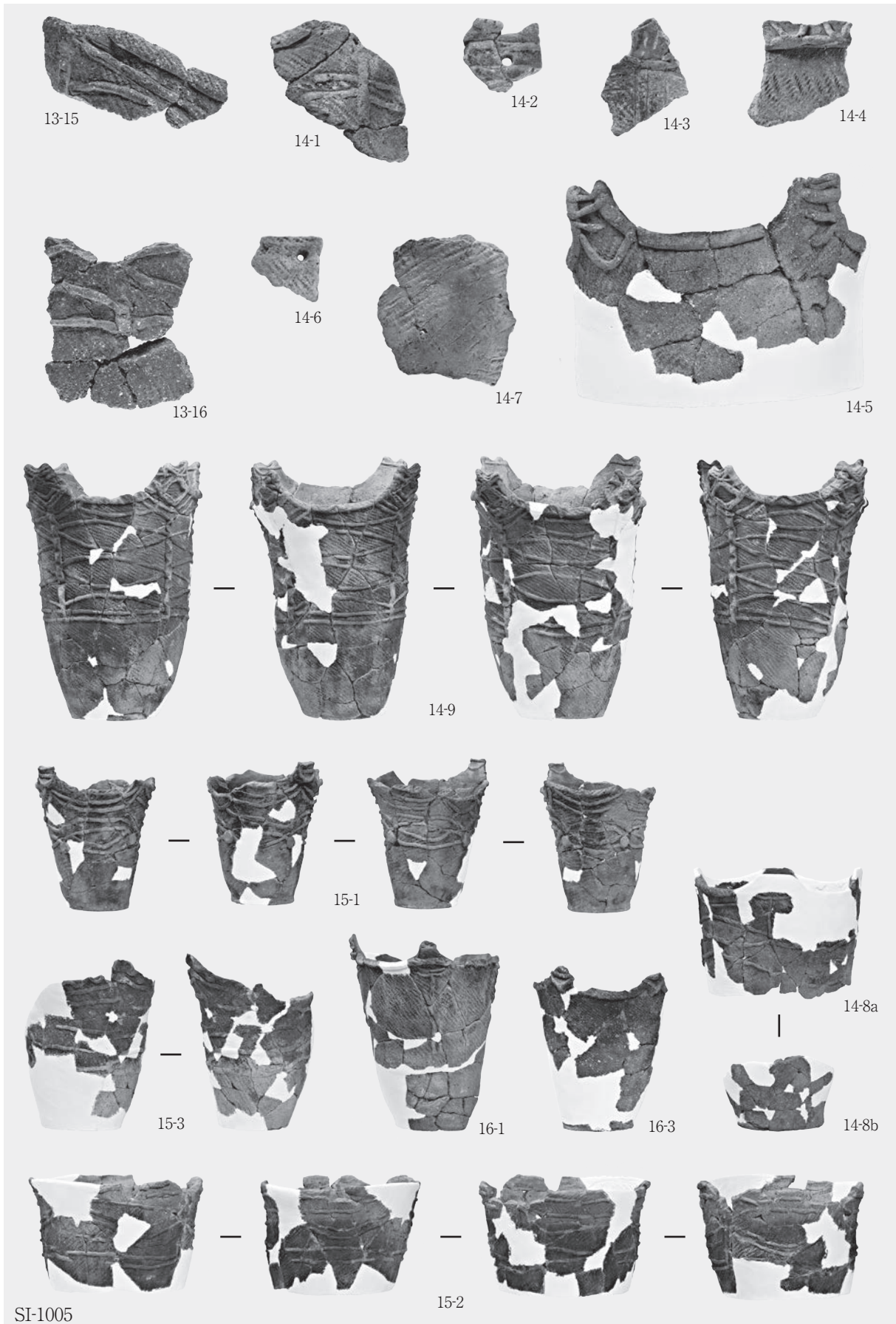


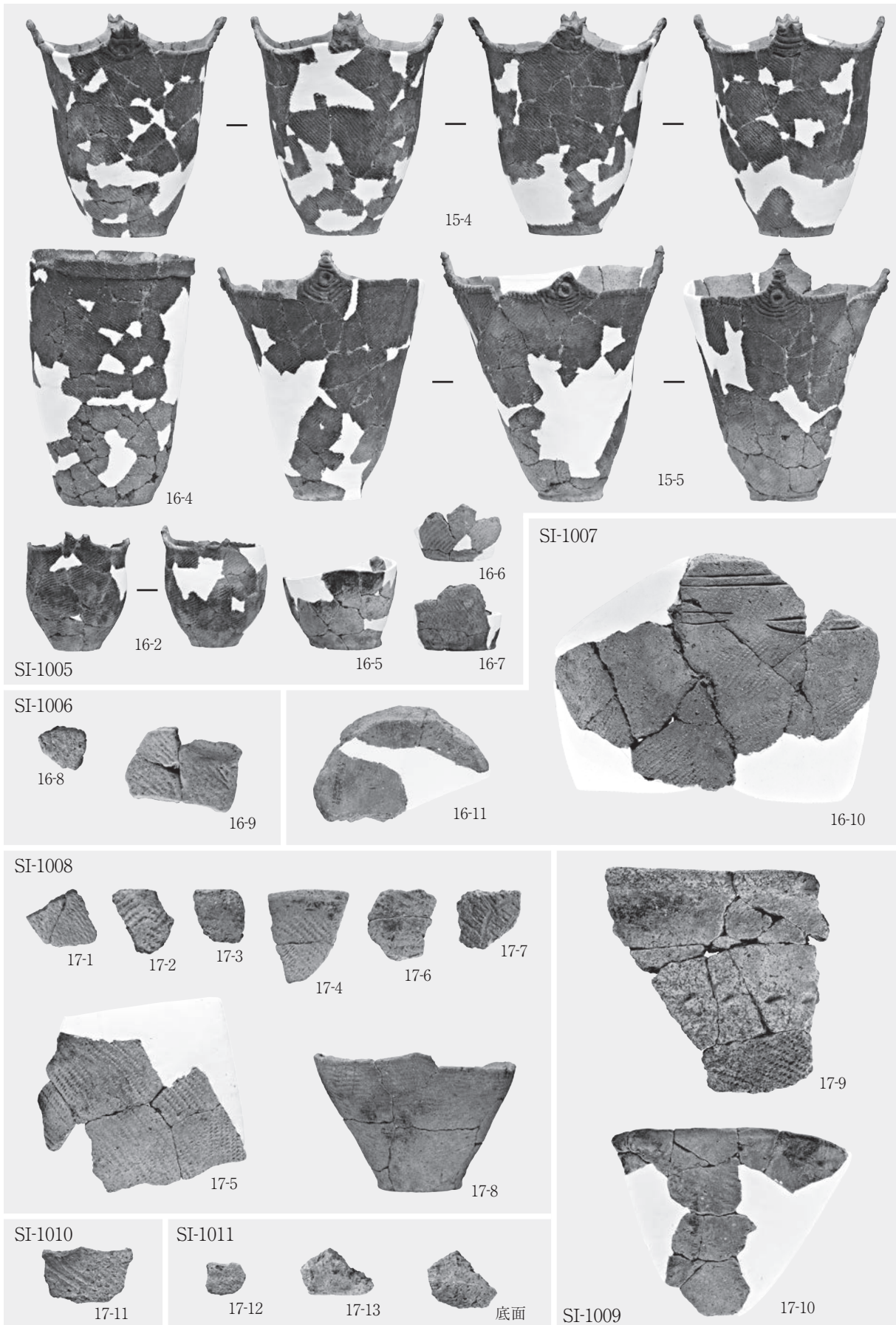
SR-1002 検出状況 (北から)



SR-1002 土層及び土器埋設状況 (北から)





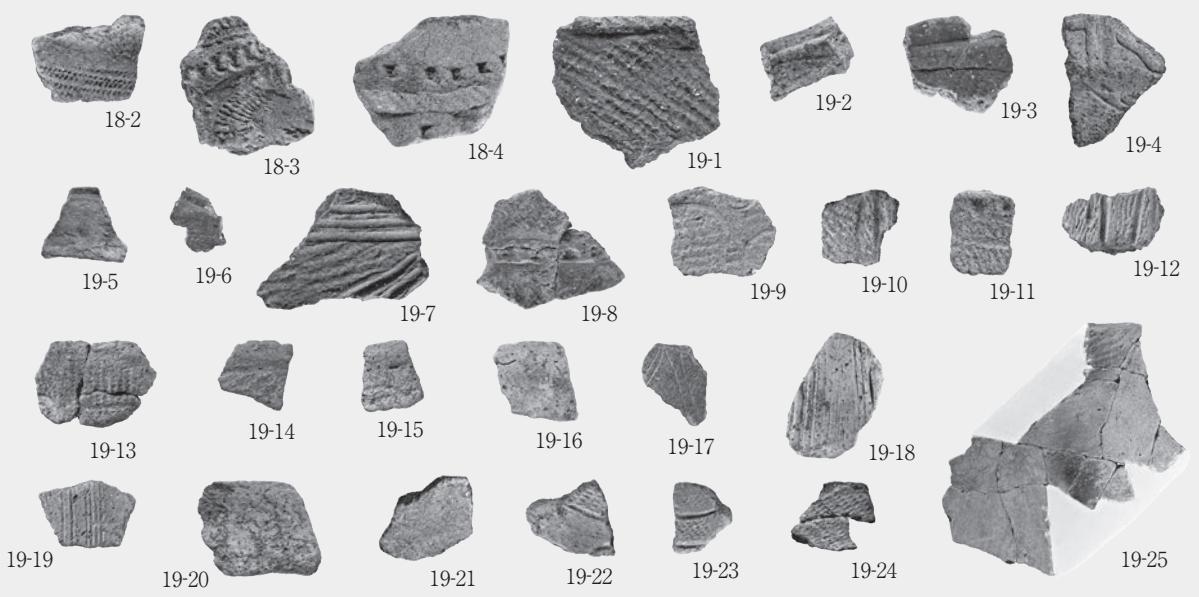
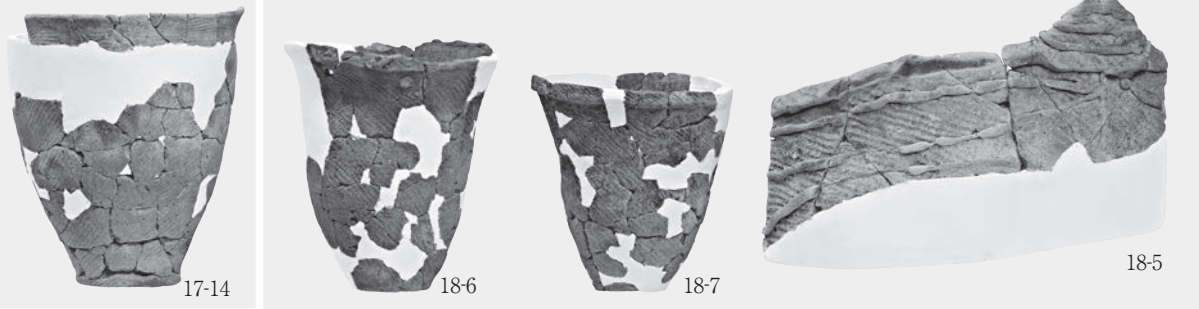


SK-1007

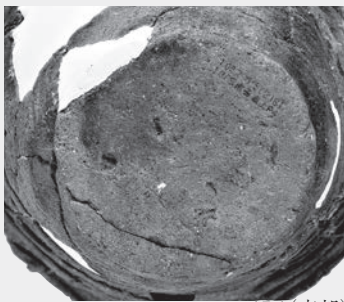


SR-1002

遺構外出土土器

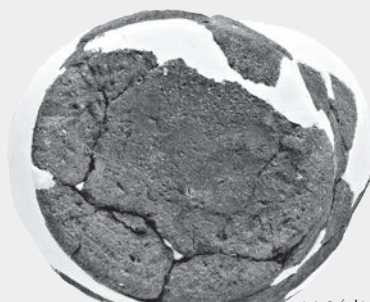


底部の網代痕を磨り消す例



15-1(底部)

僅かに底部の網代痕が残る例



14-8(底部)



16-7(底部)

外傾接合を示す例



15-3(拡大)



15-1(拡大)



15-2(拡大)



17-14(拡大)

文様の下描きが観察される例



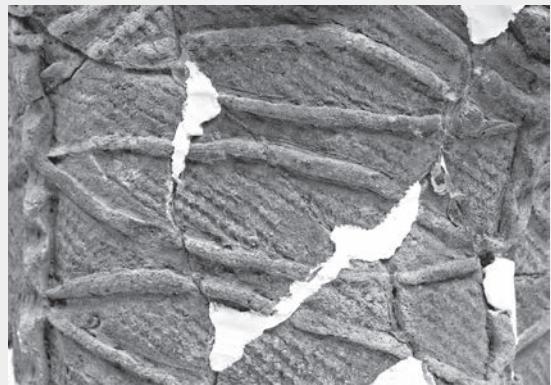
13-1(拡大)



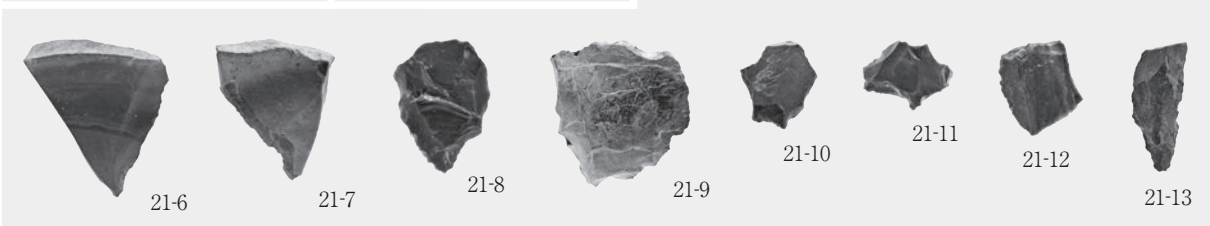
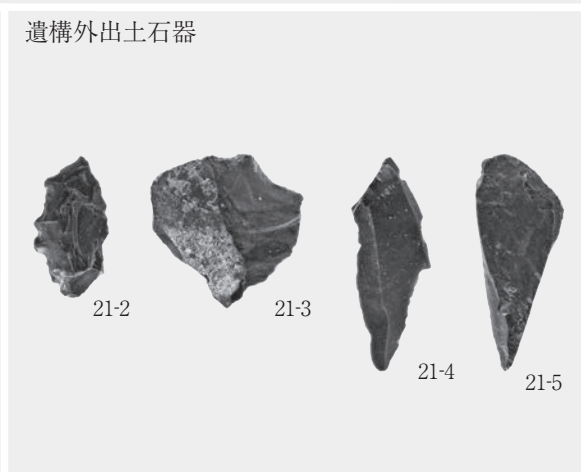
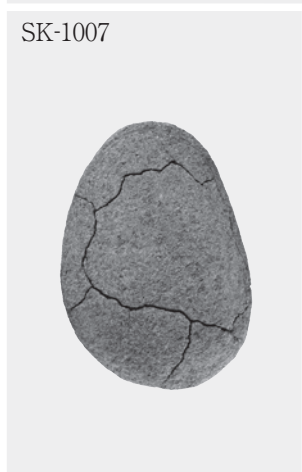
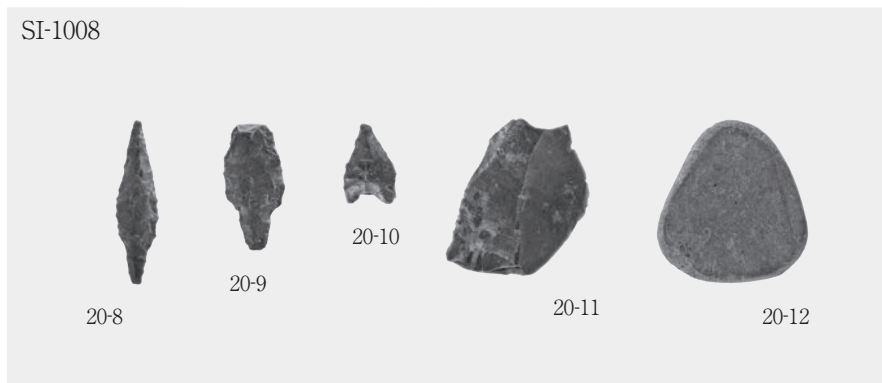
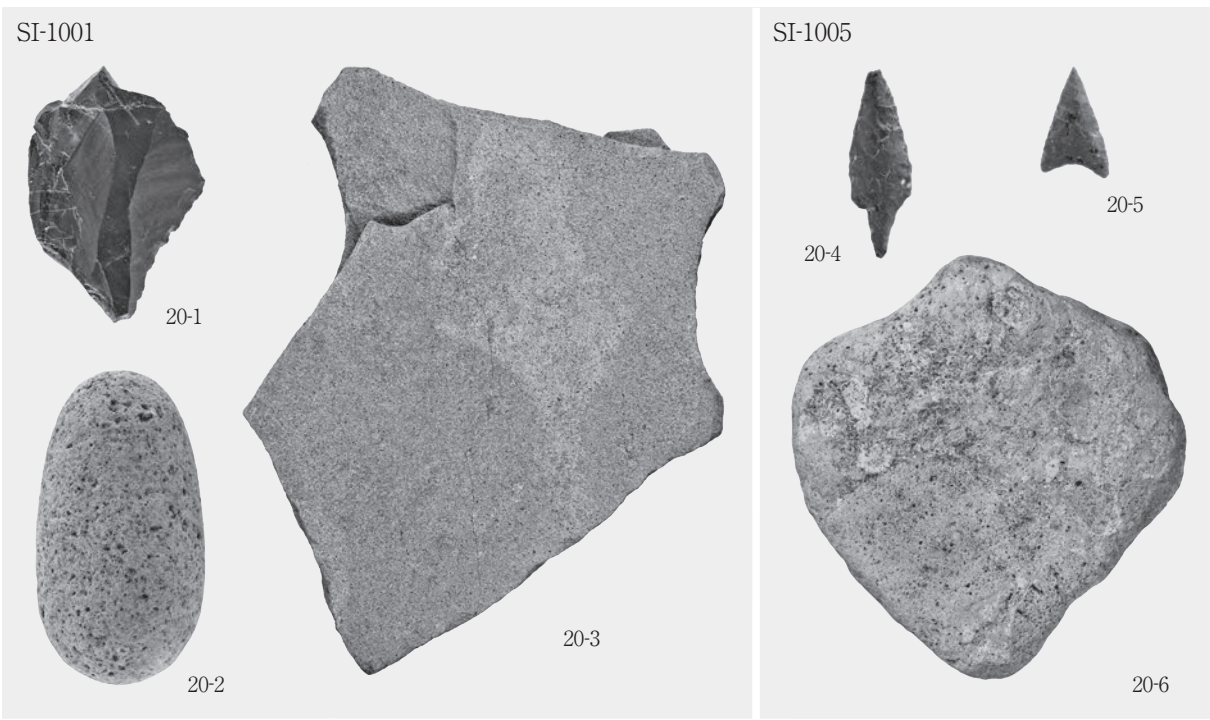
左の拡大



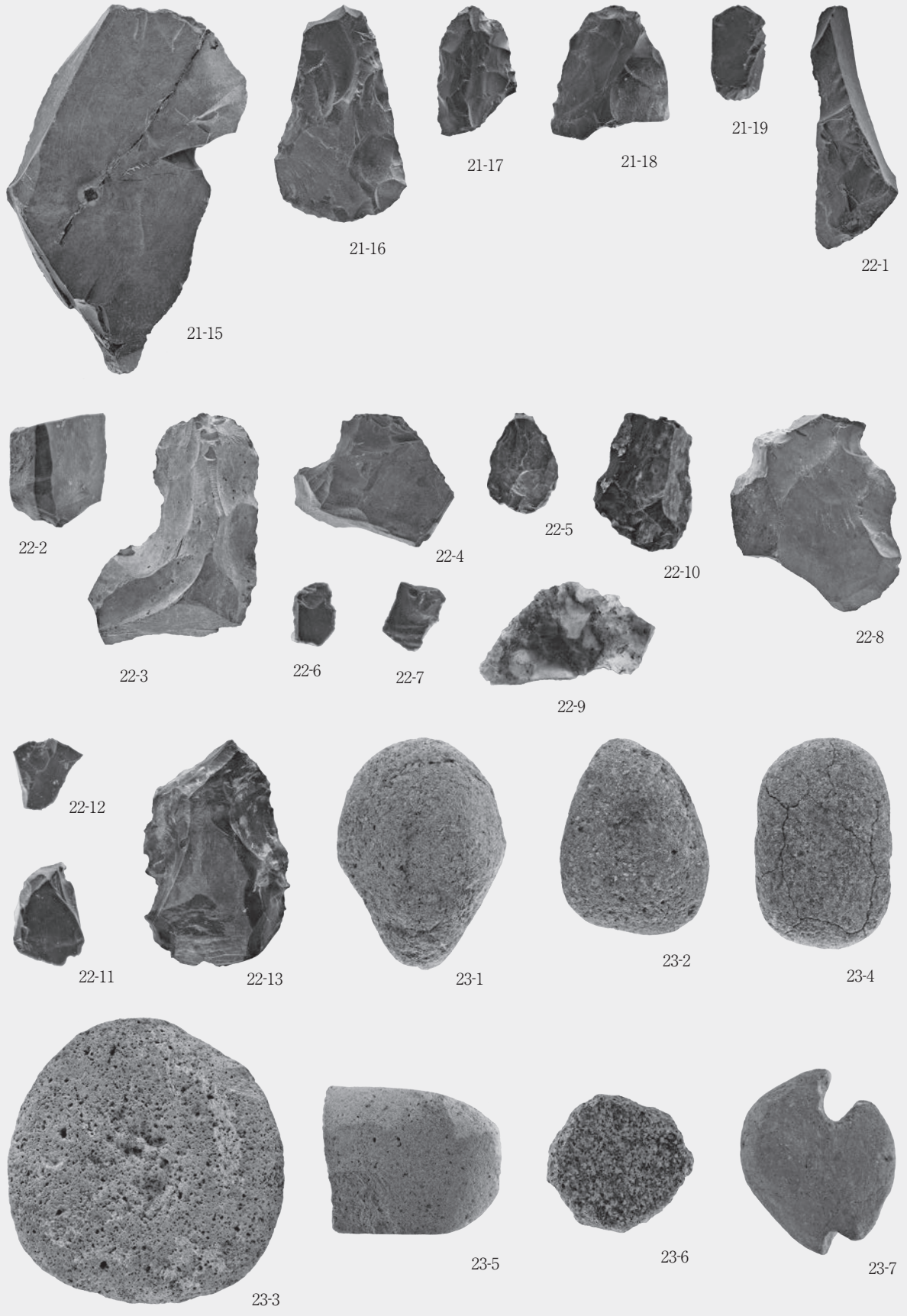
14-8(拡大)



14-9(拡大)



遺構外出土石器



報告書抄録

ふりがな	みずがみかっこにいせき							
書名	水上(2)遺跡							
副書名	津軽ダム建設事業に伴う遺跡発掘調査報告							
シリーズ名	青森県埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第514集							
編著者名	佐々木雅裕・菅原優太・荒谷伸郎・中嶋友文							
編集機関	青森県埋蔵文化財調査センター							
所在地	〒038-0042 青森市新城字天田内 152-15 TEL 017-788-5701 FAX 017-788-5702							
発行機関	青森県教育委員会							
発行年月日	西暦 2012 年 3 月 28 日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		日本測地系 (Tokyo Datum)		調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
		市町村	遺跡番号	世界測地系 (JGD 2000)				
				北緯	東経			
みずがみ いせき 水上(2)遺跡	あもりけんなかつがるぐん 青森県中津軽郡 にしめやむらすなこせあざみずがみ 西目屋村砂子瀬字水上	02343	343025	40°	140°	20100803 ～ 20101028	3,500	津軽ダム 建設事業 に伴う事 前調査
				31′	14′			
				52″	55″			
				40°	140°			
				32′	14′			
				02″	43″			
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物	特記事項		
水上(2)遺跡	集落跡	縄文時代	竪穴住居跡 12 棟 土坑 8 基 土器埋設遺構 1 基 焼土遺構 3 基 Pit 8 基	縄文土器・石器・ 石製品	・盛土遺構の周辺に竪穴住居跡が 高い密度で分布。 ・円筒上層 d 式および円筒上層 e 式の一括資料が出土。			
要約	<p>水上(2)遺跡は、平成 18 年度の第 1 次調査から平成 21 年度の第 3 次調査を通じて、竪穴住居跡・土坑・盛土遺構・捨て場(斜面盛土)・石棺墓等で構成される、縄文時代前期末葉から中期末葉に至る大規模な集落跡であることが把握されている。</p> <p>平成 22 年度の第 4 次調査では、遺跡の南限と東限にあたる区域を調査し、集落外縁の様相を把握するとともに、縄文時代中期中葉から後葉の竪穴住居跡を主要とする遺構を検出した。竪穴住居跡の分布状況には、偏在するあり方と空白域が存在するあり方が看取され、同時に、偏在するあり方には量的な不均衡を示す傾向も窺われる。また、住居の主軸方位には二つの異なる方向性が示され、集落構造が備える一側面を示唆するあり方として注意される。</p> <p>さらに、円筒上層 d 式土器および円筒上層 e 式土器の一括資料が出土し、型式学的特徴および技術形態的特徴を提示する好例となる。</p>							

青森県埋蔵文化財調査報告書 第514集

水上(2)遺跡

－津軽ダム建設事業に伴う遺跡発掘調査報告－

発行年月日 2012年3月28日

発行 青森県教育委員会
〒030-8540 青森市新町二丁目3-1

編集 青森県埋蔵文化財調査センター
〒038-0042 青森市新城字天田内152-15
TEL 017-788-5701 FAX 017-788-5702

印刷 不二印刷工業株式会社
〒030-0902 青森市合浦一丁目10-16
TEL 017-741-5439 FAX 017-741-2541



活彩あおもり